

---

# 雨と老女と花と私

こつぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨と老女と花と私

### 【Nコード】

N8094A

### 【作者名】

こつぶ

### 【あらすじ】

組織崩壊から1年半が経過した。解毒剤も完成し、江戸川コナンは工藤新一に、灰原哀は宮野志保の姿に戻っていた……。全ての生活にうんざりしていた志保が出会った、ある雨の日の出来事です。＜注意＞これは、話の都合上、ややこしいですが、新蘭でもあり、コ哀（正確にいうとコ志）でもあり、新×志でもあります。どっちつかずで恐縮ですがよろしく願います。

## 第1話 出会い

駅の改札を出ようとして、彼女、宮野志保は小さく「あら」と呟いた。夕立だ。

薄い雲からパラパラとまるでシャワーの水を出し始めたときのように、少しずつ、強く雨水は地上に降りてきた。

「…参ったわね」

雨なんて降る予定はなかった。昨日からずっと研究室に閉じこもりっぱなしでテレビなんてつけることもしなかったから。

今日は今日で博士に頼まれて、都心をぶらり、隣の豪邸に一人で住む彼と買い物をして。そのとき彼は傘を持っていたはずではあったが、その彼もそのまま事件と聞いて自分を置いて飛んでいってしまった。まあ、彼もまさか本当に傘が必要となるとは思っていなかったのだろうけども。なんとなくぼんやり考えながら改札を出たら降りるはずだった米花駅より1つ手前の駅で。

自分らしくない。そう思わず苦笑して、昼間の暑さがほんの少し抜けた町を米花駅まで歩こうと志保が決めたそのときにきたのが夕立。なんだか今日はついてない。

解毒剤の事後観察（検査）のための週に1度の往診も半年前に終え、仕事やデート、学校の単位取得のための補講などが忙しいのか隣だというのに顔を合わすこともなくて。それが寂しいとかそういう気持ちがあったはずはなかったし、万一あったとしても誰かに零したこともなかったのに。

朝、予告もなく半年ぶりに顔を見せ、「荷物もちに」とやってきた彼はとてもきらきらと輝いていて、眩しかった。

自分とはまるきり違っていたから。

医科大学に入学しては見ても、全てが昔習った知識でつまらなくて。小学生として授業を受けていたあのときよりも知識としてはまるきり高度な授業をしている。そう、誰が見たって明らかだ。

けれども実際過ごしていた時間はあの中にすごく凝縮されていて、とっても楽しかった。

出あった仲間と過ごした毎日。度重なる事件や冒険に遭遇し、時には危険に巻き込まれ、どんな難問も彼と一緒に、彼らと一緒に乗り越えてきた。

純心な子供たちに包まれ、守られ、自分は生きてきた。汚れたココロを洗い流されたような、生まれ変わったようなそんな気持ちを毎回味わってきた。

なのに今じゃ。くだらない授業。くだらない仲間。くだらない会話。全てがくだらなくて、逃げたくて。耳を塞ぎたくなる現状。

（ああ、どうして私は元に戻ってしまったのだろう）

そんなことを考えていたらこの駅で改札を抜け、そして夕立に遭った。もう最悪だ。

最近話題の「駅ナカ」もこの駅には無縁の話。ちよつと都会の杯戸駅なら、カフェや専門店、選ぶほど多様にあるけれど、この駅には何もなかった。あるのは駅が運営する小さなスペースで一人の店員が切り盛りする、ただの売店。コンビニすらない。傘を買おうと見ていると、既に売り切れの文字。

「参ったわね」

彼女はもう一度同じ台詞を呟いた。

駅を出て、逃げるように地下と駅を繋ぐ歩行者用通路の中に体を滑り込ませた。

車の通りが激しいため設けた歩行者用通路。少しでも雨が当たたら

ぬように。どこへつながれているのか判らなかつたし、そんな思いつきの行動の生で道に迷ってしまうような気がしたが、彼女の足はずんずんと前へ前へと進んでいた。

まだ地下に降りて間もない時間。彼女はふと、足を止めた。麻の掛け布を身に纏った老女が路上販売をしていた。

60代、あるいは70代前半だろうか。それとも、もつと実は若くて、その人生の経緯でこんなに衰<sup>やつ</sup>れさせてしまったのだろうか。

彼女は花売りなのか、路肩にビニールシートを引き、その上に直に色鮮やかな花を数種類並べている。鉢ものももちろんあったが、彼女の目に映ったのは切花だった。

水差しだとか、アルミホイルの中にスポンジなどで湿らせて、それを切った部分に巻く、とか。花を活かす基本的な方法でさえ一切使われてなくて。雨が降ってはいてもこんな長時間さらされていたら萎れているのは必然だ。

「買ってくださーい」

時々呟くように言うその弱弱しい声も、強い雨音に消し去られて。そのホームレスのような汚らしい身なりも相成ってか、道行き交う人は誰も彼女を見ようとはしない。人通りは少なかったけれども、誰かしらその老女に視線を浴びせることがあってもいいのに。その視線がたとえば嫌悪感だけであつたとしても。まるでその老女が少しも視線に入らないかのように。まるで元から居ない人物であるかのように。人々は冷たく老女の前を素通りしていく。

「買って、くださあい」

震えたようなしゃがれたようなそんな声を一生懸命張り上げようとする老女を見て、あまりに居た堪れなくなつて、志保は彼女に近づいた。

「それ、いくら？」

「…え？」

「その赤いの。…珍しいわね、名前はなんていうの？」

鉢物ではなく、今にも萎れそうな花を選んだ。

「カンナじゃよ。それほど珍しくもないと思うが…見たことないかね」

先ほどの弱弱しい表情とはうってかわって、にやり、と、まるで小馬鹿にした表情で老女は笑った。その表情があまりに違うから一瞬驚いてしまう。まるで獲物を『捕らえた』というような表情。悪い人に捕まってしまったかしら、なんて薄ら頭の奥で考えてしまう。それでも、平静を装っていいえ、と志保が答えると、老女はカンナという赤い大きな花びらが印象的なそれを数本まとめて無言で手渡した。

「売れないの？」

「ああ、今日買ってくれたのはおまえさんだけじゃ。おかげで声からからじゃし、花は弱ってしまっただし」

活かす努力をしないから余計にお客には逃げられるし、花は弱ってしまっているのではないかとは思ったが、「ご老体にはキツイわね…」と思わず苦笑すると、近くにあった自動販売機から缶ジュースを買い、彼女に手渡した。

「ありがとう」老女はそう呟いて、それをうまそうに浴びるように喉に流し入れた。ごく、ごく、ごく。と喉が鳴る音がする。その姿に先ほどまでの生気のないその様子がまるで嘘であったかのように感じられた。

「ありがとう。…もう今日は店をしまうことにしよう」

「えっ？…だってお花」

「あんたに出会えたことが今日の収穫じゃ。こんな見ず知らずの老人に優しく声をかけてくれる娘はいなかった。…ありがとう」

嬉しそうに、しわくちやに顔を緩ませて笑う老女につられ、志保も思わず微笑み返す。

「この切った花、全部あんたにやろう」

「え？」

「萎れていて申し訳ないがの。先ほどあんたが来る前に入れていたバケツを若いもんに壊されて使いモンにならなくなってしまったんじゃない…」

老女が指差す方に目をやれば、彼女が座っていたイスが実はアルミのバケツだったと気づく。座布団をどければ、その下は無様に穴の開いたぼこぼこのバケツ。

「せめて日が沈むまで、と頑張ってみたものもやっぱり一つも売れず。今日はツイていない、と最後の悪あがきをしていたときに出会ったのはあんたさんだった。…ここまで粘って正解じゃったよ」  
「そんな」

志保は申し訳ない気持ちになって首を横に振った。老女は手早く数種類の花をカンナと一緒に一つに束ねると、抱えきれないほどの花束を一瞬にして作った。そして、持ちやすいように彼女に持たせる。片手一杯の大きな花束。

「おばあさん、やっぱり…。もう一鉢買っわ。これだけじゃ悪いも

の」

「いいんじゃないよ。それを持って早く家に帰りなさい」

「傘がないもの」

「そんなの通りを出たらどこでも売っているじゃろ」

「そうだけど…」

「早くこの道を行きなさい。外が暗くなる前に」

「…ええ」

どうしてだろう。まるで急かされるように追いつ立てられるように、志保は老女にサヨナラを告げ、その場を去る状況に立たされてしまった。いつか日にちを改めて何か御礼をしなければ。一旦歩き始めた足を止めて振り返れば、老女はにっこり笑ってこちらに向かって手を振っていた。

「そうじゃ、娘さん」

「…?」

振っていたその手を止めて、老女はゆっくりと志保の許へ歩み寄る。

「何か悩んでいるじゃろ」

「え」

ぎくり、として志保は老女を見つめた。腰が曲がっているせいか、それとも元より背が小さいのか、自分より数十センチも背の低い老女が、こちらを見上げて、にやにやと笑みを浮かべる。その笑みに少し不気味さを感じて、一瞬志保は後ずさった。

「一度だけじゃ」

「え?」



「一度だけ願いを叶えてやろう。ぜんぶひつくるめてこれは今日のお礼じゃ」

魔女のように長く鋭い爪が、腰の高いカンナの花をつん、と小さく小突く。

カンナの花は一瞬大きく揺れた。花の香りがほのかに鼻腔につく。どきり、として志保は老女を見つめた。

「は…？何、言って…」

「信じるも信じないのもおまえさん次第。おまえさんは願いがあるはずじゃ。おまえさんの欲しいものはあるはずじゃ。それを叶えてやろうというんじゃ。やらないでそのままにして別れるより、試してみても損はないと思うがの」

「願いなんて…」

「あるはずじゃよ、あんたには。ずっとそのココロの中に」

とん、とそのへこんだ自分の胸を叩いてみせる。

「…もっと、素直になってもいいんじゃないかね？」

そのあとのことは覚えていない。老女と別れてからよろよろとたどどしい歩みでこの道を歩き続けていた。まるで魔法にかけられたような。足を重りにされてしまったような。そんな魔法。一日でこんなに疲れるとは思わなかったから。

ボケたおばあさんに付き合っただけ。本当はそんな単純なことだったのかもしれないけれど。

でも。

志保はずっとその道を歩き続けていた。

はたして、この道はこれほどまでに長かっただろうか。この駅は初めてだというわけではなかったのに。小学生の姿をしていたとき、「灰原哀」という姿をしていたとき。数回少年探偵団のメンバーと歩いた覚えがある。事件を追って走った覚えがあるこの道。しかし、それ以前に長く感じられた。子供の足ではない、大人の足で歩いているというのに。

疲れが足を重くしているのだろうか。

ようやく出口が見え、ほっとして地上へつながれた階段へ上った。眩い光。地上を出れば、そこには。

そこには。

## 第1話 出会い（後書き）

・・・こつぶです！。まさか連載になるとは思ってもいなかったのですが・・・。

「雨の放課後」の夏バージョンのはずが。・・・まるきり変わってしまいましたー><！

これからもよろしく願います。多分「時をかける少女」の影響大だと思えますー・・・。はう><！

## 第2話 再会

眩い光に照らされて、彼女は思わず両手で光を遮った。  
トンネルを抜けると、そこには。

そこには、いつもと変わらぬ町並みがあつた。駅の中身とは裏腹に、この1年でちよつと町が大きく、都会的に変わっていたのは驚いたが、そのほかには何も変わらない、1年前と同じ匂いを感じた町並みがそこにあつた。

「・・・なんだ、何も変わらないじゃない」

拍子抜けして、思わず嘆息を一つ零していた。ため息だつて出てしまう。あんなに真面目な顔でしわくちやのおばあさんの思わせぶりの言葉によつてちよつと信じてしまった自分にも腹が立つ。一瞬、願ってしまったことにも。

全部、あるわけないのに。

家やビル、それに店があつて。八百屋のおじさんの威勢のある声、そして夕食の準備をするためにスーパーの中に入っていく母子連れ。夕方だというのに、一人ガシャポンを楽しむ少年。別に、何を期待したわけでもないけれど。

たとえば、誰もいない世界があつたり。たとえば誰も自分を知らない世界であつたり。外国だったり、ファンタジーの世界みたいにゲームの世界だったり。そんな魔法みたいな、夢みたいな世界があ

ったりしてもよかったのに。

「・・・馬鹿馬鹿しい。何を期待していたのかしら・・・」

家へ帰ればきつと博士が待っている。早く夕食の準備をしなければ。そう思い、志保はゆつくりとトンネルを抜け、ロータリーを歩き出した。

近くのコンビニでビニール傘を急いで買い、駅にそって歩き出す。そのとき目にしたレジの機械や店内の装いが、家の近くにある同じチェーン店のものとは違う、そんな気がしたけれど、きつと新しく変わったのだと思い、気にも留めなかった。

「ありがとうございましたー」

店員のいつもと変わらぬココロのこもっていない挨拶を背にコンビニを出て、傘を開く。バシャバシャと地面に溜まり始めた水面を蹴りながら前へ進んだ。実際何か変化が欲しかったただけなのだ。変なおばあさんに出会って、感謝をされて、しおれていたけれど沢山の花をくれて。それを手土産に家に帰る。そんなことがあってもいいじゃないか。いつもこんなことが起きるなんてことはない。ボケた老女に声をかけられることも稀なのに、こんなに感謝されて。

花束なんて作ってもらって・・・ああ、もう立派な「変化」「変わったこと」ではないか。

そうは思いながらもどうしてこんなにむかむかするのだろう。悲しくなるのだろう。騙された、という気持ちが強いのもかもしれない。ただの「自分を魔法使いのおばあさん」と信じたボケた老女を少しでも信じてしまった自分がとても情けなかったのかもしれない。

胸にふつつとした怒りが沸き起こり、そして同時に哀しみに近いものもその中に溶け込んでいた。少し、休んだほうがいいのかもしれない。志保はぼんやりと雨降る公園のベンチに腰掛けた。そんなとき。

「・・・はい、ばらさん？」

聞いたことのない誰かの声に、志保はびくり、びくり、と肩を2度震わせた。

自分を呼ぶその声に、そして本来この体では聞くこともないその言葉に信じられない思いを感じていた。

「・・・何してるんですか？・・・こんなところで」

ぼん、と肩を叩かれ、おそろおそろ振り返れば、そこにはどこかで見たことのある面影を持つ青年が立っていた。

高校生、いや、大学生だろうか。長めの前髪を真ん中でわけた雀斑を頬に持った瞳の大きい青年。

「・・・あなた・・・」

思わず言葉を失った。光彦の 1年前まで同じ小学生をしていた彼の 最近本当に顔をあわせなくなった少年探偵団の一人にとてもよく似ていた。親戚、だろうか。彼には姉が一人いるが、兄がいるということ聞いたことがないから。

「・・・風邪、引いちゃいますよ。・・・いくら8月だからといっても、雨に濡れて何も起きないはずがない」

ほら、と青年は彼女にタオルを手渡した。

気がつけば夕立のせいで肩も膝も、足も濡れていた。傘が全然役に立っていなかったのだ。ぼんやりしていて微妙に場所がズレていたのかもしれない。

「どうしたんですか？こんなところで。・・・あ、そういう僕は映画を見に来たんですけど・・・。ほら、昨日あなたたちに勧められ

た映画。・・・やっぱり一人で見てもイイものはイイですよ。すごく感動したし、笑わせてもらいましたー」

嬉しそくに頬を上気させる青年に対し、志保はうんざりした表情で一旦目を伏せ、そしてまた顔を上げて彼を睨む。

「人違いよ。『灰原』なんて子じゃないし、そんな子知らない。それに、見ず知らずの人にタオルを貸してもらうなんてこと、私にはできないわ」

先ほどは見ず知らずの人に缶ジュースを買ってしまったけれど、それとこれとは話は別だ。

そんな自分を驚いたように目を丸くして見つめ、彼はぶつと吹き出し、おかしそくに腹を抱えて笑い出す。

「あはは、酷いな。何言ってるんですか。灰原さんが冗談なんて珍しい」

「冗談じゃないわ。真面目に言ってるの。茶化さないでくれる？」  
「じゃあ『見ず知らず』だなんて・・・熱でもあるんですか？昨日だって一緒にゼミ受けたじゃないですか？」

大きな、そして骨骨した手がぴとりと自分の額に伸びて、その感触に、その行為に、志保は思わず後ずさり、その手を強く振り払った。

「ちよっ！やめて！」

どうして男はこうなのだ。大学に行けばどうにかして話をしよう  
と『知り合い』を装い、何かにつけて話をしたがる。しかもくだらない話を。

聞きたくないのに。一緒にいるだけで虫唾が走るといふもの。日本の男はどうしてこんなに幼いのだろう。子供のころに持っていた純真さをいつのまにか忘れてしまっているのだろう。あんなに素敵なものをたくさん持つていたはずなのに。

子供に還らなかつたら、そんなことを思わなかつた。だけど、一度、子供に還つたから。一度、子供のキモチを、真つ直ぐさを間近で感じてしまったから。彼を、彼らを知ってしまったから。

・・・もう全てが否定的になっていたのかもしれない。

「・・・は、灰原さん・・・」

瞬間、驚いたように彼は自分を見つめ、それからしょんぼりと彼は項垂れた。

「・・・何を怒ってるんですか？」

「怒ってないわ」

「じゃあどこか体の調子が悪いとか」

「そんなんじゃない」

「だったらやっぱり怒ってる」

「怒ってない！」

強い雨の中、傘を差したまま見つめあう志保と青年。雨の降る公園で、立ったまま見つめあう二人。

「・・・」

沈黙が続いた。睨みあい、というか。・・・いや、睨んでるのは志保だけだ。この男のしつこさに辟易していたから。頭がよさそうな顔だというのに。・・・いや、男は頭がよくても悪くても、この年齢のオスというものはみんなこんな生態なのかもしれない。



メスを狩るために……。自分のモノにするために、振り向かせるためには……。否、メス、というより私は『獲物』もしくは『餌』か。ふっと口許を悲しく歪めせると志保はぐつと下唇を噛む。そんな様子を、彼はしばらく口をへの字にして見つめていたが、諦めたように口を開いた。

「……まああなたがそう虫の居所を悪くするのは大体見当がついていますがね」

「……そう。……だったら、早く」

「ええ。早く仲直りしてもらわないと。……こっちの身が持たない」

彼は無理やり志保の腕を掴むと、ロータリーの端まで来て、さつと片手を上げた。

すーっと音もなしにやってくる一つのタクシー。……車といえば車の形をしているのだが、どこか違うタクシー。新型、というか。斬新的なイメージの。

「……ちよつと、どこへ」

そんなことも気にする暇もなく、志保は自分の腕を掴むその力強い手を振り払おうとした。が、次の瞬間。彼が怒ったように早口で言ったその言葉を聞いた瞬間、一気に体の力が抜けた。

「どこつて。……あなたが喧嘩している相手。……彼の許に行つて、そして仲直りしてもらうんです。あなたたちの痴話喧嘩に、僕たちまで巻き込まれちゃたまらないですからね！」

「……っ！」

「さ、早く乗りますよ」

背中を押され、志保は半ばなだれこむようにその座席に座った。

「米花町まで……。えーと、確か」

ちらり、と彼が志保に目をやる。

「何？」

怪訝そうに睨めば、光彦は思わずハハハと苦笑した。

「嫌だな。工藤さんの家ですよ。」元祖”高校生探偵の『工藤新一』の豪邸です。そこに彼がいるはずでしょ？」

その言葉の含みに更なる不信感や疑惑を感じながら、志保はその住所を思わずポロリと口にしていた。

「米花町2丁目21番地……」

なぜこの男はそんなに自分のことを知り尽くしているのだろう。ふと、そんな疑問が沸き起こる。仮に彼が円谷光彦の親戚だとして。彼……円谷くんはそんな、クラスメートの事情を親戚に話すだろうか。家族にも秘密ことが多い彼が。そして、自分のことを『灰原さん』と呼んでいたのも気に掛かる。

（まさか……組織の人間？残党？）

ならば……。

「あ、あのっ！……その住所は……あの……間違いでっ」

いまさら、見ず知らずの、しかも胡散臭い人間に住所を教えてしまった危険の大きさに気づき、志保の顔はみるみるうちに青ざめた。

「・・・だろうね。・・・間違いにもほどがあるよ。昔の住所を言うなんてさ」

呆れたように、人相の悪い運転手が笑った。

「・・・え？」

きよとん、として志保は運転手の顔を見上げる。

「それとも頭よさそうな顔してるし、この俺を試しているのか？どれだけこの土地勘に優れているか。・・・でも残念だね。おねーちゃんのご期待通り、昔の住所言われても、頭わりいんですっぱり忘れてるんだよねえ。・・・ま、もともとよくデキた方じゃなかったが」

「ちよつと灰原さん」

慌てたように、少し蒼い顔をして、彼がすっとんきょうな声を上げた。

「まー、このタクシーには、何百年も前の住所もわかるっていう機能があるから大丈夫だけどさあ。・・・アナログを決め込んでる古い型のタクシーをまだ使っていたら、今の俺のアタマじゃあかんだらうね」

一通りガハハッと大きく豪快に笑うと、ゆっくりと運転席近くのコンピュータに顔を近づけた。

「米花町2丁目21番地、・・・だよ」  
「リヨウカイシマシタ」

機械的な音声がタクシー内に響く。彼はにやり、と笑って再び振り返った。

「すごいだろ？これ、自動運転。あんまり電気エネルギーを使うから使いたくないんだけどよ。今日はおねーちゃん美人だから特別だよ。兄さん、この別嬪さんに感謝しな」

「・・・あ、ありがとうございますっ。・・・すごいですよ、灰原さんっ。僕こんなタクシー乗るの初めてだっ。こんな田舎町でもあったんですね！」

半ば興奮気味に目をきらきらと輝かせる青年を信じられない表情で見つめながら、志保はしばし言葉を失っていた。どこへ連れて行かれるのかわからない。わからないけれど、今起こりつつある不思議なことに頭が着いていかなくなっていて。自分は夢を見ているのだろうか。

「シートベルト着用、オッケーデス力？」  
「オッケーですっvvv」

声をはりあげる青年。そして寝る体制に入った運転手。2人を見比べながら、志保は再び視線をその音のする機械に戻す。

「シュッパツ、シンコー！」  
「やったー！」

その瞬間、少しだけ車体が浮いたように見えた。それから音もなくすーっと動き始める。

「・・・???」

夢を見ているのだろうか。それとも、魔法をかけられてしまったのだろうか。車体は自分が進もうと思っていたところを確実に進んでいた。町の様子は少しずつ変わっていたけれども。その町「らしさ」は残っていたから。志保の住む町につけるとどこかで既に確信していたから。

それでもやっぱり信じることができなくて。志保は恐る恐る、隣の青年の顔を覗き見る。組織の残党とはどうしても思えなくて。雀斑をトレードマークにした、前髪を真ん中で分けて少し垂らした、そして瞳の大きな、そんな青年。去年まで身を置いていた少年探偵団のメンバーで、一緒に授業を受けたクラスメートでもある彼に似た青年。「灰原さん」と呼ぶその声の調子もまるきり彼が自分を呼ぶそれに似た、その青年。

「・・・ねえ」

気がつけば声が掠れていた。クーラーが強すぎたわけでもない。極度の緊張のせいだろうか。

「・・・はい？」

嬉しそうに、珍しそうに、まるで幼い子供が始めて乗り物に乗るかのようにそわそわと体を動かして車体を舐めるように見るその青年に声をかけた。

「あなたの、名前。・・・教えてくれない？」  
「はあ？」

怪訝そうに青年は自分の顔をまじまじと見つめた。

「ホントに・・・大丈夫なんですか？灰原さん。・・・まさか、ここに来る前にどこかで頭打ったりしませんでした？」

「してないわ。・・・してないから・・・。いいから質問にちゃんと答えて！」

志保は急かすように早口で彼に向かって声を荒げた。じゃあ夢でも見てるのかな・・・と、首を傾げながら彼はぶつぶつ呟く。それから、はつきりとした口調でこう言った。

「僕の名前は・・・円谷光彦。・・・帝丹医科大学に通う1年生です。あなたとは小学校から13年目の付き合いですね」

「・・・！」

その瞬間、しん、と辺りが静まり返ったように見えて、彼女はさらに言葉を失っていた。何も言葉を返しようがなかった。

「大丈夫ですか？」

心底心配そうに顔を覗き込むその青年の表情。1年前の彼の顔と重なってきて。

リアルに思い出される記憶。その人物とこの人物が一緒だなんて・・・。俄かに信じられないから。

運転手の軀をかくその音がやけに車内に響きわたっていた。その

軒が本当にコミカルにさえ聞こえたけれど、今の志保にはそれを気に留める余裕など持ち合わせていなかった。

## 第2話 再会（後書き）

こつぶですつ。やー、めちゃくちゃ楽しい！これからどうなっていくかあたしも楽しみですつ。

といいつつ、小説更新してる場合じゃないんだよねあ。・・・がんばろう、私<sup>ぼく</sup>。

小説書くの楽しくて現実逃避気味だけど・・・。うん、頑張ろう。

では、ここまで読んでいただき、ありがとうございました！



### 第3話 記憶

「僕の名前は・・・円谷光彦。・・・帝丹医科大学に通う1年生です。あなたとは小学校から13年目の付き合いですね」

そう目の前で語る青年に、彼女は暫し言葉を失っていた。どうにも驚きの色を隠せなかった。

（どういうこと？）

答えが見つからない。

自分が知っている『円谷光彦』はまだあどけない小学2年生。大人びた思考をしているけれど、1年でこんなに大人になるはずがない。それに彼が口にした言葉。『帝丹医科大学』『小学生から13年目』・・・もし、これが本当なら。彼が『工藤邸』にて自分にあわせようとしている人物とは、志保が今朝逢った『工藤新一』ではなく・・・。

「・・・ねえ、もしかして・・・今工藤さんの・・・『工藤邸』にいる人物って」

志保の問いかけに、『光彦』と名乗る人物は、それも忘れてしまったのかというように、悲しそうにため息をついてみせた。

「・・・コナンくんですよ。江戸川コナンくん。2代目高校生探偵で現在大学生探偵の。そして僕らのかけがえのない友達。・・・ねえ、一体どうしちゃったんですか？」

思ったとおりの答え。けれど、夢物語のような答え。

信じられないという顔で彼は二度三度志保の肩を揺するけれども、

彼女自身何も言うことができずにいた。

そのとき、ズズズというケータイのバイブレーションのような音が彼のポケットの胸元で反応する。

「あ……コナンくんだ」

彼はそれを取り出すとすぐにそれを開く。志保は思わず身を乗り出し、彼の手元を見てしまう。立体的に画面を飛び出し、そこには『彼』が画像として映し出される。腰から上、つまり上半身が一つの3次元の画像として。

何も変わらない、朝見たそのままの『工藤新一』の姿に、ただ、眼鏡をかけたただの変装のようなその姿に、普通だったら脱力して「いいかげんにして。何を企んでいるの？」と画面の向こうの彼に言ってしまうところだったが、それ以前に自分を取り巻く環境が明らかにいつもと違って、彼女自身、混乱していた。

『よお、光彦』

上半身だけの体長20センチの小さな小人が彼に向かって声をかける。それから志保と目が合って、少し面食らった顔をする。

『なんだ、灰原もいるのか。……ちようどいい、あのさ』

「ちよつと待って、工藤くん……」

『……んあ……。ちよつ、灰原？』

慌てたように小さな20センチほどの彼が素っ頓狂な声を上げる。

「『工藤』て言いませんでした？今」

『光彦』は怪訝そうな顔を志保に向けた。志保は思わず首をふるふると横に振ってみせた。

何やってんだ。小さな彼が呆れた表情を自分に向けるのを感じ、志保は思わず頭を抱える。

一体どうなっているのだ、あまりにも不可思議なことが多すぎる。自分は悪い夢を見ているのだろうか。

ふらり。

視界が一瞬白じんだ気がした。

「どうしました？はいば」

「・・・ねえ。・・・あなた」

『光彦』と呼ばれた彼に声をかける。画像の向こうの彼に目を向ければ『工藤くん』と言つてしまいたいそうだし、目の前の青年には『円谷くん』とはどうしても言えないし。・・・「あなた」なんて言葉を彼に向けて使つてみる。

そんな表現に、彼は一瞬眉根を顰めた。

「・・・なん、ですか？」

「・・・今日は、西暦何年何月何日？」

「・・・え？・・・2020年8月10日・・・ですけど。・・・

ちよつと灰原さん！？灰原さんっ」

『おい、どうした！灰原っ！灰原っ・・・』

突如再び眩暈が彼女を襲い、彼女の意識はそこでぷつぷつと途絶えていた。

気がつけば彼女は一人部屋に寝かされていた。見慣れた天井。ここは。

（ああ、・・・研究室だ）

いつのまに家に帰ってきたのだろう。

博士に買い物を頼まれて、ちょうどオフな時間ができたからと半年ぶりの、隣の家に住む彼とも思いもかけず東京へ。これは世に言う『デート』というものではないとは思いながらもとくとくと高鳴る気持ちは抑えられなくて。

ようやく買い物を済ませてさて、これからどうしよう、っていうときにかかってきたのが確か 警察からで。みるみる『探偵』の顔、『仕事』の顔になっていった・・・『本当の』彼女はいつもこんな顔を見ているのだろう。それを思うと胸が小さく疼いた。

・・・そう、そこまでは現実。

きつと一人になってぶらぶらと家に来て眠ってしまったのかも知れない。いろんなことを考えながら、疲れて眠ってしまったのかもしれない。

だって。

だって、あんな変な夢まで見てしまうのだから。

「灰原」として解毒剤を飲まずに成長した未来の夢。大人になった円谷くんと出会って。タクシーで『江戸川くん』の家まで向かって。

どこからが現実でどこからが夢か。

あのおばあさんにあったのは既に夢だった・・・？

痴呆じみたおばあさんに出会い、萎れた花をもらい、「願いを叶えてやるう」なんていわれて。

「ずいぶん馬鹿らしい夢を見たもんだわ」

思わず苦笑してしまう。

(・・・痛っ)

極度の疲労だろうか。頭が割れるような痛みを感じ、とりあえず水を飲んで落ち着かせようとベッドから降りるためと足を床に下ろしたとき、ドアの向こうから声が聞こえてきた。

「・・・にしてもわかんねーんだよな、あいつ」

誰かの声。・・・この声は・・・。

(工藤くん)

確信していた。たとえその声をあまり聴きなれていなくても。彼の声なら。

「わからない、とは何がじゃ？」

博士の声がする。少ししゃがれている声。・・・風邪でもひいていたのだろうか。あとで風邪薬を処方してあげなくちゃ、そんなことを考えながらドアのノブを開けようとゆっくりと1歩1歩歩き出していた。

「俺のこと『工藤くん』なんて呼ぶんだぜ？・・・いまさら」

「え？」

「もう『工藤くん』と呼ぶのはやめてくれってあれほど言ったはず

なんだけど……。もう俺は13年も……。いや、あのAPT-X4  
869を飲んだときから『江戸川コナン』になっただし……。  
それに何も知らない光彦たちの前で」

「哀くんが『工藤くん』と呼んだというのかね？」

驚いたような声で博士がとてつもなく大きな声を上げた。そして  
彼の、「ば、バーロ、灰原が起きるだろ！」と諫める声がする。ス  
マン……。としょんぼりした博士の声。

その2人の声がさらに小さくなっていく。

「……。どういうこと……。」

心臓が締め付けられるようにきりきりと痛くなっていた。

（もしかしてまだ夢から、覚めてない……。？）

頭が、痛い。

そしておぼろげに映るのは。

小学校のときの記憶。体験したことのない記憶。それなのに、ま  
るで自分が体験したかのように頭の中にありありと映し出される。

多分、自分が彼に解毒剤の完成品を渡したその日の夜。そう、脳  
は『記憶』していた。

阿笠博士にふらりとやってきた『江戸川コナン』。

自分の本来の記憶だと既に『工藤新一』としてやってきたはずな  
のに。突然の『工藤新一』の訪問に少し戸惑いを見せながらも、こ  
れから蘭の許にいく、そういう告白を受け、ようやく一つの安心が

生まれたはずだったのに。

そうじゃない、と『誰か』が告げる。

『・・・灰原。・・・話があるんだ』

頭が、痛い。きりきり・・・まるで頭を錐で穴を空けられているかのように。ずきずき、痛む。

『・・・俺は、解毒剤は』

痛い。脳が破壊されていくかのように、この上ようもないほど痛くて。

「う・・・うう・・・」

『・・・解毒剤は飲まない。・・・だから、お前も』

「・・・くう・・・」

『・・・俺と一緒にもう一度をやり直してくれないか。解毒剤を飲

まずに。・・・灰原哀として、江戸川コナンと共に』

その瞬間、彼女の中でふっと再び意識がなくなった。

『記憶』の中の彼はとても真剣な顔をして、そして、自分は泣いていたような気がする……。』



### 第3話 記憶（後書き）

少しずつですがアップさせていただいております。これからどんなお話になっていくのか。とりあえずラストは決めてあるんですけどね。哀ちゃん好きな人は楽しみにしてください（コ哀好きの人、新蘭好きの人とは今は言えません）

よろしく願いします！。今日はここまでお読みいただきまして、ありがとうございました。

## 第4話 嫉妬

次に目覚めたのは既に外が赤く染まっていた。先ほどまで研究室の仮眠用ベッドに寝ていたはずなのに、いつのまにか1階のいつも博士と志保が眠っているスペースで寝かされていた。壁にかけてある見慣れないデジタルカレンダーには2020年の文字。はあ、と小さく溜息をつく。

夢であるかもしれないけれど、それでも自分は未だその奇妙な空間に取り残されていた。

一体いつになったらこの夢から醒めることができるのだろう。

志保はその赤茶けた髪をくしゃりと掻きあげた。じつとりと汗が額から頬に伝い落ちていく。

(・・・なんだったのかしら・・・)

汗をパジャマの裾で拭いながら、昨日から体験したことを考える。これが夢というのなら、ずいぶん長い夢を見ているものだ。痛みだったり眠気だったり。神経がずいぶんリアルに表現されていて。もしかしたらこれが現実なのかもしれないという畏れがふつふつと沸いてきて。夏だというのに、冷房が効いているわけでもないのに、ぶるつとひとつ震えた。

そんな気持ちをごまかすかのように、志保は視線を外にずらす。この家は特別なガラスで一面全て覆われているから、外の様子がすぐわかるのだ。

真っ赤な紅の色の空の、今まで見たことのないほどの美しさに一瞬ココロを奪われた。こんな素敵な空を映すのは夕方だろうか、それとも明け方だろうか。

ベッドの脇にあるサイドボードの上の時計をいつものクセで見れ

ば『6』という文字を短針が示していた。この時期でこの天気の明るさといえ、きつと夕方なのだろう。あれからほぼ1日が経過しているわけだ。

（それにしても・・・）

志保はそつとその時計を手にとった。少し変わったデザインの時計。変わってはいるけれど、自分はこんな時計の形が好きだった。この夢の中では自分が選んだのかしら。そしてそのプラスチックのような素材の画面に指が触れたとたん、アナログであつたはずの針が全て消えて。

そこに映つたのは、中学生のころの自分。経験していないはずなのに。日本の制服を着て、卒業証書を手にして、自分は、自分たちはそこにいた。

まだメガネをかけていて。彼を挟んで、歩美と元太。その両端に光彦と哀。そして哀の肩に手を置くのは阿笠博士。ちょっと老けて髪の毛もまた少し薄くなって。

ずきん、と頭が痛くなる。

再びあの痛み。

志保はそれに負けじとぶんぶんと首を横に振った。

（負けちゃダメ）

知らない記憶を『自分のモノ』にしたくない。こんな学生時代、自分は送ったことがない。送ったことがないのだ。

しかし、それなのに。既視感というものをどこかで感じている。体が反応している。憶えている。

「どういつ、こと・・・」

震える、指先。

「・・・おはよ」

はつとして志保はその声に振り返る。彼、『工藤新一』・・・いや、『自分の知る工藤新一より一つ年上になった江戸川コナン』が決まり悪そうに部屋の隅に立っていた。

「おはよう」

にこり、ともせずには彼から目を逸らすと、彼女は再び遠くに映る紅の空を見つめた。

「・・・熱、でもあったのか？・・・ずっと魔されてた。それに・・・昨日から変だぞ、おまえ・・・」

彼の顔がそつと近づき、こつん、と額が志保の額に触れた。

どきんつ。

「ちよつ、何すつ・・・」

「何つて、検温」

「そ、そ、・・・そんなつ。そんなこと彼女にだけやりなさいつ！  
！！た、体温くらい自分で計れるわ」

もう頭の中がどうにかなりそう。沸騰しそうで。明らかに動揺を隠し切れずにいて。

そんな顔を彼に見られなくて、志保はぱつと頭からタオルケットをかぶった。

「何それ。新手のプレイ？・・・つまんねーぞ」  
「ぶっ・・・！？」

さらに顔を赤らめて志保はますますタオルケットから顔を出せなくなっていた。今自分の顔を見られたらおしまいだ。  
ぺろり。タオルケットを無理やり捲られてしまう。目の前にあるのは、彼の呆れたような、いや、困ったような顔。

「そんなに逃げられたら、追いかけたくなるんだけど。オメー、俺をそういう風にしたいわけ？」  
「っ！？」

志保は吃驚して彼の顔を見つめた。そんな表現、自分に向けて聞いたことない。あの探偵事務所の『彼女』に向けて、もしかしたら何度も口にしたかもしれないけど。

「顔、よく見せて」  
「・・・」

頬、頭、唇。・・・医者が触診するようにゆっくりと指の腹で撫ぜられる。

じつと見つめるその視線。射すくめられるその視線。  
思わずその視線に居心地が悪くなってさっと逸らした。が、顎をつかまれ、その太い節のついた指先で、強く元に戻される。再び彼の顔が自分の目の前に。

「・・・逃げるなよ」  
「・・・逃げてない」  
「逃げてる」

甘い、彼の声。・・・こんな彼の声、聴いたことない。

思わずどくどく、胸が騒ぎ、目がとろん、としてきてしまう。

こんなことあるはずなのに。現実だったらあるはずなのに。  
『夢』の中ではきつと。

(・・・私、彼の『彼女』なんだ)

彼の唇が目の前に。

志保は思わずきゅっと目を瞑った。

「コナンくん、哀くん、今帰ったぞーい」

ガチャリ、という鍵を開けたときの音とともに玄関で響くもう一人の住人の声。おそろおそろ目を開けると、ちっと『コナン』が小さく舌打ちをした。

「どーしてこういつもタイミング悪いんだよ、博士は」

なあ？といたずらっぽく笑うコナンに対して、志保は思わず体を縮

こませる。

「・・・灰原？」

怪訝に思ったのか、コナンは再び志保の顔をまじまじと見つめた。

「・・・ねえ、工藤くん」

「・・・だから俺は『江戸川』だつて・・・。言っただろ、小学2年の夏休み、お前に。もう『工藤新一』に戻るつもりはねえつ、て。納得してないようだったけど、それでも一応わかったつて言ってくれたじゃねえか。・・・それからずっと、みんなの前でも、2人でも『江戸川』で通してくれたじゃねえか。・・・一体どうしたんだよ、俺、おまえに何悪いことしたか？！」

「してないわ」

「じゃあ何でっ」

「だから。・・・私はあなたとそんな約束を、・・・してないの」

再び、ズキンと頭が痛くなる。・・・蘇りそうな新たな記憶。それでも。

それでも、彼女はそれを封印した。ぶんぶん、と頭を2、3度振ってそれを『なかったこと』にする。

「どういう、ことだ？」

「だから、・・・あなたが約束した『灰原哀』は私じゃない。残念だけど、・・・私は別人よ」

そう、たとえこれが本当に夢の中だとしても。あるいは、そうじゃないかったとしても。

私は、『私』の、記憶を信じているから。彼と『こういう仲間』になるのは私ではありえないから。私では、ないから。

「……イマイチ、話がつかめてねーんだけど」

「そうでしょうね」

「じゃあお前は誰なんだ？まさか12年前の組織の残党か？マスクが何かしたベルモットの仲間か？」

ベルモット。

自分の『本当の』記憶の中じゃ組織の『ボス』と一緒に、燃えさかる組織のアジト（ビルの廃屋）で運命をともにしたといわれている。

この『夢』の中ではどうなのだろうか。

いくら考えても、あのじゅくじゅくとした頭の痛みはやってはこなかった。

志保がふとその視線を感じ、彼を見ると、未だ彼はその返答を待っているようだった。

「答えるよ。……お前は誰なんだ。何のためにきた？まさか双子とは言わせねえぞ。いや、それにしても似すぎるか……」

彼のぶつぶつとした声を聴きながら、志保は思わず口許に笑みを浮かべていた。

「……そうね。組織の残党。だけど、残念だけど『彼女』の双子でもないし、クローンでもない。私だって何のためにここにいるかわからない……そんな答えじゃダメ？」

「！？」

その言葉に、彼は一瞬怯んだ顔をした。



「ちょーまで、おまえ、あいつの居場所知ってるんじゃないのか？」

「・・・知らないわ。『彼女』がどこにいるか・・・私が知るわけじゃないじゃない。逆に私が知りたいくらいよ」

彼の恋人である『灰原哀』という人物を。今まで彼とどんな恋愛をしてきたのか。自分でない『自分』に嫉妬に近い感情を覚えていた。

・・・それとも、やはり自分自身が『宮野志保』であり、『灰原哀』なのだろうか。そんなことを考えると、きつとまた頭が痛くなつて。彼との秘め事が頭にいやらしく浮かんでくるのだろうか。リアルに『経験』として、『記憶』として浮かんでくるのだろうか。

そんなの、嫌だ。

思わず嫌悪感に、志保は身を震わせた。

「・・・ふざけんなっ！」

彼の動揺した言葉にそして浴びせるような怒りの視線に、志保は我に返り、そして彼を見据えた。

怒りに震えている彼の瞳。

「・・・灰原に何かあったら、ただじゃすまさねーからなっ！」  
「好きに、しなさい」

彼にそんな言い方をされて胸がキリリと痛んだ。だけどそんなキモチを彼に気づかれないように、ゆっくりと背を向けた。

感じる、居心地の悪さ。何ともいえない気まずさがこの部屋いっぱいに広がっていく。

「くそっ・・・」

小さく呻くような彼の呟きが背中越しに聞こえた。焦っていてきつと何も考えられないのだ。

こんなに彼が愛している『自分』。

この世界ではどんな性格をしているのだろう。どんな女なのだろう。

現実世界で『彼女』に対する思いと別の感情を、この空間の『自分』に抱いていた。

（ねえ、工藤くん。・・・あなたはどうしてあんな『私』を好きになったの？魅力的な彼女を差し置いてまで、私を・・・）

嫉妬。

現実世界で抑えていた感情が爆発しそうになる。

そんなキモチをどうにか抑えるために、志保はぎゅっと自分の体を抱きしめた。

「・・・なあ・・・」

ぼそり、彼の声が再び自分に向けて発せられた。無言で彼の次の

言葉を待つ。

「おまえ、そんな悪いやつじゃねーだろ。それに、きっと『組織』にももう全然関与してねえ」

「・・・え？」

きよとん、として志保は思わず振り返り、彼を見つめた。

「わかるんだよ、おめーを見てっと。姿形だけじゃなく、性格もあいつとまるきり同じのようだ。・・・なあ、おまえホントに」

「別人。・・・私はあなたの愛している『彼女』じゃないから。・・・期待を裏切ってごめんなさい」

「忘れてる、だけじゃねーのか？」

一瞬の沈黙。

(ウソ・・・)

「・・・思い、出させてやろうか？」

「え？」

ベッドの上、彼が志保の肩にそつと手を置いた。彼がベッドの上に膝を置き、乗ってきたため、キシキシとマットが音を立てる。

どくん。

胸が高鳴る。じつとり見つめる彼の視線。

「くど・・・くん」

「・・・あー・・・もう何でもイイけどな」

彼は思わず苦笑した。それから、そつと。  
・・・そつと志保の唇に唇を重ねた。

## 第5話 衝撃

唇に触れるのは、少し乾いたやわらかいもの。

一瞬、ぼうつとして気を失いかけたけれど。  
はっと、我に返って。

私は彼の頬をそのとき力いっぱい叩いたように思う。

「・・・っっ」

みるみるうちに赤みを帯びていく彼の頬。そんな状態を見たまま、  
志保は肩で息をしていた。

「・・・にすんだよっ・・・ってえなあ」

「あなたも、そうなのね」

「・・・はあ？」

「『女』を獲物として思ってる。10年たった今でも、『男』は何

年経っても変わらないのね」

「何言ってるんだよ、おめー・・・」

怪訝そうな顔をして、彼は志保の腕を掴もうとした。その気配を感じたから、彼女は、その手をさつと払う。

「・・・少なくとも、10年前のあなたは・・・ううん、『現実世界の』10年前のあなたは、そんな人じゃなかった。一人の女性を愛し続けた。姿形がどんなにそっくりだとしても。また、愛する人がどんな醜い姿に変えられたとしても・・・あなたは、絶対見つけることができた。でも、今のあなたは違うようね・・・こんなプレイボーイみたいなことをして」

汚らしいとでもいうように、志保はさつとその唇を腕で拭った。

「・・・っ。・・・だってどう見ても、お前・・・『灰原』じゃねえか。・・・顔形、性格。・・・その言葉。・・・どう見たって別人には思えねえんだよ」

その行動にたじろいで、それからちよつと困ったように、彼は志保から視線を逸らしたままぼそぼそと呟いた。その後ではっと気がついたように彼女の顔をまじまじと見つめる。

「・・・て、何言ってるんだ、おめー・・・。『10年前の』・・・って一体」

呆れた表情で彼を見返す。

「まだ、わからないの？まあわかっていう方が無理かもしれないけど」

志保は溜息をついて、それから一呼吸だけ置いて、再び口を開いた。

「・・・私は組織を倒したあとの・・・10年前の『宮野志保』よ・・・解毒剤を飲んで元の姿に戻ったの・・・そして、あなたも『工藤新一』として」

「ちょ、ちょ、ちょー待て。『10年前』つつうことは、まさか過去から来たっていいたいのか？」

「そうよ」

さらりと答えた志保に、更に彼は目を見開いた。

「おめえ・・・マジで頭どつか打ったんじゃない？・・・それとも、ヤバイ事件に巻き込まれて変な記憶を植えつけられたか」

「そんなことあるわけないでしょ」

心配そうに顔を覗き込んだ彼の頬を、志保はぎゅっと押しのけた。

「だってそっちの方が現実性あるだろ。過去から来ました。自分は『灰原』じゃなくて『宮野志保』です、なんて言われて、一体誰が信じると思う？」

「私だって・・・。私だって信じられないわよ。どうして私がここにいて、しかもあなたが私の『恋人』になっているのか」

少なくとも、自分のいた時代は。

10年前は、彼は、幼馴染の『毛利蘭』を想っていたはずだから。彼は、解毒剤を飲んで幼馴染の彼女の許に帰ったはずだから。

「蘭さんは？」

「・・・へ？」

「蘭さんとはどうなったの？」

そう、さつきからずっと思っていた。

どうやって彼は自分の想いを、『毛利蘭』からの想いを『灰原哀』への思いに変えたというのだろう。

「ら・・・ん？」

きよとん、とした顔で、彼が志保の顔を見つめたまま首をかしげた。

「・・・誰だ、それ」

一瞬耳を疑った。

「な、何を言ってるのよ。・・・あなたの幼馴染の毛利蘭。空手有段者で。小さいころからずっと思ってた。強がりなんだけど泣き虫で。誰かの苦労や心配も、全部自分のことのように背負ってしまうお人好し。だけど・・・目が離せない存在なんだ、っていつも言ってたじゃない？あんなに嬉しそうに話してくれたじゃない。まさかそんなキモチを忘れた、なんて言うつもりじゃないでしょうね？あなたの世界の『10年前』に何があったか知らないけど」

「・・・」

まだ思い出せないのか、無言でこちらを見たままの彼に、志保は更に言葉を続ける。

「じゃあもつと教えてあげるわ。彼女の父親は毛利探偵事務所という事務所を開いている元警察官の探偵。眠りの小五郎なんていわれ



て・・・あなたがあんなに情けない男を何度も救ったじゃない。博士が作った時計型麻醉銃で・・・」

「なあ・・・悪いけどさ」

遠慮がちに志保の言葉を遮ると、「ちょっと落ち着けよ」と彼女の頭をぽんと軽く叩いた。

そこで彼女ははっとする。自分は、彼に食いつくように、まるで誰かに圧されるように、彼の手首をいつのまにか強い力で掴み、話していた。

ごめん、と呟き、志保はそつとその手を彼から離す。

「お前、やっぱり夢でも見てるんだよ。・・・つか、ありえねえもん。そんな話。・・・おまえは自分が灰原ではなくて、『10年前の宮野志保』だつつうけどさ。・・・どうしても辻褄があわねえんだよ。・・・それに俺は『宮野志保』と逢ったのはいつかジンと杯戸シティビルで戦ったあの日ぐらいなもんで。・・・しかも後姿しかわかんなかったし。いまさら『宮野志保』だつつわれても、俺はおめーを『灰原』としか思えないし」

「・・・」

「しかも。解毒剤は、試作品も一緒に、俺とお前で全部燃やしたはずじゃねーか。まさかそれを隠し持っていて、博士の作ったタイムマシンが何かでやってきた、とか言うつもりじゃねえんだろ？」

「・・・」

そのとき。

あまりに突然にその頭痛がやってきたから、いや、自分がぼんやりしていたので、その情報がやってくるのを阻止することができなかった。

頭痛とともにフラッシュバックするその『記憶』。

ぱちぱちと音を立てて燃える10粒ほどのカプセル。炎の中で少しずつ蕩けていく様子を、2人は手を繋いで眺めている。

『記憶』の中の自分はもう、泣いてなどいなかった。

・・・とても幸せだったことを覚えている。

(どうして・・・?)

どうしてこの時の自分はココロから幸せなんて感じているんだろう。蘭さんのことを少しも考えないんだろう。

・・・ソレハ・・・

・・・ダカラダヨ。

誰かの声がする。いや、誰かの声がした、と言った方がいいかもしれない。

昨日のように。自分の本来の記憶の邪魔をして、この世界の記憶を植え付けようとする誰か。

それが誰だかわからないけれど、きっと同じ人物であると確信していた。

でも、そのおかげで、何かがわかったような気がしていた。

・・・知っちゃいけないような。けれどそんなイヤな『記憶』が自分の中に戻るのも、時間の問題だった。

志保はあわててその『記憶』を受け容れないようにぶんぶんと頭を強く振ってそれを飛ばそうとした。しかし、そんな地道な努力も彼の言葉で一瞬のうちにガラス細工のように崩れていく。

「それにさ。・・・その『ラン』のこともそうだよ。・・・全然そいつと俺、面識ねえんだぜ？」

「・・・」

どう答えていいかわからず、志保は彼から視線を逸らしたまま、  
だんだん紺色に変わっていく空を眺めていた。

「だって俺、『工藤新一』の幼馴染なんていねーもん」  
「っ!？」

一瞬、時が止まった。

「『幼馴染』と言えるのは、おまえらただけけど?・・・おまえも  
そうだったじゃねえか？」

いつものように、無邪気な微笑みを浮かべて、彼がその言葉を口  
にした。

そう、それでわかった。

あのとき、『記憶』の中で自分が笑っていたのは、幸せを感じて  
いたのは。何も障害がないから。

『工藤新一』が『江戸川コナン』になって悲しむ最大の存在。彼  
女がこの世界には存在しないから。

そして、だからこそ。

彼は『私』に恋をしたんだ。

## 第5話 衝撃（後書き）

・・・いやー、このままだと『またあした』と同じ展開になるので、急遽蘭ちゃん消させていただきました。

次回作品では絶対幸せにするからねー！！！！><

ていうか現実世界ではラブラブの恋人だから我慢してねー・・・。  
ううう。ラストは蘭ちゃんも現実世界で幸せな姿をちょこつとでも描写しておこう・・・（ぼそぼそ。

いくらなんでもこの展開はかわいそうすぎ。

志保ちゃんは現実世界に戻ってこれるのかな？

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

## 第6話 決意

煌々と光る真っ白い月のもと、人通りの多いこの街を、赤茶けた髪色の女が一人、歩いていった。

街の広告ボードからそれに比例した大きな人間が飛び出て必死に商品の宣伝をしている。

頭上を、仕事帰りのサラリーマン風の男性を乗せた一人用飛行機のような乗り物が数台飛び去っていく。

試供サンプルと配られた一枚の小さなカード。それを付属の小さな玩具のようなハードに差し込めば、不意に気分は夢の世界。勿論、ここは森の中ではなかった、都会のだ真ん中であつたはずなのに、気がつけばあたり一面緑、緑、緑。小鳥の囀りや森林豊かな匂いなんて広がって……。次の瞬間には現実に戻されてしまふけれど。

全てがSFモノの映画でしか見たことのない、馴染みのない世界。こんな映画のセットのような街並みを自分が歩くことになるなんて、夢にも思っていなかった。

『現実世界』の10年後もこの街と同じような色をしているのだろうか。

それとも、これはただの自分の空想で作った世界であるだけで、実際はそんなに現在と変わらない街並みなのだろうか。いや、多分そんなに変わらない世界なのだろう。志保はそこで考えを思い直す。

『小学生』の姿をしていた頃、よく子供たちにテレビ番組のSFモノにつき合わされていたから、若しかしたらそのイメージが知らず知らずについてしまっていたのかもしれない。少し今より使いやすい物が増えているのかもしれないけれど、10年でこんなに世界がまるきり変わるとは思えないから。

それに実のところ10年先の未来がどう変わっていてもそんなことは自分にはどうでもよかった。こんなものには興味はない。どんな風にならなくていい、全然変わっていても。今でも全然モノに不便はしていないし。それに、現実の10年後、自分たちの身に何が起きているか。世界がどう変わっているか。・・・そんなものは推測や空想でしか知りえない筈。いまさら考えたって仕方のないことだ。時間に身を任せればいいだけのこと。そう思っていた。けれどもただ一つ、自分が今でもわかる10年後の未来がそこにある。知りえる『確かなこと』が一つある。

『毛利蘭』という人物の存在。

きつとそこで彼女は生きているから。『工藤新一』と人生を共に歩んでいるはずだから。

(・・・でも、この世界には・・・)

そこまで考えて、ふう、と志保は小さく溜息をついた。

「・・・可愛いそうね」

そう。・・・可愛いそう。

彼女を『知らない』ばかりに、すっかり私なんかを好きになっ  
てしまった。

彼女がこの世界にいたら。・・・私など愛することもなかったの  
に。

現実ではあんなに想っていたのに。あんなに愛していたのに。  
全てこの世界では『無』になっていて。そんなキモチは最初から  
なかったことになっていて。

自分の体を小さくしてしまった『科学者』なんかに恋をして。  
それでも愛した『彼女』が消えて、代わりに『同じ顔の別人』で  
ある私が現れて。

・・・いや、彼は、・・・この世界に住む彼は、まだきつと自分のことを『灰原哀』だと信じて疑わないのだろうけど。

志保は自分自身、泣きそうになるのを我慢して、前へ前へと進んでいた。

お気に入りの着メロがポーチの中であるけれど、それも気にかけることもなく、彼女はただ前へ進んでいた。どうせ『彼』が自分の居場所を聞き出そうとしているのだ。そう思っ携帯電話の着信を確かめることもなく、彼女はただただ前へ進んでいた。

そしてそこで立ち止まり、ゆっくりとその場所を見据えた。

小さく深呼吸をする。

そこは自分がこの世界に来てしまったた原点だと思われる場所。米花駅より一つ手前の駅。

そう。

全てはそこで始まった。

自分がこの駅で間違っ降りてしまったから。変な老婆を助けてしまったから、そのお礼にと花をもらい、『一度だけ願いを叶えてやろう』なんて言われて。

きつと、あとき呪文をかけられてしまったのだ。そしてそのとき、ちようど思っってしまったのだ。心の隅に。

・・・いや、それどころか、恐らく気がつかないうちに、ココロを全て支配していたのかもしれない。

『工藤くんとずっとあのままいられたら、きつと大学生活も楽しかったのに』

『子供たちと一緒に過ごしていれば・・・』

『蘭さんがいなければ私が彼と恋人になることもあったのだろうか』  
そんな思いがきつと知らず知らずに自分の心に埋められてしまっ



ていたのだ。  
だから、願いが叶ってしまったのだ。

けれど、実際は偽りの世界。

私はそれでも『宮野志保』で『灰原哀』じゃない。

植えつけられる記憶は『真実』かもしれない。・・・でも、自分には本来の記憶があるから。忘れたくないから。

蘭さんは存在して、天使のようにニコニコ笑って辛いときでも微笑んでくれる。そして何か間違いああれば真正面からぶつかって一生懸命正そうとしてくれる。自分はそんな彼女が好きだから。そしてその彼女のために一生懸命頑張る彼が好きだから。

そんな思いを全部忘れて、この世界の『灰原哀』の記憶に塗り替えられたくないから。・・・それに、この世界に、いや、どこかに『灰原哀』の存在はいるはずで。

その人の代わりに、『彼』と・・・『江戸川コナン』と幸せになるわけにはいかないから。

「本当の幸せなんて、なれるわけないけどね・・・」

自嘲気味に呟いたその声は誰に届くことはなかった。

自分が元の世界に戻らないと、きつと本物の『灰原哀』は『彼』のところに戻れない気がして。苦しんでいるような気がして。

全ては自分の責任。悲しんでいるわけにはいかない。躊躇っているわけにはいかない。

こんな世界に自分はいるわけにはいかないから。この場所には自分の居場所はないから。

一刻も早くこの街から、この世界から抜け出すしかない。

あの老婆に出会い、元の世界に戻してもらうしか方法がない。そう思ったのだ。

ここにいれば彼女と会えるわけではない。逢える確率は高くは無

いかもしれない。

だけど、ここにいれば逢えるかもしれないから。逢える確率は0（ゼロ）ではないから。

志保は昨日と同じ、駅に続く地下の歩行者用通路に向かい、階段を降りた。

カツカツとヒールの音が地下通路内に響く。この世界ではそんな音がする靴を履く人はもういないのだろうか。

肩すれ違う人たちは、怪訝そうに、そして迷惑そうにこちらをじろじろ眺めていた。そんな視線に無視を決め込んで志保は前へ足を進める。

ちやうど半分過ぎたあたりで見つけたその小さな人影に、ぎくりとして志保は立ち止まった。ごくろ、と息を飲みこむ。そこに古ぼけた布を頭からかぶった老女の姿が・・・。

「っ！！！」

信じられない。・・・彼女は这个世界にもいたのだ。

昨日よりもさらに年老いた身なりをしているが、昨日と同じように、いや、昨日と違うのは 古ぼけたバケツに水を沢山入れて。数本の花を活けて。

そしてそこで志保は初めて、昨日彼女にもらったあの花をどこかに置いてしまったことを思い出した。

彼女はぎよろり、まるで魚のようなにごった目で志保を見上げた。

「・・・なんじゃね。そんな人を珍しそうにじろじろ見て。誰か知り合いにでも似ていたかね？」

「あの」

「悪いがあんたにやる花はないよ」

ボソリ、と吐き捨てるように老女はその言葉を口にして、志保の話をまるで聞くのを拒むかのように、目を合わすこともなくさつさと今までアルミ製のバケツに入れていた花をのそのそと片付けはじめる。そんな彼女の姿に、志保は慌てて声を上げた。

「待つて、おばあさん」

「失礼だね。あんたに『ババア』呼ばわりされるいわれはないよ。・  
・さつきから何だね、早く帰っておくれよ」

痩せて骨ばった背中を向けて、老婆はごほと体を揺らせて大きな痰のからんだ咳をした。

「ちよつと、大丈夫？・・まさか持病なんてかかえてるんじゃないでしょうね」

慌てて触診しようと老婆の体に触れようとした瞬間、パシリと軽く叩かれ、老女は再び鋭く眼光を光らせて志保を睨んだ。

「気やすく触るでないよ。今日のあたしは機嫌が悪いんだ」

「・・・ねえ、おばあ・・・」

「ババア呼ばわりするでないと云ってるだろ！」

通路内に大きく響き渡るその声に、ぎよつとして、志保は思わず後ずさった。

今ここにいるのは志保と老女の2人。いつの間にか人は自分たち以外いなくなっていた。

「蛙にでも変えてほしいのかい？」

低い声で、うめくように老女は呟いた。脅しにかかっているのだ、いや、本当にそのつもりなのかもしれない。

今の老女にはそんなことができるような気がした。

「蛙は勘弁してほしいわね」

くすり、と志保は苦笑する。それから胡散臭そうに自分を見つめる老女に向かって「ただ・・・」とその言葉を口にした。

「ただ・・・元の場所に・・・私を元いた世界に帰してほしいだけよ」

その言葉を言ったとき、ほんのすこしだけ老女の眉がピクリと動いたのを、志保は見逃すことをしなかった。

## 第7話 チカラ

「ただ・・・元の場所に・・・私を元いた世界に帰してほしいだけよ」

自分達以外、人が誰もいないこの通路の中で志保が呟いたその言葉は大きく反響した。

老女は志保が発したその言葉に一度ぎよつとした顔をして彼女をまじまじと見つめていた。

「・・・あんたのいた世界、じゃと？・・・何を言う。ここはあんたのいる世界じゃないと言うのかね？」

「そうよ」

さらりと言って退ける。

「別の世界の住人。『10年前の』あなたによってかけられた魔法で、ここに連れてこられた迷い人。・・・責任、取ってくれるわよね」

にこりと口元だけ笑みを浮かべる志保に対して、老女はただ無言で口を真一文字にして考えこんでいたが、通行人が階段から降りてくる姿を確認したとたん、人目を憚ったのか聞こえるか聞こえないかほどの小さい声で「ついておいで」と耳打ちした。

お香の匂いか、薬草の匂いか。

老女が身近に触れたとき、嗅いだことのない何ともいえない香りが志保の鼻腔をさっと通り過ぎた。

案内されたのは薄汚いアパートだった。

鬱蒼と樹木や草が生い茂った空き地に囲まれるようにして申し訳なさそうに立っているようにも思えたそれは、一見廃屋のように思えた。

「あたし以外誰も住んでいないよ。実際ここにあたしが住む許可も下りてないしね」

「え・・・、そんなこと言ったら・・・」

「いいんじゃないよ。誰かが文句言ったら場所移せばいいんだから。・・・誰もいないうちは、ここはあたしと猫たちの住処だ」

いつのまに來たのだろう。気がつけば野良猫が数匹、2人を囲むようにそこにいた。にゃおん、なんて鳴き声も立てず、ただじつとそこに座っていた。そして老女だけに視線を向けて。・・・まるでこの家の主を出迎えるように。

コンクリート塀にいつのまにか座っていた黒猫がそこからすとんと軽やかに降りて老女の足元にすり寄ってくる。そんな野良猫の喉許を優しく指先で撫でながら老女は志保の方に振り向いた。

「まああたしがここを壊さないように、文句を言わないようにちよつとした細工をしたこともあるんだけどね。・・・知ってるかい？ここはもう20年以上誰も住んでいないんだよ。あたし以外ね・・・。よくここを誰もいないと勘違いして『お化け屋敷探検』なんてしたがるガキもいるようだが・・・」

そこまで言つて、老女はにやり、と志保に向けて意味深な笑みを浮かべた。

そういえば、小学生をしていた時代、何度か子供達と『お化け屋敷探検』と称しているんな廃屋に忍び込んだ経験がある。

そしてこのアパートも、1度だけは中に入ったことはあったように思う。

部屋の中にも鬱蒼と草が茂っていて。くもの巣や得体の知れない匂いが立ち込めて。じめじめとしていて。きのこなんて生えてて。

どんな角度で長所を探そうとはしても、どうしても人が住めた状況ではなくお化けが本当に出そうだ、と子供達は顔を真っ青にしてこの部屋を出た覚えがある。

（まさか、こんなところに住んでたっていうの・・・？）

信じられない思いで再び歩き出した老女の背中を目で追いかけた、ちようどそんなとき。ああ、と老女が一度だけ低く唸った。

「思い出したよ、あんたのことを。あんたも、生意気そうなメガネの子や、ガキ大将風の太つちよの子、可愛いちよつとませた感じの女の子に、利発そうな雀斑だらけの子も。みんな。あんたたち5人でうちに来たっけね」

歩きながら、老女は旧知の友人にでも会っているかのように心から楽しそうに大声で話していた。なんて言っついていいか判らず、無言でいた志保ではあったが、老女はかまわず話を続ける。

「あんどときから少しあんたには何かあると思っていたんじゃないよ・・・。それで？元の世界とはどの世界のことを言っているのかね・・・。ふふふ、聞くのが楽しみじゃ」

こっちが慌ててしまいうくらい、彼女は大きな声を出して笑った。さつきはあんなに人目を気にしていたのに、このままだと何もかも

秘密をこの場所ではらされてしまっんじゃないかと思ったほど。

・・・もうここには誰も人が来ないとわかっているのだろうか。

（それにしても、昨日はこんなに横柄で、こんなに豪快な人だったかしら）

志保は首をかしげながら老女の後についていく。

自分をババア呼ばわりするなと制す彼女は、『昨日』から10歳年をとったはずだ。

しかし、外見は年をとってはいいても、気の若さではこちらの方が俄然若かったような気がした。

・・・それとも、昨日はただ、『演じていた』だけなのだろうか。既に初めから自分は彼女の魔法にかかっていたのだろうか。

「さつきから、何を考えているんだね？」

急に皺くちやのアップの顔が目の前に現れて、志保は思わずぎゅっとたじろぎ、慌ててかぶりを振った。そんな彼女に、老女は満足そうにうなずくと、しっかりとした足取りで草に覆われたそのアパートに足を踏み入れた。

そしてある一つの壊れかけたドアの前で立ち止まり、鍵を開けた。

中に入る瞬間、見上げた空にぽっかりと浮かぶ白い月は、煌々と光輝いていた。

これがこの人の能力チカラの威力なのだろうか。

部屋の内部はまるでワンルームのような造りになっていて、まだ



建てたばかりかと思わせるような新築特有の匂いがほんのり残る。  
精神的に疲れた体。まるで吸い込まれるようにベッドに倒れこむ。  
はしたないとわかっていても、全ての疲れをとる欲求の方が脳を支配した。

「今日はその部屋使いなさい。話はまた体が休まったあとでいいから」

後ろから老女のしゃがれた声がして、志保は顔を上げて、ありがとう、と礼を言った。

ありえないのに。こんなことはありえるはずがないのに。でも。

（この世界では何でもアリなのかもしれないわ）

たとえば、彼女が本物の魔女で自分はただここに騙されにきた、という事になっても、それはこの世界では「有り得る」こと。

いや、この世界じゃなくて。「彼女」だから、か。

「ほら。……馬の小便とか、変なモンは入ってないよ。正真正銘の麦茶さ。……飲みな」

一体どこから取り出したのだろう。目の前に差し出された麦茶を受け取り、志保は体を起こすと、素直にそれを口にする。

冷たい麦茶がすうつとのどを通り抜け、たった一杯の麦茶であるはずなのに、まるで一日オフの時間を過ごした後のように体がリラックスしていく。既に「正真正銘」の麦茶、というのはウソかもしれない。ふとそんなことを思い、志保は心で笑った。それから、満足そうに自分を見る老女を見つめる。

「ねえ・・・」

「なんだい？」

「あなたは本当に魔女なの？」

シンデレラにカボチャの馬車を与えたり、眠り姫や城の人を100年の眠りの呪いにかかけたり、ラプンツェルを高い塔に長い間閉じ込めたり。

そんな御伽噺に出てくるような、魔女が目の中の人物だということだろうか。半分信じて、半分疑って。

「そんな大層なもんじゃないよ。人よりちょっと変わったことができるだけで。そんな人間この年になればざらにいる」

（いないと思うけど）

思わず志保は苦笑した。それから、さらにこう質問する。

「・・・どうしてあなたは私に優しくしてくれるの？」

「おや、責任取れといったのは誰じゃったかね？」

可笑しそうにくっくつと低く喉を鳴らして下品に老女は笑うと、それから言った。

「まあ・・・そうさね。懐かしさ、っていうのかね。あんたはあたしをどんな女だと思っているかわからないけどさ。10年前、あたしに『魔法』をかけられたという女が目の前に現れて・・・ちょっと興味を覚えたもんだからさ。・・・冥土の土産に聞いておこうと思ってね」

「・・・そんな」

「何、人間年には勝てんじゃろ」

「何今になってそんな年寄りくさいこと言ってるのよ。さっきまであんなにババア扱いするな、と怒っていたくせして」

志保が呆れた顔を老女にむけると、彼女は「それとこれとは話は別じゃ」とすました顔をしてみせた。

それから真面目な顔をして、それより・・・と口を窄めた。

「あんたが10年前のあたしと会っいきさつを覚えてくれんかの。残念だが、あたしはそのことを少しも覚えていないんでね」

「いいけど・・・。全てを話し終えたとたん、魔法で蛙や蟬に変える、なんてことはしないでね」

志保が思わず顔を顰めてそう言つと、老女は大口をあけて豪快に笑った。

## 第7話 チカラ（後書き）

こんなところに老女登場させてしまいました。ふふっ。

次回、「志保、変化<sup>へんげ</sup>

ゝ蛙になるゝ」乞<sup>こ</sup>うご期待！

・・・違<sup>ちが</sup>うから。・・・しかも『文章』にな<sup>な</sup>ってるし。タイトル。

あつ。なんだか今日は編集しまくってタイトルも背景もみんな色と  
か変えてみました。いかがでしょう（笑）。びっくりさせてごめん  
なさい。

では、ここまでお読みくださり、ありがとうございました。

## 第8話 電話

その日、自分がどうしてその時間まで老女とその話を続けていたのか、熱を入れていたのか、今となってはあまり覚えていない。

老女が志保の話を全て聞き終え、この部屋を出たのは、既に日付もとつくに変わっていた。

そう、彼女はその時間まで自分の全てのことを彼女に話していた。『宮野志保』の生い立ち、家族との別れ、「sherry」としての仕事・・・「灰原哀」として過ごした1年半、そして現在をどう生きていて、どういう経緯で「彼女」と出会い、此処に来たのか、その全てを。

普段は絶対言う事は無いのに、隠さなくてはいけないことであるはずなのに。

どうしてあそこまで包み隠さず丁寧に、出会ったばかりの老女に話さなくてはならなかったのだろう。

もう既に組織を潰した後だったからか。

ここは異世界だから現実世界での秘密を話してもいいと思ったところがあったのか。

それとも、単に彼女の「魔法」で言わされていただけだったのか。

気がつけば自分の生い立ちやその当時の思いを包み隠さず全て彼女に話していた。時間<sup>とき</sup>を一切忘れて。

あの家を出てから、口にしたものといえばあの麦茶だけだというのに、空腹感を感じることもなく、休むことなく自分の話を続けていた。こんな遅い時間まで起きているというのに疲れを感じることもなく。まるで楽しみにしていたお祭りなどのイベントが終わって、興奮して眠れずに家族にその日の出来事を話す幼子のように。

思い返してみれば、老女は志保の話を聞くだけで自分の話をしたことはなかった。自分が何者かさえ言葉を濁し、教えてくれなかった。しかしそれを深く思わせないとこころがやはり老女の魔法の威力なのかもしれない。

（だとしても、困ったものね）

それが言わされていたとしても、まんまとそんな魔法にひっかかる自分に。

ばふつとふかふかのベッドに大の字に倒れこみ、志保は大きく息をつく。それから、お風呂も入っていないし、化粧も落としていないことに気がついてあわてて体を起こした。思いのほか汗で体がべとべとになっているということはなかったが、それでも体の汚れを全て流したかった。

この部屋のものは全て使っている、と言われているし、場所も一通り教えてもらった。志保は化粧室に既に用意されたバスタオルやアメニティグッズを目にし、本当に魔法って便利だわ、と小さく苦笑した。

シャワーで体を軽く洗い流しながら、志保は老女のことを考え始める。

もうあの不思議な老女のことを『魔女』として少しも疑っていない

かった。・・・いや、もしかしたらあの例の怪盗みたいにかマジックのようなものかもしれない、と少なからず思う節もあったが、それでも納得しきれないものが充分彼女の中であつた。

（アジア系の顔だったけど・・・。魔女にもいろいろ人種はいるのね）

そんなくだらない考えが自然と自分の頭の中に浮かんでいたことに思わず苦笑してしまう。

さつきまであんなに落ち込んでいたのに、こんなに笑みが零れている。気持ちが少し楽になっている。

それは全てあの老女のおかげ。・・・そんな風に思う。

彼女に出会わなければこの世界に迷い込むことはなかったかもしれない。

けれど、彼女に出会わなければこんな気持ちにさせてくれることはなかった。

現実世界では誰にもいえない心の内。

博士には心配させるだけだし、新一にや蘭になんて言えるわけがない。少年探偵団とは交流は閉ざしたままだし、学校の仲間にも全てを許せる友達はいない。

誰かに頼ることなんて、なかったのに。こんなに話すことはなかったのに。

彼女はきつと悪い人ではない。確証もなかったが、どこかでそう信じていた。そんな風に思う自分もまた可笑しいとはわかってはいたが。

白い泡で体いっぱいにし、鼻歌を歌いながらシャワーで全て洗い落とす。こちら辺のシステムが10年前と少しも変わっていないと気づき、少しほっとした。自動で洗浄や乾燥なんてされたら溜まつ

たものではない。

ズズズ、ズズズ。

再び入ったそのバイブレーションに、志保ははっと我に返る。

こんな時間に誰だろう。こっちに来てから初めての自分への電話。脱衣場で藤簾に着替えと一緒に置いてある携帯電話から聞こえてくる。彼女は一瞬躊躇はしたが、意を決してそれに手を伸ばした。相手の名前をチェックする。

『工藤新一』

その名前を見て、思わず目を真開いた。

（通じた！？）

まさか、そんなはずは。

期待と不安の入り混じった感情が心の中を支配していく。

彼、だろうか。

いや、彼のはずはない。ケータイの番号が変わっていないだけ。それでも……。

「……もしもしっ……」

少々、声の上擦っていた。

あなたは、誰なの？

工藤くん？……それとも、江戸川くん？



『・・・あー、やっと繋がった』

ほっとした彼の声に、志保は注意深く耳を敬てる。

『つたく、・・・探したぜ。今どこにいるんだよ』

少し怒ったような彼の声。・・・明らかに心配しているその彼の声に、『江戸川コナン』だということを反射的に感じ取る。思わず落胆の色をあからさまに表していた。ふうつと小さく深い溜息を一つ吐き、そのあとでまだ濡れたままの髪を手櫛で掻きあげて、ボソリと吐き捨てるように呟いた。

「魔女のお家」

『・・・はあ？』

受話器の向こうから彼の怪訝な顔が見えたような気がした。

「だから魔女のお家」

案の定あっけに取られていた様子で、たっぷり10秒ほど間を置いてから、彼はゴホン、と一つ咳をした。

『・・・そんな冗談に付き合ってる余裕なんてねえんだけど。グレートルさん』

「一見かわいい冗談に見えたけど、ご愁傷様。配役が一人足りないわよ。ヘンゼルがないじゃない」

思わず冷笑して志保は洗面台の上においてあったフェイスタオルで髪を拭きながら受話器の相手に抗議する。

『・・・いいだろ、別に』

不服そうな声が返ってきて、また思わず口許を綻ばす。

「あら、俺がヘンゼルだ、なんてばかげたことはいうつもりはないよね」

『魔女につかまって喰われそうになるまで檻に入れられるバカげた役にはなりたくないんでね』

彼の言葉に、確かに・・・、なんて納得しかけて、そんな自分に気づき志保は慌ててその思考を止めた。このまま話を纏められてはなんだか面白くなかった。

『・・・で？どこにいるんだよ。その様子じゃ別に拘束されてるカンジは全然ねえようだけど』

「・・・当たり前じゃない。何言ってるのよ、今更」

今日の夕方まで逢っていたというのに、まだ、唇の感触が残っていたというのに、突然何を言い出すのだろう。

先ほどの唇の感触を思い出し、志保はさつと顔を赤らめた。

『なら、まあよかったけどよ。・・・元気なら連絡ぐらいしろっつうの。はた迷惑にもほどがあるぜ』

ぶつぶつ不満を吐かれて、志保は苦笑した。

『まあ連絡ついたからよかったけどさ。・・・こんな時間だし、無事だとしても通じるとは思わなかったから』

「そうね、普段なら寝てたわ」

暇な学生生活。

薬の研究のために徹夜漬けだった生活も、今では遠い過去となっていた。

sherryだったときも、灰原哀だったときも、気がつけばいつも夜更かしをしていた。

sherryのときは『早くAPT-X4869を完成させろ』と上から圧力が掛かっていたし、灰原哀のときは、彼を元に戻そうと躍起になっていた。

それなのに。

こんなに暇な時間になる日が来ようとは、実際、少しも思っていなかった。

・・・そしてこんな世界にまさか自分が連れてこられることになるうとも。

そんな現状に、志保は思わず嘲笑の笑みをずっと浮かべる。

『でもよー』

彼の不満気な様子に、再び耳を傾けた。鬱憤が溜まっていたのか、心から心配していたのか、彼の彼女を責める口調は、少しも衰えていなかった。

『せめて電源くらい入れとけよ。・・・人騒がせなヤツだぜ、ったく』

吐き出すような彼のその言葉に、志保はそこで「あら」と反論した。

「失礼ね。入れたままよ、ずっと。あなたの電波が悪かっただけじゃないの？」

「んなわけねーだろ。昨日からずっと電波通じてねえんだぜ。それでようやくさっき通じたと思ったら電話には出ねえし」

「!？」

一瞬耳を疑った。

「ちよつと待つて、工藤くん。・・・昨日からって・・・」

「だから、昨日からだよ。ほら、オメーと秋葉原まで出かけて。オメーと別れた後。事件解決して戻ったら、博士から電話があつて。・・・すげー驚いたんだぜ。まさかどつかの事件にまきこまれたんじやねーかつて」

「ちよつと・・・待つて。頭がついていかない」

頭が混乱する。思考回路が切断されていく。

・・・あなたは、誰なの？

まさか、あなたは。

「・・・宮野<sup>みやの</sup>?・・・おい、大丈夫かよ」

そこで初めてその名前を呼ばれて、志保は再びはつとした。

そう、私の名前は『宮野志保』（みやのしほ）。

そして、この名前で自分を呼ぶ彼は、この世界にはいない。

その名前を呼んでくれる彼は・・・。

「ねえ、一つ質問していい？」

『・・・あん？』

「・・・私のこと、好き？」

『・・・は？』

面食らったように電話の向こうの彼が言った。言っている意味がわからない、とでもいうのか。狐につままれたように、しばらく言葉が失っているように感じ取れた。

『・・・どうしたんだ？おまえ』

「さあ。・・・どうしたのかしらね」

その口調はいつもと変わらない様子だった。でも、自分はそのうれしさで言葉が震えそうになるのを必死に堪えていた。

やっぱり、彼は『彼』だ。

電話の彼は、同じ空間にはいない『彼』。自分の大好きな、『彼』。

彼の名は、『工藤新一』。

「なーんて、ね。いつもこんなこと彼女に聞かれているのかと思って。『私と仕事、どっちが大事？』とか。・・・凶星でしょ」

『ば、バー口、そそそ、そんなじゃねーよ』

照れたように上擦るその言葉に、彼の正直さが伺える。きっと顔を真っ赤にさせているのだろう。いくつになっても恋愛については初心者な彼。そのくせ、愛する人は大事にしている。

そんな彼の反応に少しほっとして、これが普通なんだな、と深く実感する。

そう、このカンジ。

きつと今の自分には、これが一番ちょうどいい。

『・・・なあ、本当に大丈夫、なんだな？』

念を押すように彼がこう尋ねた。

「ええ。・・・今のところはね」

志保は、思わず意味深な言い方をしてしまった自分に気づき、言った後で後悔した。

「『今のところは』って・・・。一体、どういうことだよ」

案の定の彼の反応に、思わず志保は苦笑した。

「冗談よ、・・・軽い冗談。本気にしないで。ただ、博士に伝えておいて。すぐに帰るから心配しないで、って」

『・・・あ、ああ』

どうせ、今魔女のことを話しても、本気にはしてくれないだろうし。何より、変な心配もさせたくない。彼女も戻してくれるあてはあったし。

『・・・早く、帰ってこいよ。・・・みんな心配してるんだからな』

「あら、ありがとう」

『じゃあ、な。・・・電源ちゃんと入れとくんだぞ？』

「ええ」

『・・・じゃあ、またな』

「そうね、また」  
『・・・』

名残惜しそうに別れを告げ、彼の声ではなく、「ツ・・・ツ・・・」という、機械的で単調的な音が受話器から聞こえ出して、志保は思わずその場にしゃがみこんだ。足元に力が入らない。震える声で、絞りきったようにその言葉を出した。

「・・・バカ」

彼の言葉の節から明らかに心底心配している様子が伝わって。聞けば聞くほど切なくなる。

そして、ここにはいけないのだと強く再認識する。

あの世界にも、自分を待っていてくれる人がいるから。

それが、例え『恋人』にはなれない人であつたとしても。

彼のくれた電話で、わかったことが一つある。たった一つだけど、とても重要なこと。

この世界と、向こうの世界を繋ぐ手立てはここに、存在した。そしてそれを証明してくれたのは、やっぱり彼だった。

彼女が好きな『工藤新一』だった。

## 第8話 電話（後書き）

ふふふふふ！。ややこしくなってきました（笑）。こつぶもよくわかっていません！

ここからどういう展開になるか、皆さんも一緒に考えてみてください。いい展開になるか、悪い展開になるか。うがー><！

最後まで頑張ります。ここまでお読みくださって、本当にありがとうございます！こつぶでした！こつぶでした！



## 第9話 絶望の朝

朝を迎えたこの日が、彼女にとってこんなに喜ばしいことなんて、事実、思ってもみなかった。

目を覚まし、布団の中でもぞもぞと体を動かし、そしてそこで目蓋を開けた。

目を開けて初めて見たのは、真っ白い天井。

・・・見慣れない、天井。

(ああ・・・)

そこでようやく思い出す。・・・ここは、あのおばあさんの家だ。駅の歩行者地下通路で花を売っていた老女。彼女を助けたことによって、気がつけばこの奇妙な世界にたどり着いて。

そして、巡り巡ってまた、この世界の彼女に再会した。

今の時刻は朝ようやく7時を回ったところだった。

眠りについたのは3時少し前だったから3時間ほどしか眠っていない筈。それなのに、こんなにも頭も体もすっきりしていた。

志保は大きく伸びをすると、ベッドの脇に置いてあった小さな冷蔵庫の中から、麦茶の入ったピッチャーを取り出し、グラスに注いだ。ごくごく喉を鳴らし、グラスの中の麦茶を一気に飲み干すと、

再び満足感が体を襲い、彼女は大きく息を吐いた。それから顔を洗おうと麦茶をキッチンのシンクの上に置き、その代わりにフェイスタオルと洗顔フォームを籠から取り出し、全ての準備を整えて蛇口を捻ろうとしたちょうどそのとき、ぱたぱたというゆっくりとした底の低いサンダル音が突如その部屋の前を通り過ぎた。

その歩くサンダルの音を聞いて、志保は瞬時にこの足音の持ち主が誰か認識した。

きつと、この人物は・・・

「おばあさん・・・っ」

持っていた洗顔フォームもフェイスタオルも、まるで投げのようにその洗面台の上において、サンダルも半分足を入れることもないまま、志保は部屋を飛び出した。

どうしてだろう。別に逃げることもないはずなのに、・・・どこか、胸騒ぎがして。

もしあの老婆を追いかけていたら、取り返しのつかないことになるそうな、そんな気もちがして、彼女は逸る気持ちをどうにも抑えることができなかった。

ドアノブをまわし、勢いよく引く。

そしたら、視界にきつとその老婆がどこかしらに入ると思った。けれど、そこにはだれの気配も感じることができずにいて。きよろきよろと辺りを見回しても誰かがどこかに隠れている形跡はない。諦めて再びドアを閉めようと手を伸ばした、そのときだった。

「どこを見ているんだね、ここじゃよ、ここ」

人を小馬鹿にしたような、そんな卑屈な笑いをこめたそのしゃがれた声に、志保は廊下の手すりをつかみ、階下を覗き込む。そこに

は、その伸び切った草に立つ場所を奪われたように、小さい体をさらに縮こめた老女がこつちを見て、手をひらひらと振っていた。

浅黄色をした、薄汚い布切れのような寝巻きを羽織り、しわくちゃで赤黒い顔、頬のこけたその様子、ぎょろりとした大きな目に目脂をいっぱい溜め込んだその身なりは、相変わらず汚らしい感じは否めない。その彼女が、その高い背の草に囲まれるようにして、にやにやと笑って立っていた。志保もその表情を見て、思わずほっと笑みを零す。

「おはよう。よく眠れたかな？」

「・・・ええ、とっても」

にこりと笑って彼女は答えた。その笑みを見て、老女は「おや」と目を真ん丸くする。

「その様子じゃ何かいいことがあったね」

「そう見える？」

「ああ、見えるとも。顔が嬉しさで満ち足りている、というように緩みきつておるではないか。・・・夢の中で、例の『彼』にでも再会したつてとこだね？」

そうだと、冷やかすように笑う魔女に対して、志保は思わず苦笑した。

そこまで見破られるとは。・・・一体自分はどんな顔をしていたのだろうか・・・。

「・・・そうね。まあ、そんなところかしら」

「そうか、そりゃよかった」

できるだけさらりと答える志保に対して、老女は大きな声で笑う

と、腰の曲がったその体で志保の前をよたよたと通り過ぎる。それから、階段をひよこひよここと降りていった。

「どこ行くの？」

「決まってるだろ、今日の商売品を探りに行くんじゃない。・・・ついてくるかね？」

なにやら鼻歌交じりに10年も昔のあの時ですら『懐メロ』扱いになっていたその歌を、老女は口ずさみながら残りの階段を降りていく。志保はあわてて彼女の後を追いかけた。

その場所は、アパートから1キロほど離れたところにあつた山の袂にある小さな花畑。

それは本当に小さな畑ではあつたけれど、見事なほど立派な夏の花が咲き誇っていた。

ひとつひとつがきらきらと輝き、存在感をアピールしている。

現実世界で彼女の手によって売られていたあの萎れきつた花たちとは大違いだ、と不憫に思ったあとで、その花々ももとはこんなに綺麗に咲き誇っていたのだということを思い直す。そして、そこで彼女はたとあることに気がついた。

そういえば、自分が現実世界で彼女にもらった花は、一体どこに消えてしまったのだらう、と。

確かに、手に持ってたあのトンネルを潜つたのに。気がつけば、自分の手には花束はなかった。今の今まで自分が彼女に花をもらったことすら忘れていたのだ。あまりの自分のお惚けぶりにうんざりする。それはただうつかりしてただけなのか。それとも何らかの作用が働いていたのか。・・・多分、前者だ。不思議なことが多す

ぎてきつと頭の中から流れていってしまったのだ。あれはただの花。何も魔法の威力はない。そう思っていた。いや、思うことにした。

「・・・ほら、手伝いな。まさかただ冷やかにきただけ、っちゅうつもりはないんだろ？」

「そんなつもりはもちろんじゃないけど・・・」

先ほどまでは手ぶらであったのに、気がつけば彼女の手には花を切る鋏と箆。いつの間に用意したのだろう。そこで志保は気づく。・・・これもきつと魔法のおかげ。

「花も魔法で出せばいいのに・・・」

思わずそうぼやくと、老女は呆れたように渋い顔をしてみせた。

「バカだね。魔法で一瞬のうちに練成される花より、種から大事に大事に手塩をかけて育てた方が美しく咲くに決まってるだろ？それに、あたしの魔法の効き目はそんなに持つとは限らないし。いくらなんでもそんなズルはせんよ」

「じゃあ私はあとどれくらいで元の世界に戻してくれるの？その魔法の効き目はなくなるわけ？」

「・・・」

一瞬表情を固くし、老女は志保の顔を見つめる。・・・が。ふつと目を逸らした。

その表情に違和感を感じつつ。

「・・・さあ、わからんな」

ボソリ。と彼女が唸るように、呻くように呟いた。そんな彼女の

表情に、志保は少し戸惑いを感じる。

「えっ？」

「・・・だからあたしには何もわからんよ。あんたが元の世界に帰れるか帰れないか・・・。そう、それはこの世界の誰にもわからない。・・・わかるとすれば、・・・そうさな・・・」

まだ日のあまり昇っていない高い空を見上げ、老女はまるで遠いものを見るかのように少し目を細めた。

「このお天道様の向こうにいる神様だけさ」

冗談めかしたその声に、その言葉に、一瞬笑いさえ零れる。

「そんな。・・・ウソでしょ？この魔法はあなたがかけた魔法じゃないの？・・・それとも、この世界に私が来たのは偶然だったってこと？何も意味なく、ただ空間にたまたまた巻き込まれただけって言いたいのか？あそこにいたあなたはただのふざけた冗談を言っただけで。・・・この世界ではたまたまその人が魔法が使えた、そう言いたいのか？」

混乱が頭の中を支配していた。

信じていたから。

彼女に会えば、すぐに帰ることができる・・・。そう信じていたから。

けれど。

老女は悲しい瞳で、その黄色く濁った白目の持ち主とは思えないほどの、その少女のような澄んだ真っ黒い黒い目を悲しく揺らしながら、二度、首を横に振った。

「違うよ、あんたの世界にいた『あたし』は、確かに魔法が使えた

だろうし。多分『あたし』のチカラは今のあたしの使えるものと、さほど変わらないと思う・・・」

「じゃ・・・じゃあ元に戻してよ！元に戻して、あの世界に返してよ！」

おばあさんの、チカラなんでしょ？

おばあさんがかけた、魔法なんでしょ？

責める言葉がどうしても溢れてくる。

あの世界はくだらない。

でもあそこには『自分』の居場所があるから。

自分はその場所に今すぐにでも帰りたかった。

・・・なのに。

「だから、無理なんじゃよ・・・」

ぼそり。と老女は答えた。まるで飼い主に厳しく叱られた子犬が耳をしょんぼり垂らしているように小さく体を縮こめて。

「確かに、あたしは魔法も使える。あんたの『2回目の小学生』時代の可愛い姿だっておぼえてとるよ。・・・だけどね、残念だが、これだけはどうしようもないんだ」

「だからどうして!？」

ヒステリックになる自分を抑えることができず、さらに語調が強くなる。

そんな志保の視線から、目を逸らすこともせず、老女はとうとう、その言葉を口にした。

「・・・それは、あたしが『作られた』存在だからさ。『あなたの世界』のあたしによつてね・・・。作られたものは、作ったモノには敵わない・・・それがどういう意味か・・・あんたにはわかるかね？」

勿論、老女が何を言いたいかすぐに自分の頭の中で理解できたけれど。

志保はしばらく放心したように彼女を見つめることしかできなかった。

体の中を絶望<sup>かなしみ</sup>が覆っていた。

体の中をまるで黒い布で全て包み込んでしまったかのように何も考えられなくなって、みるみる全身の力が抜けていって。

志保はその場に、ペタリとへたり込んだ。

朝を迎えたこの日が、彼女にとってこんなに喜ばしいことなんて、思ってもみなかった。だけど、それが一瞬のうちに『絶望』に変わるなんて。

事実、思ってもみなかった。



## 第9話 絶望の朝（後書き）

こんにちは、こつぶですv

最近ちよつと文章がよくわからなくなって、ぷちスランプ再び突入のこつぶです（笑）。

保育園の行事がもうすぐ近いので（運動会）、その準備にもしかしたら追われてできないかもしれません（フルーツのお面が終わりません・・・）。小説を書く気持ちは充分ありますので、頑張らせていただきたいと思います。

## 第10話 作られた世界

「・・・それは、あたしが『作られた』存在だからさ。『あなたの世界』のあたしによつてね・・・。作られたものは、作ったものには敵わない・・・それがどういう意味か・・・あんたにはわかるかね？」

彼女の言葉が頭に響いていた。まるでシンバルを叩いたときのように、銅鑼を叩いたときのように。重く、そして長く頭の中にその言葉が響き渡っていた。

「・・・わからないわ・・・。『作られたもの』とか、『作ったもの』とか・・・。何を言ってるの？」

勿論、この目の前にいる老女が結果的には何を言いたいのか、充分すぎるほどわかっていた。

彼女には自分を元に戻す力がなく、そして、元に戻すことができないのは、自分をこの世界に送り込んだ、向こうの世界の『彼女』だけ。でも、どうしてその答えに行き着くのか、納得ができなかった。彼女の言葉は抽象的な話が多すぎる。

「ここは、私の夢の中の世界なの？でも、こんなに意識がはっきり

「……」

ぎゅっと自分の頬を力一杯抓ってみる。痛い。

そんな行動を試してみせた志保を見て、老女は「ずいぶん古風なやり方じゃの」と苦笑した。それから、再び悲しく視線を落とした。

「ここは、夢ではない。確かに、この世界は存在しておる。あなたの意識とは独立して」

「じゃあ、どうして……『作られた世界』だなんて」

その問いかけに、少し困ったように老女は志保の顔を見つめていた。愚問だ、とも言っているかのように彼女には感じ取れた。それから眉を潜めると、老女はゆっくりとしたそのしわがれた声で、彼女の問いに対する答えを教えてくれた。

「思い出してもみなよ。……昨日も、そしてさっきも、あなた自身が自分の言葉で、あたしに言ったじゃないか。……ここに来たきっかけを。あなたが雨の日、何を考えて道を歩いていたのか。そしてだれに出会ったのか」

「……っ！」

そう、この世界は。

宮野志保の思考を、その一瞬の願いを。

ある一人の老女によって叶えられ、そして、『作られた』。

「多分、そのときのあたしは、ただの年寄りの道楽だったかもしれない。どうしてそんなに弱っていたのか、今のあたしにや想像できないし。……この世界ではあたしはこんな堂々とした性格だけど、大本のあたしはよわつちい、ただの魔法が使えるばあさんなのかもしれない。それであなたに助けられて本当にうれしかったのかも」

れない。だけどその迷惑な行動によつて、この世界は『作られた』んだ。・・・町も、人も、みんな『作られた』んだ。瞬時にな。さも何年何十年、この世界で生まれ、育つてきたかという記憶も植えつけられて。自分たちがまだ生まれて間もないことを知ることもできずにね」

「そんなんっ」

そんなことつてあるはずない。

そう思うのに、どこかで信じてしまう自分がいる。

そんな志保の様子に気づいているのか、気づいていないのか。老女は表情を変えずに、志保の顔を一切見ず、淡々と言葉を続けた。

「そんな状況がわからないというのなら、よく自分に当てはめて考えてみてごらん。あんたにも同じ症状が出ているはずだから」

「・・・えっ？」

思いもかけないその言葉に、志保は思わず目を丸くした。

「あんたの頭の中にもわけのわからん記憶が入ってくるだろう？ だけど、あんたは大本の世界の人間だから、拒否反応が少なからず出ているはずだ・・・あんたはこの世界の『灰原哀』であるとともに、大本の世界の『宮野志保』なんだからな」

「・・・どうして・・・？ 『灰原哀』はこの世界に存在しないの？」

思わず湧き出た疑問に、老女は何を今更、という呆れ顔をした。せた。

「あんたがこの世界の『主人公』じゃないか。ここは、『あんたのいた世界』のあたしが、あんたの願いをかなえてやって作った世界なんじゃろ？」

（ああ、それで・・・）  
ようやく納得した。

昨日、数々の記憶と共に現れた頭痛。  
もとある記憶をどこかに押し込めて、無理やり入り込んでこようと  
するあの記憶。

・・・あれが、魔法の力だったのか。

「・・・だから、無理なんじゃ」  
「えっ？」

再び声のトーンを重くして溜息と共に話し始めた老女に対して、  
思わず志保は顔を上げた。

「あんたとは違ってあたしは、自分ではない『自分』によって作られた世界の住人の一人なんだ。他の人と共に、あんたの世界にいる『あたし』の掌に転がされているだけなんだ。所詮、作られたものは作られたもの。大本と戦うこともできないし、大本がかけた術を解くことはできない。・・・あたしの力では何もできないんじゃないよ。・・・だから。・・・残念だけどあんたを助けてやることなんてできないよ。・・・騙して悪かったね」

悲しそくに笑みを零して、老女はその日初めて、茎の高い花に鉄を当てた。

ちよきん。

鉄製の、悲しい音が、その場に小さく響いた。

「『解く』んじゃないくて。・・・別の魔法をかけられないの？たと

えば、私を元いた世界に……。工藤くんや蘭さんがいる世界に戻す魔法」

「……ははっ。確かにいい意見だけどね。……どう足掻いても覆すことができないんだよ。お互い交わらなければ同じ能力を持つことができるけどね。……大本とかち合うことは決してできない」  
「そう……」

言葉が見つからない。でも、混乱する気持ちは、彼女を責める気持ちは、ちょきん、ちょきんという小気味よい鋏の音に、少しだけ落ち着いた。全てを話してくれて、安心した。

「……責めないのかい？」

おずおずと、彼女は申し訳なさそうに声を出した。さっきまでの自分を小馬鹿にしたた彼女とは別人のように。そんな老女に対して、志保は思わず苦笑した。それから、

「……もう責めつくしたわ。それに諦めてたって仕方ないじゃない。考えて？……何かきつと手立てがあるはずだから」

そうやってわざと優しく笑って見せてから、志保は彼女の手の中にある数本の花をもらい、籠の中に丁寧に入れた。

「……ないよ。それが全ての合理。……変えようがない」

「あるわ。……探してみせる。……向こうの世界に戻ってみせる。……だからそんなに悲しまないで。しわくちゃな顔がもっとしわしわになっちゃうわ」

強く決意を固めた志保を見て、老女はそれでも少し心配そうな顔を浮かべながら、ほんの少しだけ口許を緩ませた。それはとても弱弱しかったけれど、志保に見せた表情の中で一番可愛い笑顔だ

つ  
た。

## 第10話 作られた世界（後書き）

はうう……。こつぶですー。

こんなに早くこの結論を出すとは思わなかったー><！  
どうしよう、続きが書けないー（じたばたっ

計画性なしのこつぶでしたっ。……。お面進まない……。しゅん

……。あ。9話に『絶望』させちゃったけど、……。この話でちよ  
っと前向きになってる（笑）。あはー（苦笑）。ま、いつか。

では、ここまでお読みいただき、ありがとうございました。



## 第11話 誘惑

彼女のその老女の衝撃的な告白を聞いてから、既に2時間は過ぎていた。花を売りにでかけた老女と判れ、提向津川を跨いでかかるその橋の欄干に手をかけ、川の流れをぼんやりと見つめながら、彼女は立っていた。思うことは唯一つ。

遠くにいる彼のこと。・・・結ばれることはなくても、それでも彼を愛しているから。

「工藤くん・・・」

彼に、逢いたい。声を、聴きたい。

彼女はポケットの中から携帯電話を取り出すと、リダイヤルボタンから彼の名前をすぐ見つけ、ボタンを押した。

「・・・なんだ、ここにいたのか・・・」

そのときだった。その声がしたのは。電話の受話器口からではなく、ナマの声で、『彼』の声がした。

はっとして振り返る。そこには、案の定、自分が会いたいと願っていた相手とは別の、しかし顔も中身も同じ『彼』が立っていた。驚いたような、そしてその後で心から安心したような顔を浮かべて。

彼の登場に、思わず携帯電話をぎゅっと握り締める。受話器の向こうからは未だ、単調な機械音が鳴り続いていた。

「……『江戸川くん』」  
「はいよ」

志保がその言葉を口にする、コナンは半ばうれしそうに口の端を緩めた。

「……思い出したか？」  
「え？」

きょとんとした顔で志保がコナンに訊ねると、彼は思わず苦笑した。

「……どこに行ってたのか知らないが、大分落ち着いたみたいだな」

彼の大きく骨骨したその手が、そつと志保のその緋色のふわふわな髪を梳くように撫で上げる。彼の手のぬくもりを地肌で感じ、少しこそばゆい。

「……随分探したんだぜ？」  
「……ごめんなさい」

素直な言葉が出ている自分に驚いた。そして、彼も同じ感情を抱いていたのか、一瞬目を丸くしてからにやり、と笑って、「よろしい」とだけ呟いた。その言葉の響きにまた、どきりとする。

ふわり。引き寄せられる彼の腕。そして、とくんとくん、と波打つ彼の心音。温かいぬくもり。固くて厚い胸板。

「おかえり・・・」

耳にそつと囁く彼の吐息。

（ああ、ダメだ・・・）

わかっているのに。こうなってはいけない、とはわかっているのに。

彼を見ると、こんな風にされるとどうしても動けなくなる。

『願いなんて・・・』

『あるはずじゃよ、あんたには。ずっとそのココロの中にあつたはずじゃ。・・・もっと、素直になってもいいんじゃないかね？』

抱きしめられながら、彼の鼓動を感じながら、あのときの老女の言葉が頭の中に浮かんできていた。自分が願ったこの世界。もし、一生戻ることがなかったら？

（・・・それでも、いいのかもしれない）

彼の胸の中がとても居心地がよくて。

あの老女の話聞いてしまったから。

この世界は『自分を中心に回っている』。

彼は『自分』を愛している。自分は大学に通っていて、きっとあの大学にはあの時代では交流の途絶えてしまった子供たちがいて、あのころと同じように過ごして。

・・・きつと笑顔でいられる自分がいる。

「灰原・・・」

彼の囁き。

あの老女に縋らなくても。魔法を解いてもらわなくても。元に戻れなくても。

この世界にいることは決して『損』ではないはず。

彼は『工藤くん』ではないけれど、そこに『彼女』がいないけれど。

でも、彼は「彼」であることは確かで、優しく愛してくれて、そして・・・。

「・・・だれ、なんだろうな」

ボソリ。自分の頭上で彼がそう呟くから、志保はそつと顔を上げた。憎憎しげに呟きながら、彼のその大きな手は、またそつと彼女の顎をそつと包んだ。

「お前をこんなに苦しめたヤツ。・・・こんなに混乱させちまって・・・一時はどうなることかと思ったんだぜ？」

きつと記憶を飛ばすほど、混乱させるほど怖い思いをしてきたの

だろう、と彼は思っているようだった。そうはわかっていても、まさか老女の魔法だとも言うこともできず、言うタイミングも掴めず、志保はただぼんやりと彼に身を任せていることしかなかったのだが。

「言つなよ？」

「・・・え？」

「もう、自分は『灰原じゃない』だなんて。『宮野志保』だなんて」

言葉が出てこない。そんな志保に対して、コナンは「おいおい・・・」と困った顔をして見せた。

「・・・俺らは捨てたんだ。生まれてきたときの名前を。俺は『工藤新一』・・・そして、お前は『宮野志保』を。・・・俺は『宮野志保』じゃなくて、『灰原哀』をこの10年間、愛してきたんだから。・・・この10年を否定するようなこと・・・言わないで欲しい」

『工藤新一』を捨てて10年生きてきた『江戸川コナン』である彼を見上げて、それでもその約束をするわけにもいかなかった。

ただ、ぼんやりと彼の顔を見つめることしかできなかった。そんな自分に対して、さらに彼は眉を顰め、それからぷつと吹き出した。

「ホント、そーいうとこ頑固なんだよなあ、おまえ。融通が利かねえっつーか」

こっん、と人差し指で額を軽く弾かれた。

「普通彼氏がそうやって真面目に頼んでんだから『わかった』ぐらいは言ってくれるのが普通だろ」

『彼氏』その一言に再びどきんと心が反応する。

その様子の変化にコナンは気づいたのか、いぶかしむようにその整った眉を顰めた。その後で一度自分の体から外してまじまじと見つめ、それから小さく溜息をついた。

「・・・やつぱり、治っていないようだな。っつーか、おまえ、もしかして・・・。怖い思いしたとかそういうのじゃなくて・・・博士の実験のモルモットにされただろ、だから」  
「・・・違うわ」

思わずジト目になって反応すると、彼はさらに困った顔をしてみせる。

「だってどうしても尋常じゃねえって」  
「最初から尋常じゃないのよ、全てが」  
「何言ってるのか、わかんねーよ!」

コナンの手がぎゅっと志保の手を掴んだ。あまりにきつく手を掴むから、その強引さに思わず顔を顰めた。

「やめてっ」

その手をのけようと、無理に腕を振り上げて抵抗した。その拍子にコナンの目の前に、彼女の手の中にある携帯電話をこれでもかというほど間近に見せ付けられた。

「・・・なんだ、これ・・・。すげー古いケータイ。・・・イマドキこんなの販売してねえぞ?・・・一体どこで見つけたんだよ、こんなもん」  
「あっ」

彼はひょいと彼女の手から取り上げると、ものめずらしそうにじろじろとそれを手にとって眺めた。志保自身、気づかなかったが、既に通信音は途絶えていて。音という音は受話器の方から何も聞こえてこなかった。

「懐かしいなあ。これ、こーやって耳に当てて喋るんだろう？」

嬉しそうにはしゃぐコナンに対して、志保は思わず呆れて、それを彼の手から取り上げた。それから、その携帯電話を二つに折ってポケットに入れようとして、それがまだ『通話中』という表示だったということに気がついた。

「!？」

はっとして、それを耳に当てる。

「『工藤くん』・・・？」

目の前にいる、『かつて工藤新一だった男』が、怪訝そうに自分のことを見つめているその視線を痛いほど感じながら。その受話器の向こうにいるはずの、『現在の工藤新一』の声を探した。

『・・・みや・・・の？』

受話器の向こうから、声が聞こえた。信じられない、というような驚きの充分入り混じったその声。

向こうの世界の。・・・自分が本来身を置くべき世界の住人、  
『工藤新一』の声。

そう。

まだ、電話は繋がっていた。

そして恐らく、電話の向こうの『彼』も、ここにいる『彼』も、  
『彼女』の周りに確かに起こっているただならぬ状況に、ようやく  
気づき始めていた。



## 第11話 誘惑（後書き）

誘惑。・・・こつぶの誘惑。

・・・運動会の準備してないのに、これを書くあたしが信じられない（苦笑）

だって楽しいんだもん。小説の誘惑ーvvv・・・さ、明日（今日？）は運動会の準備進めよう。ではでは、こつぶでした。

あつ、今日は9月10日で『工藤の日』。おめでとうー！！

## 第12話 隠し事

提向津川を跨いだ大きな橋の上。

彼女が持つ、一つの携帯電話を二人の視線が捕らえていた。

『・・・みや・・・の・・・？』

途絶えていたと思っていた通信が、実はまだ繋がっていて。

ここに居たいというところとした陶醉したような気持ちが一気に現実に引き戻されていく。

『おい、こら・・・返事しろよ。宮野』

2度目の、彼の声とその携帯電話から聞こえたとき、志保は反射的に目の前の彼、江戸川コナンの顔を伺い見た。

案の定、電話の向こうの『彼』と同じように、目の前の『彼』も戸惑っている。志保は思わず溜息一つ零した。そういえば、コナンの出現に慌てて、電源を切るのを忘れてしまった。まったく自分の軽率さにほとほと呆れてしまう。こんな馬鹿ばかしいミスをするなんて。

『なんなんだよ、今の話・・・わけ、わかんねーんだけど』

「そうね。わからないでしょうね。・・・まあいいわ。・・・ごめんさい、また後で」

『お、おいっ』

そう言って一方的に話を打ち切ると、power ボタンを押す。しばらく電源を切って不通にさせる。きっと彼ならまたしつこく電話を掛けようとするだろう。電話の向こうの相手より、今は目の前の『コナン』だ。

あんなに声を聴きたかった相手。・・・なのに、話もろくにしないで、自分から一方的に電話を切るなんて展開になるなんて、微塵も思いもしなかった。そんな自分の様子を、目の前の彼はただじつと眺めていた。

「・・・何？」

気持ちの焦りをなんとか誤魔化そうと、口許に笑みを作る。

「なあ、何なんだ、今の？『工藤くん』ってオメー・・・一体誰にかけてたんだ？それに、『宮野』って聞こえた気がするんだけど」

「・・・あら、そんなこと言ったかしら？」

「・・・誤魔化す気かよ？」

不機嫌そうな彼の表情。この表情は彼の、『自分の正体に対して究明する、探偵としての意識』から来ているのか、それとも、ただの『嫉妬』なのか。

元の世界で、何度も味わったことのある視線を体いっぱいと感じ、志保は心の中で苦笑した。が、わざと冷やかに言葉を続ける。

「もし、あなたと恋人同士の関係であつたとしても。それでも、私があなたに電話の相手を教える義務はないはずだけど・・・？」

「なっ・・・オメーなあつ。どーしてそういちいち癪に障ること・・・」

明らかに不愉快極まりない、といった表情から、みるみる哀しみのそれに変わっていく。それから、「……ったく、何なんだよ」と、吐き捨てるようにボソリと呟いた。

「……俺じゃどうにもできねーわけ？」

「……え？」

どきり、として志保はコナンを見つめる。少し拗ねたようにコナンは志保から背を向け、それから欄干に手をかけた。

「そーやって俺に隠し事ばかりして……。そんなに『工藤』つつう男がいいわけ？」

単なるヤキモチ、そう感じ取って志保は思わず微笑をした。そういえばあつちの世界でも彼女に対してそうだったような気がする。この世界でも何も変わっていない。

「昨日に比べて落ち着いて見えたのは、その男に慰めてもらったからかよ」

口を尖らせそう訴える彼に対して、出るのは溜息ばかりで。

「やめてくれない？ そういうくだらない言いがかりつけたりするの」

『工藤新一』の言葉で光が見えたことも確かだし、老女の言葉によつてほぼ全ての謎が解明し、戻れないかもしれないという不安から抜け出すべく、彼の声を、そして言葉を、再度求めたのも確かなことだった。けれど、こんな言われ方は何か窮屈で、さすがに嫌気がさす。

「あのね、いいかげんになさい。……あなた、実年齢いくつだと思ってるの？ もうれつきとした30近い大人でしょ。いいかげんそんな駄々っ子みたいに……」

「だったら頼れよ!!」

哀の鋭い怒声よりもさらに鋭く、彼の言葉が上から被さった。そして、彼女の細い腕をぐっと掴んだ。痛い。一瞬、びくり、と体を震えさせる。

「昨日のことも何も教えてくれねえし。その『工藤』のことを聞いたらはぐらかすし。俺はオメーの一体何なんだよ！なんで、何も言ってくれねえんだよ！……なんで何も教えてくれねえんだよ……」

悔しそうに彼は何度も呟きながら、それから愛おしそうに彼女の体を抱きしめた。

「頼って、くれよ……頼むから」

震える言葉。

「なさけねえんだよ。……何もわからないでいるのが。オメーが苦しんでるのに、手を拱いて見ているのが」

哀しみや憤り全てを隠すことなく吐き出す彼に対して、志保はまた一つ溜息を零した。

彼の背中はまるで打ちひしがれたように小さく震えていた。

そんな彼を愛おしく思う。けれど、今は。

志保は小さく首を2度3度横に振って彼の思いを振り切った。

「……あなたには、言っても無理よ。何も解決できない」

「できるかもっ……できるかもしれねえだろ。……言ってるじ

やーねーか、昔から。．．．やってみなくちゃわからない。．．．確率はゼロじゃねえんだ、って。．．．俺がここにいるかぎり。生きてる限り、おまえの傍にいる限り。．．．絶対何かできることがあるはずだから。．．．たとえ限りなくゼロに近い数値だとして。．．．ゼロにはならない。．．．そうだろ!？」

「無理ね。．．．確実にゼロ。．．．『あなたには』何もすることがない

諦めに似たその笑みを感じ取って、コナンは苛立ったように彼女の手を強く握った。その彼の掌の力に一瞬びくりと体を固まらせた。こんなに強く握られたのは初めてで。．．．少し、痛かった。彼の哀しみが強く伝わってきているようで。

「どうしてだよ！何でそんなに俺を否定するんだ!」

「否定なんてしていないわ」

「．．．じゃあ何でそんなことを言っんだ」

「それは．．．」

言うべきか迷っていた。

この事実を、彼に。

『あなたは作られた世界の住人なのよ。．．．私の頭の中でできた住人なの』

そんな痛切な言葉を彼に浴びせて何になるというのだろう。

自分はこの1日で作られたただのイメージであるなんていう事実を突き出して、一体何になるというのだろう。

それに、もし、自分が帰る道を見つけたら、彼はその瞬間、いや、彼だけじゃなくこの世界が一瞬にして消えてしまっただろう。

苦痛は味わわないで。．．．自分たちが『消える』ことすらわか

らずに、きつと跡形もなく無くなって行く。『生きた証』も少しも残らずに。残さずに。

それなのに。そんな事実がわかっていたとして、それでも、『それでも自分はあなたを置いて、この世界から抜け出さなくてはいけない』

なんて、愛しい彼女である私に言われたら？

この世で一人しかない、『愛する人』である私にそんなことを言われたら？

「・・・ごめんなさい」

そう答えるしかなかった。志保は彼のその固い胸板に顔を埋める。  
「っ！！」

けれども。

けれども、その細い体を押し返すような感覚で彼女はそこから引き離された。驚いて顔を上げると、コナンが困ったような、泣きそうな顔で自分を見つめていた。

「・・・わかった。・・・じゃあもう聞かねえから・・・だから、そんな顔すんなよ。俺まで泣きたくなっちまう」

抱きしめる代わりに、頭をぼんぼんと軽く叩かれると、彼はそのまま志保から離れた。

それから、何か言いたそうに口を窄めて、それから思い直したようにその口許の筋肉を元に戻した。

「・・・じゃあ、俺行くわ」

「・・・え？」

「ガッコ。・・・あー、オメーは確か4限だけだっけ。あー歩美たちと一緒に」

頭をくしゃくしゃと掻きながら、おどけた様に彼が笑う。

『歩美』という言葉に思わずコナンを凝視する。その反応に、彼は一瞬驚いたような顔をして見せ、それから笑った。

「あいつ、灰原と連絡取れないって心配してたぜ。連絡つけてやれよ？」

「・・・う、うん」

「・・・じゃーな。・・・またあとで」

彼女から離れると、踵を返すと、小さく手を上げた。音もなく走ってくるタクシーが、目の前で止まり、彼を攫っていく。

あつという間に小さくなっていく車体を、その姿が見えなくなるまで見つめると、志保は再び小さく溜息を零した。

「ごめんなさい」

もう一度だけ呟いて。きっと、彼をどんなに信頼しても。頼りたくても。

この真実は彼に伝えることができないから。

彼がどんなに自分を愛していて、助けたいと思っけていても。

現実の世界で待っている人がいる限りやはり自分は帰らなくてはいけないから。

この電話が続く限り。彼が自分を必要としているっていう気持ち伝わるから。

向こうの世界の彼は自分を恋愛のパートナーとしては見てくれなけれど、それでも彼と一緒にいたいから。



「この世界の彼も、大切ではあるけれど。いとおいしいと思うけれど。」

「……やっぱり私は帰りたい」

あなたを置いて。

そして、できることなら、何も知らせないで姿を消したい。  
後に何も残らぬように。

「一体、どうすればいいの？」

一旦電源を切った携帯電話をポケットから取り出すと、それに再び親指で強く押し、電源を入れた。再び、彼の名前で着信が入る。

そのメロディーを聴きながら、志保はしばらく電話を見つめていた。

が、再び電源をオフにする。

そして、ぱたりと携帯電話の蓋を閉じると、ゆっくりと魔女の家に向けて歩き出した。

## 第12話 隠し事（後書き）

．．．．．ごめんなさい。最初は電話で「俺の灰原に何の用だ！？」みたいな感じにしようかと思ったけど、やめました。あは．．．えへ．．．。

期待してしまった人、期待を裏切ってしまったてごめんなさい。

それでは、此処までお読みいただきまして、ありがとうございました！

### 第13話 信じる、信じない

アパートに戻ると、志保は一人部屋に籠って電源の入れていない携帯電話を見つめていた。

あの場所です電源を入れるのは憚られた。『江戸川コナン』と話したあの場所です。『工藤新一』に連絡するのも、自分自身頭が混乱してしまいそうだったし、『江戸川コナン』を怒らせてまで必死にごまかした話を、同じ場所でべらべらと、『工藤新一』に話すわけにはいかなかったから。それが例え、自分が元に戻るために必要な情報源になり得たとしても。

アンティークなドレッサーの白い椅子に腰を下ろし、電源を入れる。そして、再びダイヤルボタンを押そうとした次の瞬間。ズズズというバイブレーションを伴った着信メロディーが掌の中で鳴り、志保ははっとそれを見た。・・・彼だ。

思わず苦笑して、それを耳にあてる。そしてその電話の相手に向けて、開口一番こう言った。

「ずいぶん暇人じゃない。・・・そんな何度も電話をかけようとする時間があったら、その時間を使って、『彼女』にかけたりしたらどうなの？」

『・・・バーク、蘭には毎日逢ってるし、おめーが心配することじやねーの。・・・それに、もし2、3日、事件とかで忙しくてあいつと連絡とれなかったとしても。あんな意味深な話聞かされて一方的に切られて。何も気にならねえ方がおかしいっつうの。・・・確かめの電話一本入れたってバチはあたんねーだろ？』

むすっとした表情がその声から読み取れた。明らかに不機嫌だ。

相手は『工藤新一』。先ほど一方的に彼女が電話を切った相手だ。とはいえ、その答えに苦笑する。半年ほど、事件や、蘭とのデートや、大学や高校の課題で電話一本くれなかった男が偉そうに、と思いつつ、それでも彼のその言葉は嬉しかった。

『んで？・・・何があつたか説明する気にはなつたのか？』  
「・・・なつたわ。・・・あなたの知恵を貸してほしいの」  
『・・・あん？何だそら』

怪訝そうに彼の声が低くなった。

『話の内容によつちや高くつくぞ？』  
「なんでもいいわ。・・・私をここから出してくれるなら」  
「・・・」

失う言葉。ほんの少しの沈黙が流れた。そして。

「・・・なあ、ホント。・・・何があつたんだ？」

彼の声が、ほんの少し上擦っていたように志保には思えた。それは少しだけ緊張していて、今彼女の身に起こっているものが何なのか、真実を一文字も逃すものと構えているようにも感じ取れた。

『助けてくれつつわれたって何が起こつてるか話してくれなきゃ助けようがねーじゃねえか。・・・昨日から一体おめー・・・何やってんだよ。・・・何かめんどくせえことに巻き込まれてるんじゃないだろうな？』

溜息混じった声が受話器から漏れた。

（・・・本当に、何やってるのかしらね、私は）

彼の声を聴きながら思わず苦笑いを浮かべる。自分が尋ねたいぐらいだ。

コナンと新一の二人の男と昨日今日で何度入れ替わり立ち替わり話しているというのだろう。どっちがどっちかわからなくなる。

・・・まったく頭が痛くなりそうだ。

「聞いてたんじゃないの？・・・どこからかはわからないけど・・・さっきのあなたらしからぬ動揺っぷり。全然聞かなかったとは言わせないわよ」

その言葉に、一瞬沈黙が流れ、「ああ・・・」と困惑して言葉に詰まっている様子が伺えた。受話器の向こうでボリボリと頭をかく彼の姿が見えるようで。

『・・・確かに聞いてたけど。変な単語ばかりで寝言でも聞いたんじゃないかって思うくらいだよ』

「残念だけど・・・」

『わかってる。寝言にしては長すぎだよ』

苦笑まじりの言葉。先ほどの言葉がやはり彼にはまだ信じがたいようで。・・・志保自身だって今の状況にまだ信じきれていないのだから仕方ないことなのだけだ。

『博士の新しい発明品か？何かバーチャル体験とかするゲームで、それを試すように言われた。けど、やっぱりまだ不十分な部分があってデータのバグだか何かが起きて。それで現実世界に帰ってこれ

なくなった、と、・・・結局はそんなところか?」

その言葉に志保は思わず薄笑った。

「ぶつぶー。不正解。・・・あなた、考え方もホント何も変わってないのね・・・まあそれはそうでしょうけど」

『はあ?だってそれしか考えられねえだろ!』

誰と、何とを比べられたのかわからないはずなのに、それでも新  
一は反論する。馬鹿にされていると思ったのだらう。そんな彼に対して、思わず苦笑した。

さっきも目の前の彼に同じようなことを言われたばかりだというのに。自分が願って作った世界だとしても、思考まで同じだとは思わず苦笑した。違うといえば、この世界に彼女がいるか、いないか。それだけのことなのに、自分への感情がこんなにも大きく変わってしまうなんて。

(可笑しいわね)

わかっていたことなのに。

「残念だけど、博士は全然関係ないわ。・・・全部が自分の責任。・・・昨日も言ったでしょ、私は『魔法使い』のおばあさんの魔法にかかったの」

『はあ?』

低いはずの彼のトーンがその言葉だけ1オクターブも2オクターブも高くなっていた。まさかそんな台詞をまた彼女の口から聞くと  
は思わなかったのだらう。

『おまえなあ。昔から意外に少女趣味してるとは思っていたけど』  
『意外と、って失礼ね。・・・まああなたは昔から私をそんな風にしか見ていなかったでしょうけどもね、好むもの、考えることはあなたの大事な彼女や吉田さんたちと何ら変わりはないわ・・・。あなたには気づかなかったでしょうけどね。・・・昔も、今も』

一瞥し、強くその言葉を言い返すと、コナンは『わり・・・』と決まり悪そうに口ごもった。それから、その場の雰囲気を変えるように、あわてて言葉を続けようとした。

『話に戻るけどよ、その・・・なんだっけ？』

『何が？』

『だからさ。・・・ああ、そうだ。魔法使いだ。おまえが魔法使いのばあさんにつかまったとか』

『そうよ？』

『・・・そうよ、じゃなくて!!』

混乱した様子で、彼が少し声を荒げた。

『何なんだよ、おめー。さっきから。3ヶ月遅れのエイプリルフルか？1日でも過ぎてたらエイプリルフルもただのウソだぞ？』  
『残念だけど違うわ、本当のことよ？信じてくれなくても』

さらりと言つてのける志保に対して、ますます彼は困惑した様子でため息が受話器の向こうから漏れていた。

『あのさあ』

『・・・何よ？』

『俺とお前、・・・どっちがマシな意見か言つてやろうか？』

『どうぞ？』

志保はそう言いながら、髪の毛をコームで解かす。  
彼の言いたいことは勿論わかっていたが。

「……博士の作ったシミュレーションゲームに紛れ込んだつづうのも信じられねえ話だとは思っけどよ、魔法使いのばあさん説よりはマシだと思うぜ？」

思ったとおりの彼の意見に、志保は苦笑する。

「……そうね、よくよく考えれば、この話を信じろって方が無理かもしれない。それは認めるわ。私だってこんなこと、非現実的だと思うもの。……でも確かに私は魔法使いに願いを叶えられてこの世界に飛ばされたの……。だからいくら探しても私はあなたに逢えないわ……。それだけは事実よ。だって同じ空間にいないんだもの」

「おい、いい加減に」

未だ明らかに信じ切れてない新一の様子に、志保は「あら」と鼻で笑った。そしてそんな志保に対して、新一はようやく自分が少し興奮していたことに気づき、一呼吸置いて「……なんだよ」と言葉を返した。

「人が真面目に言ってるのに。……笑うなよ」

「だって何をそんなに疑ってるのかと思って。……忘れたの？あなただって、この世の合理に合わない経験。……一度はしているはずよ」

「……俺が？」

「そう。……大人の体がみるみる縮んで子供になるっていう有り得ないこと。……こんなの、不思議の国のアリスもびっくりだわ」



『なんだそら』

その表現に、彼もまた電話の向こうで一笑した。馬鹿にされたと思つて志保は思わず不機嫌になる。そしてそんな気持ちを悟られないように、言葉を間髪入れずに続けた。

「・・・でも、私が体が小さくなることはあり得て、異世界に飛ばされたつていうのはあり得ないつていうの？」

『それとこれとは別だろう？それに俺は異世界に飛ばされたことを疑問に思つてゐるんじゃないよ。博士ならいつかはやるだろうし。・・・そーじゃなくて、俺は『魔法使い』つつうモノの存在を信じねーのっ！』

もう堂々巡りだ。

魔法使いを信じなくちゃ話は進まないし、彼に知恵を貸してもらふことはしばらく無理そうだ。はあ、と溜息が零れる。

「・・・一度あなたを蟻が何かに魔法で変えてもらいたいくらいだわ」

それか、コンクリートのようなその固い頭をスポンジのようにぐにやぐにやにするか。

やわらかくて何も推理のできない『工藤新一』なんて、きっと使い物にならないわ。そう心の中で悪態一つついてみる。自分がどう話しても信じてくれない彼がとても憎らしくて。

『・・・何か言つたか？』

「いえ、何も」

苛々を隠しながら頭を手櫛で整えると、椅子から立ち上がり、そ

れから外を見た。もう彼には頼れない。そう思って、再び電話を切るうと、いつ話を終わらせようかと考えめぐねているとき、突然その言葉が聞こえた。

『・・・それで?・・・おめーはその「魔法使い」を探してるわけだ』

「え?」

『魔法使い』を信じないと言っていた彼があまりにその言葉をさらにと言うから、そのことに驚いて、志保は髪を撫でていた手を止めた。

『・・・実際「魔法」を使って、「ここ」に本当にいないのか、はたまた知らないうちに博士の発明品の餌食となったか、実は変な事件に巻き込まれて催眠術に掛けられて。・・・こことは違う世界に行っただと思わせているだけなのか。さっきのおめーと話していた男も誰かが演じていただけ、とか。・・・でも、確かにお前をそういう状況にしかけた」やつがいるってことは確かだからな』

彼は優しくそう言った。そしてその言葉を静かに聞いていた志保は、その言葉に思い当たって、はっと顔を上げた。

「・・・いる、わ」

『あん?』

そう、その世界に確かにいる。何でそのことに気づいていたのに、彼に聞くことをしなかったのか。彼とこうして繋がっているのに。・・・最初から悩む必要なんて全然なかったのだ。・・・あまりの単純な答えに、思わず失笑した。

「・・・あの・・・おばあさんに逢ってこない？」

『はあ？』

「米花中央駅のロータリーに背の低い、腰の曲がった、ちよつと汚い感じの60歳から70歳にかけてのおばあさんが花を売っているはずだから。・・・彼女にあつて。・・・私を助けてつてお願いしてほしいの。・・・大丈夫、悪い人じゃないわ」

一瞬間を空けて、それから彼の少し戸惑ったような声が聞こえた。

『・・・わかった。・・・そう頼めばいいんだな』

「お願い」

心臓がドキドキしてきた。彼が、もしそのおばあさんに逢えば。願い事を頼めば。そして、その願いを聞いてくれたら。

『リヨウカイ』

少々笑みを含んだ彼の声がした。

『また、電話すつから。・・・それまで大人しくしてろよ』

「ええ」

じゃーな、と言って、その電話は切れた。再び、「ツー、ツー、ツー」と単調な機械音が聞こえ、志保もHOLDボタンを押した。それから、大きく溜息をつく。

心の底から吐き出された溜息。それからゆつくりとベランダの方へ歩き出す。窓を開ければ日の光が差し込んで、階下からは彼女が育てた数種類の鉢物の花の香りがゆらゆらと昇ってきて。サンダルを履き、ベランダの手すりに手をかけ、志保はそこで大きく息を吸い込んだ。

事態は決してそこで止まっているわけではなかった。

ゆっくり、ゆっくり確実に動いていたのだ。

案外早く帰られるかもしれない。

それに対してようやく安堵のため息をついた。

この電話が繋がっている限り、彼と繋がっている限り、希望は見えていた。

多少時間はかかっても、自分は帰れるのだ、ということ。

元の世界に老婆が存在する限り。

そうして、あの場所に彼女がいる限り。

今、この情報を誰かに伝えたいと思った。

今、この状態で伝えるべく人はたった一人しかいないけれど。

「おばあさんに伝えなきゃ」

志保はベランダから玄関に向かい、早足で移動すると、鍵も閉めずに部屋を飛び出した。

ただ、彼女に伝えなかった。

自分が元の世界に帰られるあてがあるということ。

元の世界と自分はこの電話で繋がっていて、元の世界の人物と連絡が取れていること。

そうしてその人物は自分の話を信じてくれ、自分をここに連れてきた張本人を探し出してくれると約束したこと。

その人物は世界で一番信頼している人だということ。

だから、元に戻るから。

そんなに負い目に感じないで欲しい、ということ。

そのすべてを伝えたくて。

志保は老婆のいる部屋へと向かうために、階段を下りていった。カンカンという鉄の音でさえも、今の彼女にとっては心地よかったのだ。

## 第14話 たったひとつの命綱（前書き）

ひさしぶりです。

以前掲示板かどちらかで、お知らせしたように、18、19話まであった話をずいぶんカットして軌道修正しました。老女自殺の話を一切なくしたかったので、ごっそり削ったわけで。

もしかしたら、それを読んでくださったっていた方々は、今の話を見てあれ？って思う場面があるかと思いますが、ご了承ください。

と、前置きに＜＞（苦笑）

あ、あと。文章もちょっと変わってたらすみません（苦笑）どうしよう（笑）

で、でも！

がんばりますので、どうぞ最後までよろしく願います。

## 第14話 たったひとつの命綱

『工藤新一』からの電話を受けて知った自分が元の世界に戻るという情報を直ぐにでも伝えたくて部屋を飛び出したのに、彼女の住んでいるその部屋は、留守のようだった。

畑にもいないということは、あのロータリーだろうか。

一瞬躊躇したが、覚悟を決めて志保はアパートの敷地内から道路へと歩き出した。

昨日歩いたその道を引き返す。

そうして、歩きながら考える。

抱きしめられたり、キスされたり甘い言葉を囁かれた江戸川コナンのことを。

声だけ聞いた阿笠博士のことを。

昨日会った、円谷光彦のことを。

まだ会っていないけれども、この世界の中で生きている大好きな皆のことを。

それはすべて

「みんな、私の妄想の産物：なのよね」

自分が、あの老婆の前で一瞬望んでしまった考えを、読み取られ作られた世界。

いなくてはいけない人がいない世界。

此処は、自分のひとつの憧憬の場所であって、罪の場所でもある。一瞬でも望んでしまったことに対する罪の場所。

ココロのどこかで待ち望んでいたことはわかっていたから。

だからこそ。

だからこそ愛着が沸く前に離れたほうがいいのだ。

幸い、今だったらこの世界で関わっている人物は少なく、問題の大本であるコナンとは先ほど微妙な別れ方をしたばかり。

この状態がベストなのだ、と志保は思っていた。彼とは仲直りをするつもりはなかった。この世界の彼を傷つけてしまったのは確かだったが、あの場で真実を伝えれば余計に彼を傷つけ、絶望へと追いやったはずだったし、だからといってフォロースすることももうないと思っていた。苦しいけれど。

もう、会うつもりはなかった。

会ったら、彼に惹かれるのはわかっていたから。

また、彼のそのままの笑みに、自分だけを見つめるその瞳に心を揺り動かされるから。

帰るべきところがあって、待っている人がいるとわかっているのに、彼の自分を想う一つ一つの言葉に、酔ってしまうから。

言葉の鎖に、彼の許へと 『工藤新一』ではなく、『江戸川コナン』に繋がれてしまうから。  
それが『偽り』の『作られたもの』だとわかっているても。

だから、この場所を居心地のよい場所へと思い始めない今のうちに。

蘭のいないこの世界を罪の場所だと感じられることのできる今の



うちに。

そう、

今なら引き返せる。

電話で工藤新一の声を聞いて『帰りたい』と思う今なら。

ならば、なぜ自分はこの部屋を出て、外を歩いているのだろう。

できるなら、工藤新一が元の世界で自分をこちらの世界に送り込んだ老婆おやういぼんを見つけてくれるまであの部屋にいなければいけないのに。老女はきつと夕刻には戻ってくるから。

それでも、なぜ自分はこの道を歩いているのだろう。

自分から会いにいかうとしているのだろう。また、彼らに会う危険を冒してまで。

それはやっぱり今伝えなきゃいけない、という何か得に知れぬ不安のようなものがあつたのかもしれない。あつた。

駅ロータリーへと通じる地下歩行者用通路まで差し掛かる。坂を

下り、しばらく歩き、そうして奥の方に、その姿を見た。

路肩にビニールシートを敷いて、その上に一人分の座布団を引き、そこに座って花を売る老婆。

「おばあさん……」

声をかけると、老女はちらりと志保の姿を一瞥し、下を向いて笑った。

「おや、来たね」

「おばあさんに話したいことがあるの。……ちょっと、いい？」

そう言つて老女の隣に行くと、彼女は「いいよ」と、鞆からもう一つ座布団を出し、志保に手渡す。志保は「ありがと」と言つてそれを受け取ると、尻に敷いた。

地下歩行者用通路には、まるで、今は誰も使っていない通路に足を運んでしまったかのように、自分たち以外一向に人が来なくて。何度か電車の通る音が聞こえているというのに。

駅から降りた人たちはいったいどこを通っているのだろうかと思つてしまう。

それもまた彼女の使う魔法のようなものなのかもしれないけど。あの廃墟のアパートを、視覚は綺麗な新築のアパートに変えたように。

「何だね？」

きよろきよろと周りばかりを見回していたその様子があまりに可笑しかったのか、相変わらずの脂やにばかりの黄色く汚れた歯を見せて老女はにかりと笑った。あわてて志保はかぶりを振る。

「いいえ、別に」

「……別に、って話したいことがあるんじゃないのかね」

「あ、いや、それは……」

「奇妙な子じゃね、昔、探検しに来てたあんたを見たときは、そん

な印象は受けなかったよ。10年経てば変わるもんかねえ。それとも、あたしが見た10年前のあんたとオリジナルのあんたの10年前とはまた性格が違うのかね？」

「さあ、同じだとは思うけど……」

そんなことを言いに来たわけじゃない。そうはわかっていたが、くつくつ、と老女は楽しそうに笑うから、調子が狂う。それでも、意を決して口を開いた。

「ねえ、おばあさん」

「何じゃね？」

「…私ね」

ポケットから携帯電話を徐に出し、老女に見せた。

「…おや、懐かしい」

もの珍しさからか、老女は口元を緩ませ、目を細ませてそれを手に取って眺めた。

「今じゃもうすっかり見なくなった。こんなアナログなものをまたお目にかかれるなんて。あんたと関わらなければこれを手に取ることも」

「…それね、繋がるのよ。今も」

「え？」

ぎょっとした表情をして、老女は志保を食い入るように見つめた。

「あつちの世界と、繋がるの」

「そんな、まさか」

驚きを隠せないような老女を見て、志保は思ったとおりだと思っ

た。そして告げて正解だとも。

「そう。それでね、彼にその電話で、あっちの世界の貴方に会って欲しいってさっき頼んだ。だから」

「…彼？」

「そう、彼。工藤くんよ」

「ああ。昨日あんたが言ってた相手のことか…。あんたが今いるこの世界を作り出したその元凶」

『元凶』という言葉に、志保は一瞬目を丸くして、そうして自嘲的に笑った。確かにその通りなのだけれども。改めて口にされると何だか変な感じだ。彼は何も悪くないのに、と。悪いのは自分だけだというのに。

「でもそうか、ならば、このケータイが”宮野志保”と”工藤新一”を繋ぐ、それから“ここ”と“向こう”を繋ぐ、『たったひとつの命綱』となるわけだね」

顎をしゃくりながら老女は志保をちらりと一瞥する。

「…ま、平たく言つとそういうことね」と、志保は答えた。

大袈裟な物言いだ、とも思ったが。

「じゃあそいつを信じて、あんたはこんな処ところになんていないで、さつさと早く家に帰りなさい。意味はとづくにわかってるだろ？」

「ええ。…愛着が沸いて離れがなくなる」

「バカだね、それだけじゃないよ。…あんたが離れ難くなればなるほど、元にいるそいつとの連絡が通じにくくなるんだよ、恐らくね」

「え…？」

「そのケータイが、あんたのあっちの世界への未練のバロメーターみたいなもんだからさ。」

そいつが繋がらなくなつたときには、もう終わりだ。一度切れたケータイはきつともう繋がることはないじやろ。そうしてあんた

がいつか、この世界で暮らすのも飽きてきて、もう帰りたいと思っても、もうそのケータイは一切繋がらないじやろよ。…まあ、その時、その工藤という男が同じタイミングで、その世界で生きているあたしを見つけて、あたしがあんたを元に戻そうという気になれば、また違ってくるかもしれないがね…。それもまた確率の低い話じゃ」

話がややこしくて、志保もまた頭の中で組み立てて理解しようとする。『あっちの世界』『こっちの世界』。『もし私がこの世界に残りたいと思ってしまうことがあればの話』。

本当に、自分と彼女は昨日からこんな話ばかりだ。

いつも非科学的なことだ、と莫迦にしていたことが現実となつて、しかもその老女のしゃがれた聞き取りにくいその声で話されているのだから、ひとつひとつゆっくり頭の中で整理しながら考えていくことしかできなかった。

「それにさ。…あんたが帰りたくて仕方がないだろう今だって。いくらこのケータイであんたと新<sup>やっ</sup>一をいつでも繋がられる状態であるとしても、あたしを見つげ出すのは容易なことじゃないと思うよ」

「え？」

思わず、目を開いて、老女を凝視した。

「…言つとくけど、10年前のあたしは、…まあ、ここで生きてきたあたしの10年前の話じゃが。自分で言うのもアレだが、…その…今より物分りのいい婆<sup>おばあ</sup>じゃなかったはずだからね。それに、移動をよくした。今はこの場所があたしのテリトリーみたいなもんだけど、昔は東京をフラフラ彷徨っていたからねえ」

「そう…なんですか…」

「そうさ」

老女は強く頷いた。

「10年前、あんたがあたしを見つけたからといって、それは偶々（たまたま）のことであって、また同じところで会えるとは限らない。すぐに元に戻れるとは限らないんだ。」

だからあんたはその工藤ってやつがあたしを見つけ出し、あたしが魔法を解くまであんまりここににいるやつらと接触しないこと。勿論、あたしにもね。あんたが向こうに帰りたいのならばね。あ、だからといって今住んでいるところを取り上げようとはしないから安心しな」

「は、い…」

一方的にいろんなことを言われすぎて、いくら聡明な志保であっても、この話による適応にはついていけてなかったわけだ。けれども、やつとのことで、戸惑いながらも一つの質問をした。

多分、このことはこのおばあさんは触れていなかったはずだ、と思っただから。

「あの…」

「何だね？」

「魔法は…あの、このせかい此処に連れてきたおばあさんによる魔法は自然と解かれることはできないかもしれないけど、まさか、一旦かけた魔法が、ある一定期間を過ぎたら解けなくなるってことはないわよね？タイムリミット、とか」

「さあね…私はやったことないから、それは何ともいえないね。私の叔母は、自分の家にいた鼠を人に変えた実験を一度やったことがあって。その解き方を忘れ、大変なことになった覚えがあったわ。」

…何とかその解き方を思い出したから事なきを得たようだけどね…。そんなときは解き方を思い出すのに1週間はかかったから、それぐらいは大丈夫だとは思うがね」

「そう…」

本当に、厄介な魔法をかけられたものだ。

けれど、そこまで悲観視していなかった。

自分に、一切迷いなんてなかった。

ケータイが繋がらなくなる恐れなんて、絶対ない。そう確信していたから。

いざとなったらケータイを一日中繋いで、向こうの世界の彼と一緒に探していればいい。

机上の話だ、といわれてしまうかもしれないけれど、新一の力には少しくらいはなれると思っていた。

それで何とかこの1週間の間で老女を探しあて、彼の情の厚い（気障ったらしともいう）その言葉と雰囲気です得してもらえれば。それが万が一駄目だったとしても、電話<sup>じぶん</sup>ごしで志保から直接老婆に頼むことができれば。

きつと何とかなる、そう思っていた。

けれど、その考えが自分にとってよほど甘かったということの後になって思い知らされることになるうとは、きつと誰もが予測することはできなかったと思う。

## 第14話 たったひとつの命綱（後書き）

えーと、お久しぶりです。&はじめましてこつぶです。

2年前、3年前に最終更新した以来、ゴールが見えてこず、スランプにそのまま陥ってしまいました。

それで削除しようと決意したのは去年かおとしのことでした。

去年6話、7話分一気に消してしまったこの作品。

すごくいろいろ待ってくださった方もいたので、そして話が結構進んでいたのも、もしかしたら戸惑う人もいたかもしれません。前の設定の方がよかったのに、と。

でも今回も、そう思ってください。方たちが満足してくれる結果になるように、最後まで、今度は最終話まで削除せずに走りつづけるようがんばりますので、よろしく願いします。

こつぶでした。



## 第15話 竊れた体（新一サイド）

その男、工藤新一が宮野志保と一番最後に電話を話したのは数分前のことだった。

朝まで続いた仕事が終わりに、家に帰ってきたのは9時を少し回っていたところで。

そろそろ一眠りしようとベッドに体を沈めて、ウトウトと夢の中に堕ちかけた、そんなときにかかってきた電話。

安眠を妨げたその相手は、他でもない昨日から姿を消した行方知らずの彼女だった。

突然かかってきた思いもかけない相手からの電話に驚き、それとともに、いつもどおりの減らず口を叩く元氣そうな様子に心から安堵したが、次の瞬間から本当に本人かと確認したくなるような内容だった。

「魔法使いに魔法をかけられた」だなんて御伽噺おとぎばなしのような話。普通の人なら、信じて話が無理かもしれない。

いつもの自分だったら、きっと鼻で一笑して終わりだろう。

けど、らしくない言葉ばかり彼女の口からぽんぽん出てきた。

一番、そういう絵空事のような話を聞いて馬鹿にすると思われる彼女自身の口から出てきたことに、驚愕した。

だからこそ。

だからこそ、彼女の話信じれたのかもしれない。すべてがすべて信じているかというのと、またそれも違うのかもしれないが。

しかしその後でさらなる疑問というか不安というか 得体の

知れぬ、何かモヤモヤとしたものが彼の中で溢れ、止まることはなかった。それは、彼女と繋がっているのが唯一自分だけだということだった。

「新一くん、本当にこれで繋がったのか？何でワシには電話の一つもないんじゃない？本当にその電話は、志保くんだったんじゃないかな？」

不安そうに新一に携帯電話を片手に尋ねるのは、今では志保の父親同然な存在である博士からだった。時々過保護かと思う部分もあるが。

「大丈夫だよ、博士。あいつは、宮野だ。他の誰でもない」

それでも落ち着かない表情で自分を見つめる博士に、新一は自分が次に言い出すその根拠となる言葉を待っているんだ、という様子がすぐにわかった。きっとそれは博士を慰めてくれる言葉であつてほしいという願いを込めた目で。

そう。

彼女を娘同然に可愛がっている博士でさえも、一切連絡がなかったのだ。新一と買い物をする、家を出ていったその瞬間から、今まで、一切、電話も、メールでさえも。

それを知らずに、念のためにと志保から頼まれごとをしたから今からその人を探してくる、というような類たぐいのメールを博士に送ったら、すぐに電話がかかってきた。そして、今はいてもたってもいられなかったのだろう。メールを送った15分後には新一の家にいる。

「いたずら電話じゃないんじやろうな!? 本当にそれは志保くんじゃったのかね!? なぜ、ワシに電話一つくれんのじゃ!? 志保くんならどうして…。もしかしたらその女性は、志保くんじゃなくて組織の誰かに捕まって、実はすり替わってるんじゃないのかね!? 新一くんは、本当に組織を倒したのかね!？」

焦燥した表情で、博士は言葉を荒げた。今にも新一の胸倉を掴みかかりそうな勢いで。

そう、博士は志保とは一切連絡が取れなかったのだ。今の一度も。

電話は勿論、メールでさえも。

『お客様のおかけした番号は、現在電源が切られているか、電波の届かないところに』

延々と受話器の向こうでそのような音声ガイダンスが流れたという。だから余計に心配し、夜も眠れない状況だという…。確かに、大きく太ったその体から『痩せたように見える』とか、『窶やうれた』という表現は、なかなか言いにくいが、それでも、憔悴せうすいしきったその表情は、彼の性格を父親のように、親友のように知りすぎている新一自身にとっては辛い。

「…落ち着けよ、博士。大丈夫だから。組織は確かに潰れたじやねえか。あんどき、皆傷だらけになって帰ってきただろ?」

新一はいつもよりも必然的に口調が和らいでいた。

多くの負傷者、犠牲者が出たあの銃撃戦。あの日のことは、新一の胸にも強く残って昨日のことにように思える。それは博士だって同じことだ。けれど、それでも不安が不安を呼んでしまっているのだろう。

「でも、残党が…」

「バーロ、そこんところは全部FBIが把握してるから大丈夫だよ。…もう、俺たちに手から離れたんだ。…寂しいけどな」

といいつつ、ジョディから報告は聞くこともあるが、今のところ博士や志保に内緒。志保が『Sherry』のときの暗い過去とかも耳にすることもあるから。もう、すべて終わったのだ。これ以上志保を傷つけるつもりはなかった。

だからこそ、あの電話の人物がニセモノだという気持ちは最初から頭になかったのだ。けれど、今の博士の言葉を聞いて、志保の今巻き込まれている事件（事故？）は、博士は何も関わっていないなかったことを再確認する。志保の話はますます信憑性が増してきた。

「魔法使い、か」

「…なんじゃって？」

「何でもねーよ」

今は博士に言っても、混乱するだけだ。

判っていたから、新一は先ほど志保から受けた電話の内容の一部を話すことはしなかった。

でも、志保は意外と不自由な生活を送っているみたいだと伝えらる、博士は半信半疑で。それでも、少しは新一とだけでも繋がっていることに安心したようで、それから30分後、帰っていった。

心なしか後姿が少しだけ元気になったような気がして、ほっとした。

「にしても、…なんで繋がらねーんだよ。博士には」

ポツリ、つぶやいた。

いつもの志保なら、自分だけでなく博士にも連絡を入れるはずだ。なのに、一度も。

とてつもない不安が彼の中で、渦巻いていた。

「さて、…どうしたものか」

先ほどまで寝ようとしていた体が、今では完全に寝られる体ではなくなっていた。

志保からの電話も、そうして、博士のあのやつれきった表情も。

「…動かないわけにはいかねーだろ」

疲労が少し頭にあつたのは確かだ。だけど、今はそれよりも早く志保のいる状況から抜け出させてやりたいという気持ちが強くて。

新一は、動き出した。

## 第15話 竊れた体（新一サイド）（後書き）

こんにちは、こつぶです。

新一サイド、ちょっと早めにいれてみました（笑）

前回、削除したのと同様、少しずつ、新一の動きもいれていこうと思います。

・・・しかし、博士と新たんのこのやり取り。

昔『またあした・・・』で、コナンと博士がやっていた話に似てるなあ、と思ってしまいました。

見逃してください。（切実・涙）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

## 第16話 友達から親友へ

志保が老女と別れたのは、昼の11時を少し回ったところだった。時計を見て少し驚いたが、そういえば1時間近く話していたのだから、まあそんなものだろうとすぐに思い直した。

アパートへ戻ろうと地下用通路を駅とは反対側に抜けたとき、眼鏡をかけた黒髪の綺麗な女性とすれ違った。

一見イヤホンをつけて音楽を聴いているだけに見えたが、実際は誰かに電話をしているようで、周りを憚り、<sup>はばかり</sup>小声で何かコソコソと話していたようだった。何年か前に流行ったような形の服装。流行は、あるサイクルで回っているというから、きつとこの時代の今の流行なのだろう。しかし、それに加えてもあの眼鏡はどうしても気になった。これもまた流行のひとつなのだろうか。普段ならそうは心の中で思っても、ただそれだけのことなのに。なのに、肩から15センチほど長めの黒くサラサラとした綺麗な髪を持つその人に何かを感じて、一瞬立ち止まる。

そうしてその女性も。先ほどまではこちらにそこまで注意をしていない様子だったが、志保が立ち止まったまま動かずと女性を見ていたから、その視線に流石に何かを感じたのだろう。視線をずらし、志保と目を合わせた瞬間、「あ！」と短く声を上げ、みるみるうちに表情を明るくした。

「いた！」

「…え？」

まるでずっと探していた猫を見つけた幼い少女のような表情をして。その女性は志保の手をぎゅっと握った。それから、黒ぶち眼鏡のレンズの奥から、黒目の多いかわいらしい瞳を自分に向けた。

「にげちゃだめっ！絶対ここから動いちゃだめなんだからっ！」

その口調は、ごくごく身近で感じたことのあるものと瞬時に気づいた。そして、最近触れられなくなりつつある、この口調。

（まさか…。でも、彼女は眼鏡なんて…）

振り払うわけにもいかず、とりあえず手を掴まれたその状況のまま、志保は困惑してその眼鏡の女性を見つめていた。少女は、イヤホンに向けて声を上げる。

「光彦くん！哀ちゃん、捕まえたー！！！」

大人びた眼鏡をつけた外見とは裏腹に、その女性は幼い少女のような無邪気な嬌声を宙に響かせた。

けれどそんなことよりも、たった今彼女の口にしたその言葉自体に志保は驚きを隠せられなかったのだ。自分のよく知る、二つの名前。一つは、自分が子どもの姿をしていたとき名乗っていた仮の名前。もう一つは、その当時自分が一緒によく行動を共にしていたグループのメンバーで、昨日も会った少年の名前。そして、目の前にいる彼女も見かけ同年代とみえる。

と、いうことは。

「…あなた、…まさか」

眼鏡の奥の瞳は、確かに彼女が元に戻る前、約2年間一緒に小学校生活を過ごし、そうしてその純粹さの中にある強さを持っていて、密かに憧れていた、ある少女の面影が確かにあった。



「吉田さん」

「…え？よし、だ…？」

その女性は一瞬きよとした顔でしばし志保を見つめる。ああ、他人の空似そにだったか、と志保は謝意の言葉を伝えようとすると、みるみるうちの女性の表情が曇り、ひどいなあ、と小さく呟いた。

「哀ちゃん、酷いよ！私、哀ちゃんに何か悪いことでもした！？原因はもしかして私?!」

「…え？」

「それとも、私がコナンくんの眼鏡なんて今更取り出したりしてみたからっ!？ヤキモチ妬いて、それで怒ってるの!？」

「…はあ？」

「なんで今更“吉田さん”なの!？あゆみ…私のこと、ずっと、哀ちゃんは“歩美ちゃん”って呼んでくれてたじゃない！余所余所しい言い方なんてしてほしくないっ！」

(ああ・・・)

志保はその、目を潤んだ瞳でじっと自分を見つめる彼女を見ながら、確信した。やっぱり彼女は吉田歩美だ。間違いなかった。

その眼鏡の奥の表情は、自分の知っているまだ8歳の彼女と何も変わっていないかった。そしてこの性格も。

何回も何十回も見ているこのキツとした強い表情。けれどもその奥で、泣きそうな表情。

見かけは同年齢だが、本当は自分より遥かに若い年齢の少女とずつとこの2年過ごしていたから、突然自分と外見も内面も同年代の、大人の女性に変わった彼女を脳が変換はできなかっただけで。

昨日円谷光彦と会ったときの衝撃とまた同じ、いや、それ以上かもしれない。眼鏡までつけて。一体、この世界では10年の間にど

うしてこんなに変わったのか。

「…ごめんなさい。ちょっと頭がついてなかったから…」

「…何で？ ああ、コナンさんと喧嘩してたって言ってたもんね」

「そういうのじゃなくて」

「え？」

「め・が・ね」

「ああ、コレ。哀ちゃんに見せたことなかったっけ？」

何でもない、というように今までかけていたそのごつくて古い型の黒縁眼鏡を外し、その女性は志保の前に素顔を晒した。

：素顔の女性は、８５パーセントのものを、９９、９パーセントの確信に変えた。

とつても綺麗な顔立ちで、小学生のときの彼女も人気のあった方だったが、この容姿とその性格だったら、大層モテただろう。なのに、その美麗な顔をごつい男物の昔くさくてダサい眼鏡で隠しているなんて。なんでそんなもつたいないことをしているのだろう。

「目でも悪いの？ コンタクト？」

心から心配して、歩美に尋ねた。

「ああ、これ伊達だよー！ 哀ちゃんだって持ってたでしょ、コナンくんと同じの。覚えてないかな？ 哀ちゃんを強く責めちゃったの。なんで哀ちゃんがコナンくんとお揃いの持つてるの！ って。…すごく責めちゃった」

「え…」

そんなの、覚えてない。そう言おうとして口を開きかけた瞬間、

また、きた。

あの頭痛が。けれど、迂闊にも突然すぎて何も守ることができなかった。

ズキン、ズキン、ズキン。

「ッ……ッ」

「哀ちゃん!？」

歩美が志保の只ならぬ様子を察知し、心配そうに駆けつける様子が見えたが、頭痛のせいでフラリ眩暈を覚え、片手で顔を拭うように覆った。

そこで一瞬だけ。顔を覆った瞬間だけ視<sup>み</sup>えた世界。聴こえた幼い声。

『哀ちゃんだけ、ずるいつ！なんで哀ちゃんだけお揃いのものを持ってるの？いつもいつも、コナンちゃんと哀ちゃんはどうしてっ……どうして歩美たちと離れたところにいるのお？』

あれは自分の部屋だ。そうして、そこに映るのは、泣きじゃくる幼い歩美の顔。あれは、多分小学1、2年。自分の知っている歩美と変わらぬ年代だ。彼女を自分の部屋になんて誘ったことなんて、

自分の住んでいた世界ではなかったのに。この世界ではなんでそんなことをしたのだろう。

歩美は、<sup>なだ</sup>宿めようと手を出した自分の手を振り切って、部屋を飛び出した。

「哀ちゃん？」

その声にはつと我に振り返っていた手をのけると、歩美が心配そうに自分の顔を覗き込んでいた。

「どうしたの？具合悪い？」

「いいえ、そんなことはないわ」

心配かけまいと笑ってみせると、歩美はほっとした顔をした。

「それで、作ってもらったんだっけ」

「うん。少年探偵団全員分ね」

「そう」

世間的にはそれは妥当かもしれない、と志保は思った。ただそれは違っても。

だって、彼女が求めているのは、そういうことじゃなくて。

彼女は、

予備の眼鏡を欲しかったんじゃない。

彼と同じレベルの探偵ごっこがしたくて欲しかったんじゃない。ただ、彼と『お揃いが欲しかった』だけ。

そして、お揃いのものを持って、一緒にいるときには使おうとしなかった、みせたこともない自分に嫉妬しただけなのだ。

実際、あの頃の自分だって別にお揃いのものが欲しくて博士強請ったわけでもないし、きつとこの世界の自分だってそう思ったはずだ。

もし彼女に頼まれたら、自分は歩美用に1つだけ作ってもらうようにする気がした。

「覚えて、ない？」

「……そんな、こと」

「……いいよ、大丈夫だから」

歩美は志保が覚えていないことを察し、小さく笑った。別に気にもしていない様子で。もう、傷は去ったのだろ。ホッとする気持ちもあったけれども、やっぱり申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「でも、ちよつとだけショックかな。……だって、私には大切な思い出なんだもん。……だってそれは……哀ちゃんと“友達”から“親友”に変わった日だから」

その言葉に、志保はぎゅつとこぶしを握り締めた。

どうして、こう、聞きたい情報は流してくれないのだろう。

思い出せ。

思い出せ。

思い出せ。

念じて、念じて、ようやく知恵熱の時に感じるときの頭痛のように、チクリチクリと痛み出す。でも、それはすぐに消えてしまった。また思い出そうとするのに、どうしても浮かんでこない。そうして  
いるうちに、歩美がまた語りだしていた。

「私ね、あの時。部屋を飛び出したとき、ちょうど博士とコナンくんがいて。思わず叫んじゃった。哀ちゃん以上に、責めちゃった。甘えちゃった。わーんて、大泣きした。疑ってたんだよね、あのころから二人のこと。…それできつとコナンくんも哀ちゃんのことを好きだつて気づいてたから。何とかその中に入りたかったんだ。お揃いなんてしないで欲しかった。2人の世界だけじゃなくて、私自身、入れてほしかったんだよね。どっちも好きだったから。コナンくんは、男の子として。そして、哀ちゃんも友達として、いちばん好きだったんだ。だから、私も入れてもらいたかった」

「…そう」

「コナンくんも博士もオロオロしてた。だけど、わかった、作るよって約束してくれた」

「…」

「…けどね、それから1週間後。…できた眼鏡は3つ。私と、元太くんと、光彦くん。そしてそれをくれたのは、哀ちゃん、貴方だ」

ったよね？」

思い出したいのに、全く記憶が出てこない。『信号』は鳴らなかった。

本当に見えてこない。

自分のことがわからなくなった。『この世界の』自分が。いったい、彼女に何がしたいのか疑いたくなって。

「そうする」ことで、歩美を傷つけることは一目瞭然なのに。

「…すごくショックだった。他の2人の手に渡されて、事情も知らない2人が『探偵団のアイテムがまた増えた』と手放して喜んでるのを見て、私だけ泣いてるわけにはいかないって思ってた。でも思ったんだあ。やっぱり、そうなんだ、って。コナンくんにとっても、哀ちゃんにとっても、所詮私たち3人はいつでもセットなんだ、って。『セット』でしか考えてないんだ、って。…正直哀ちゃんのこと不信感でいっぱいだった。クライになりそうだった」

ズキン。

頭じゃなくて、胸が痛む。歩美の心の叫びが。

あのときの歩美たちもまた、此処にいる10年前の歩美のように、傷ついていたのだろうか。いや、少なからずは思っていたのだと思った。直接彼女たちから聞くことはなかったけれども。

「でもね、あのとき。哀ちゃんは眼鏡を私にくれながら、ちゃんと私の手首を握って、こう言ってくれたの」

「…え？」

そこで、ズキン、と痛むあの痛みを覚え、予兆を知り、初めてこ

の痛みがきたことを心の中で喜んだ。フラリ、フラリとまた眩暈を覚え、目を閉じると、聴こえてくるのが彼女の声と、そうして視えてくるもの。

目の前に映るのは、小学校の下駄箱で。2人はとくに教室に向かつて走り出していて、そこにいるのは、自分と歩美の二人だけだった。

今にも泣き出しそうな、潤んだ瞳で自分を見つめる歩美に対して、自分は緊張していた。

『…本当はね、あの眼鏡、1つだけ。江戸川くんのおさがりをあなたにあげるはずだったの。…彼、最近新型に変えたから。いらなくなっちゃって』



『え？』

『博士がね。壊れてないのならば彼のをあげたらどうかって言ったのよ。そうすればあなたも喜ぶし、って』

『えー、そうして欲しかったよー。どうしてそうならなかったの？』

少し拗ねた表情で、歩美が口を尖らせる。

『それは、私が』

『え？』

『私が、嫌だったの。…あなたに彼のおさがりを使われるのが』  
『え、それって…』

次の言葉を言うのが、すごく緊張して。

でも、言わなくちゃいけない。その時の自分は、そう思っていた。  
どきん、どきん、どきん、どきん。

強く鼓動まで感じた気がして。  
そのときの自分は、言った。

『江戸川くんが。…彼のこと、ずっと好きだったの。…だから、あなたにはあの眼鏡は渡せない』

視線をあげたら、歩美は自分を見つめたまま、にっこり笑っている。  
て。

「よかった。…言ってくれた。そんな気がしたんだ」

と言って、自分の頭をそつと撫でた。まるで彼女の方が姉だった

かのように。

けれども、歩美の目頭から涙が滲んでいたのを、自分は見逃すことはできなかった。

「疑っていたことが、ホントのことだって知って、やっぱりショックだったけど。…でもね、哀ちゃんの口から自然に言ってくれるとは思わなかったから、うれしかったな」

歩美のその言葉に、志保ははっと目を開けた。懐かしそうに少し遠い目をして、歩美はうつすら笑みを浮かべていた。

「でも、そのとき思っただ。やっぱり哀ちゃんとは離れられないなあ。って何があっても、私はこの子と友達でいたい。親友でいたいって」

「なんで？」

「なんでだろうね。何でも」

歩美は少しだけ照れた表情で笑った。

「さ、学校行こつか。…ちょっと早めだけど。…みんな待ってるよ？」

につこり笑って歩美が促すから、志保も表情を緩めて、ゆつくりと駅に向かって歩きだした。が、すぐに我にかえる。…浮かんできたのはさっきのあの老女の言葉。

あんたはその工藤ってやつがあたしを見つけ出し、あたしが魔法を解くまであんまりここににいるやつらと接触しないこと

「ご、ごめんなさい。私…」

あわてて踵を返すと、アパートに向かって早足に歩き出した。

「え、ちょっと。哀ちゃん!？」

「…今日は、用事がつ。…皆にごめんなさいって伝えて」

「え、何で?! せつかく哀ちゃんに会ったらいろいろ聞きたいことがあったのに…」

がっかりしたような歩美を置いて、志保は、それから一度も、後ろを振り返ることはしなかった。

すでに未練が出始めている自分がある。新一にそっくりの彼だけでなく。幼い歩美そのままに成長した彼女の姿に、癒されている自分が。

話したい。もっとずっとそこにいたい、けど。

「ごめんね」

すべては、もとの世界に戻るために。

## 第16話 友達から親友へ（後書き）

ども！こつぶです！快斗くん、青山センセ、はぴばー！

・・・じゃなくて！（笑）

歩美ちゃんと哀ちゃんの二人の話、大好きですっ。

今日はちよつと長いお話になり、恐縮です。今回、文章が下手だなあ、とちよつと思つてます。ごめんなさい＞＜！おかしいなあ・・・。  
うまくまとまらない！

・・・全ぶれ最近ようやく見ました。・・・設定、ちよつと雨と老女に似てるかも！とひいきで思つてしまいました（笑）

えへ。

そ、それではここまで読んでいただき、ありがとうございました。

## 第17話 後悔（新一サイド）（前書き）

今回は新一サイドです。

前に言ったような、順番に、新たん（現実世界）、志保さん（夢？世界）のような感じで進むことはあったり、なかったりの感じだと思っております。よろしくお願いします。

## 第17話 後悔（新一サイド）

一方、工藤新一が動きだしたのは、博士が帰った後の朝10時ごろ。

先ほど彼のもとへ寄越してきた行方知らずの宮野志保からの電話の内容は、未だ要領は掴めてないけれど、とにかく彼女の言葉によればこの日本を、いや、世界中を探しても、現時点では宮野志保は見つからないということだけは何となく理解できた。

『自分は魔法使いの気まぐれで魔法使いに魔法をかけられ、此处ではないどこかの世界へ飛ばされた。』

ファンタジー小説じゃあるまいし、そんな非科学的なことがあるわけない。けれど、自分も小さくなるはずない体が幼児化されたという

『科学の手』は借りてはいるけれども 不思議な現象を身にもって体験しているわけだし、そしてそれを作ったのは、今電話をかけてきた張本人でもあるし。また、成功失敗両極端ではあるが、タイムマシーンでも作れそうな男も身近にいるし。だから100パーセント信じないと決め込むこともなかった。

けれども。

いや、しかし。

考えれば考えるほどループに陥る。  
だから、とにかく。

「米花中央駅のロータリーにいくしかねえ、よな……」  
それが彼女を助ける鍵となるのであれば。

そこにいる60〜70前後のお婆さんを探せ。

さて、はたしてそう簡単に見つかるか。

1、2度顎を指の腹でぽんぽんと叩きながら、考える。

「ったく。俺も同じ境遇に陥ったよしみだからとはいえ、甘えよな」

そんな自分に小さく苦笑したあとで大きく伸びをすると、蘭が昨日の夜作ってくれた夜食を冷蔵庫から取り出し、レンジでチンする。なんだかんだ言って、ずっと起きて仕事をしていたというのに、本日始めての食事。不思議にもそんなに腹は空いてなかったが、さすがに一睡もしていないので、これから本腰を入れてまた新たな捜査に入るというのに何も食べていないのでは、体力が持たない。それに、蘭の食事は自分にとつての何よりのエネルギーとなるのだ。体力的にも勿論、精神的にも。

「魔法使い、か」

レンジの中でぐるぐる回る皿を見ながら、彼はポツリとつぶやいた。もう何度呟いただろう、この言葉。電話で志保が口にしてからというもの、その言葉が頭に付いて離れなかった。

「アイツが一番魔法使いなんじゃねーかって思うけどな」

こんなことを言ったのがバレたら絶対怒られるとは思っけど。新一は自分が呟いた言葉に思わず苦笑いを浮かべ、それから一緒に冷蔵庫から取り出していたオレンジジュースの紙パックからコップに注いで、それを喉の奥に流し込んだ。



ピンポンというチャイムの音に、彼はようやく温まった食事をレンジに残し、玄関の力ギを開ける。こんな時間に来る相手といえ

ば。

「帰って来てたんだ」

蘭だ。ひょいと顔を覗かせてほんの数ヶ月前まではただの幼馴染で、今はもう恋人となった女性。彼の顔を見た途端、ほっとした顔をしてみせた。新一もまた自然と顔がほころんだ。

「おう、今作ってもらった飯食って、出掛けるとこ」

「また出掛けるの？」

新一の言葉に心配そうに顔を曇らせる彼女に、心底申し訳ない気持ちになる。

「体、壊れちゃうよ？」

「平気だよ。それに今回はちょっと私情も含まれてるんだ」

「え？」

「宮野が行方不明なんだよ」

彼の発したその言葉に、蘭は案の定驚いた表情を浮かべた。

「志保さんが？大変じゃない」

「ああ。それで、米花中央駅のロータリーにいるばあさんを探してくれて連絡があつて。そいつを見つくれるべく腰をあげた、つつうわけさ」

「…ロータリーにいるおばあさん？」

その整った眉を一瞬顰め、蘭は彼に聞き返す。彼女がそんな顔をするのは無理もないことだ、そう新一は思っていたが。

「ああ、何でも魔法使いだと」

「魔法使い？」「あれ？彼女ってそういうこと信じるコだったっけ？逆にそんなこと少しも信じないっていうタイプだと思うけど」

信じられない、という様子の蘭に、新一は大きくうなずいて見せた。彼女を部屋に招きいれながら会話を続ける。

「だろ？だからちよつと気になって。探してみようと思ってよ。ま

あ毎日いるわけねーかしんねえけど。手がかりくらいは掴めるだろ。そーしなきゃあいつが帰ってこないつつうんなら、まあその根本となるその人物って言うそのばあさんを探さなきゃってな」

「それにしても結構暢気ね。…切羽詰まってるとか、危険が迫ってる、みたいな様子が見えないんだけど。ねえ、志保さん、本当に大丈夫なの？」

「…さあな」

「さあな、って」

困惑したような蘭の表情。無責任だとも思われたのかもしれない。でも、実際そう思われても仕方のないことかもしれない。だけど。

「俺もよくわかってねえんだけどさ。なんだかあつちの世界だとかこつちの世界だとか。電話を聞いてると、少なくとも自由の利く生活をしてるみたいだから。そこまで急ぐ必要はねえのかなとも思うけど」

けれど、帰りたいのに帰って来られない状況に立たされている。

一体彼女は、どこにいるのだろう。

博士から最初に『志保くんが帰ってこない』と連絡を受けたとき、最初は自分と別れたあと、フラリどこかへ出掛けて行って、夜になつたら帰ってくると思っていた。

工藤新一に戻って、しばらくは検査の関係で志保とよく会って診てもらっていたが、最近は検査もなくなり、仕事も忙しく、隣人だというのにお互いの家を行き来することもなくなつて。挨拶もあつたりなかったりで、メールのやり取りも最近はなかったように思う。そんなので潰れる女ではないと高をくくっていたのだが、博士から最近塞ぎこんでいる志保くんの話し相手になつてやってくれないか、というような電話を受けて仕事と学校の合間を縫ってやってみ

れば。

確かに半年前までのイキイキとした表情が見られず、半年間行きがかり上、放っておいてしまった自分を猛省した。『見かけより強くない』ということは一緒に付き合っていることでわかつてはいたけれど、此処まで落ち込んでいるとは思わなかった。

けれど、話をしているうちに前のような表情を、笑みを見せてくれていたというのに。まあ、その久しぶりの2人だけの時間も、また事件に呼ばれて、終了となってしまうたわけだけでも。帰ってくれば、またフラリ姿を消してしまったという連絡を受けて。そうして志保からあんな電話をもらって。

いなくなった理由として、志保がただ何かを思って一人旅をしているのかとか、博士が、恋人<sup>らん</sup>や仕事や学業などにかまけていた自分に対して、少しは宮野志保のことを考えろということとで仕組んだことなのかもと半分くらい思っていたこともあったが、志保のあの言葉には少しもウソっぽさが感じられなかったし、今日の博士のあの囁れ具合も、彼が自作自演していたとは見えなかった。

それにしても、と思った。

あの、電話から漏れてきた『自分』に似た男の声も。

声だけでなく、口調も、間の置き方もそっくりだった。

『江戸川くん』『灰原』

電話の向こうで、志保と、電話の向こうの相手はそうしゃべっていた。

何を話していたのかまではすべてはわからなかったが、最後の方の、声を張り上げている二人の声は今でも耳に付いて離れない。

だってどうしても尋常じゃねえって。

最初から尋常じゃないのよ、全てが…

何言ってるのか、わかんねーよ！

…なんだ、これ…。すげー古いケータイ。イマドキこんなのが販売してねえぞ？一体どこで見つけたんだよ、こんなもん。

あつ

懐かしいなあ。これ、こーやって耳に当てて喋るんだろう？

あの一連の会話がすべてウソだったなんて思えない。やっぱりなんだかんだで彼女は『此処<sup>このせかい</sup>』にはいないのだという気持ちが確信に変わる。そうして、博士が何も関わっていなかったということを。

そうして、志保は自分の力ではどうしようもないところにいるということを。

なのに、

彼女のいう、『魔法使い』に魔法をかけられているというのに。あの電話の向こうにいる志保の落ち着きよう。あれが虚勢を張っているようにもどうにも思えなかった。

彼女は一体どんな状況で、何をしているんだ？

あの声の主は誰なんだ？あれは若しかしたら、『江戸川コナン』という、もう一人の自分なのか？

じゃあ、もう一人の『灰原』はどこに？

考えれば考えるほどわからなくなっていく。

「……とにかく。そのロータリーに行ってくるから……蘭は先に学校に」

彼がそう言ったそのとたん、蘭は大きく首を横に振った。

「私も行くよ。一緒に探す」

「え、だっておまえ授業が」

「大丈夫。4限からだし、まだ間に合うよ。私だって志保さんのこと探したいし。」

「でも」

「だって新一」

お互い一步も自分の意見を曲げようとはしなかった。尚も心配そうに自分を見つめる新一に対して、蘭は無理やり言葉を被せた。

「……志保さんは哀ちゃん、なんでしょ？私は、『志保さん』

になってからの彼女はあまり知らないけれど、それでも『哀ちゃん』としての彼女は少しは知ってるつもりだから。これでも結構仲良く

させてもらったと自分では思っているのよ。そんな彼女が忽然と消えて、どこから助けを求めているのに、貴方だけに頼って私は知らん振りをしているわけにはいかないわ。…私も助けたいもの。そして、『志保さん』としてもずっと付き合っていきたい」

「…蘭」

確かにその通りだ。

蘭と同じく、今でも自分も、彼女を『宮野志保』ではなく、まだ『灰原哀』として見ているのだと思う。

そうして、自分が『江戸川コナン』から『工藤新一』に戻つての変化があつたように、彼女にも『灰原哀』から『宮野志保』になつて変わったことがあることも微塵も気づかずにはいた。

シエリーでもなく、宮野志保として生きるのは、彼女にとつても勇気がいったことなのかもしれない。ずっと組織に拘束されて18年生きて、2年、博士や少年探偵団、そうして自分と小学校生活や事件と一緒にともにして。恨みきつた組織を壊滅させて。姉と何度か逢瀬をしているときは素顔に戻れてはいたのかもしれないけれど、『宮野志保』として生活し続けることには不安があつたことだろう。姉も死んで、家族が誰もいなくなつた今となつたらなお更。いつでも博士は見守っていてくれただろうけれども。

自分は何も知らなかった。

また、少年探偵団と笑顔で過ごせるものだと思っていた。

だけれど、志保は不器用で怖がりだということもわかつていたはずじゃないか。

なのに、半年間も放っておいて。

半年振りに一緒に過ごした志保のことを考えながら事件に向かつていった矢先。

彼女はまた別の世界に迷い込んだ。

「俺もオマエと同じ位置に立ってるんだよな」

「え？」

「俺も、あいつのこと何も知らなかった」

「…そだよ。…だったら一人で探すより二人で協力した方が断然いいと思うでしょ？」

「…ああ」

新一が頷くのを見て、蘭は『よろしい』とにっこり微笑んだ。

「それじゃ、行きましょう」

「ああ」

玄関を出て車庫に向かい、買ったばかりの新車の助手席に彼女を座らせる。自分も運転席に乗り込み、キーをまわす。

エンジンの音を聞きながら、新一は志保が電話口で言った言葉を考えていた。

『大丈夫、悪い人ではないわ』

それは些細な言葉なはずであるけれど。

恐らく、名前も知らない、一度会っただけであろうの彼女が、その人物のせいで帰る事のできない状況に立たされているのに、それでもそんな言葉をさらりと言える状況って。

「あいつは一体誰と、・・・何をしてるんだ？」  
「え？」

蘭が振り返る。けれど、その問いに返すことも忘れ、ただ立ち止まって顎に手を当てたまま考えることしかできなかった。志保がいるところが、彼女のいう『異世界』であるということはまだ信じることはできないけれど、それを抜きにして考えても、まだまだ考えなくてはいけないことが山ほどあって。

ゲームを楽しんでいるようにも思えない。

帰りたいと願いつつ、だからといって自分を送り込んだその人物を『悪いヒトではない』と言い、名前を告げずに『魔法使い』だとだけ答え。

志保はその女をもとと知っているのか、それとも見知らぬ人であったのか。考えれば考えるほどわからなくなる。それでもなおも考える。

自分は本当にそのロータリーにいるといわれる人物に会えるのか。そもそも彼女は本当にここに、今自分たちがいるこの場所に居るのか。

始まる前からそんな一抹の不安が自身の胸中を渦巻いて、それを少しも拭うことはできなかった。



## 第17話 後悔（新一サイド）（後書き）

前削除した新一サイドをちょこちょこ残し、採用されたり追加したり、消したりしてます。

でも、この後の魔法使いとの話は多分変わります。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。  
今から遅番行ってきます！行きたくない。

## 第18話 接触（新一サイド）

駅に着くと蘭を先に下ろして、自分も適当に路上駐車をして彼女の後を追いかける。車を離れるのはせいぜい10分、15分。置く場所を探してうろろしている時間を考えるよりはまだマシである。そう彼は考えていた。

実際大学に行くのは車より電車の方が多かったし、事件があつて顔を出すのも、いつも警察が出す車の助手席バトカーにいるから。（勿論別に彼が頼んだわけではなかったけれども、実際それが楽だと感じてしまったのだから拒否する必要もなく、その厚意に甘えている。）だから2ヶ月ほど前に買ったこの車も、仕事用というより蘭とのデートに時々使われる程度に収まっていた。

そんな車を路上に置いて、彼らはそのロータリーへと繋がる階段へと足を踏み入れる。

目の前にある地下歩行者用通路。そこを潜くれば志保に頼まれたその人物に会えるという。

一度で会えることを想定してなかった。けれど、万が一の確率でいるのかもしれない。

そう思っているから、新一も逸る気持ちも抑えられずに、早足で階段を下った。いや、下ろうとした。けど、1歩2歩下りたところで思わず立ち止まる。

一種異様な空気、というか。トンネルだから酸素が薄いのだろうか。いや、それもまた違うと思った。そこまで深い場所じゃない。換気が悪いわけでもない。

でも、何か違和感を感じる。何だ？

――何だ？

ぎゅ、と袖を捕まれ、その抵抗感に思わず振り返ると、少し躊躇ったような顔をして蘭がこちらを見ていた。

「どうした？」

「何か…ここ空気悪いのかな？変な感じ。…空気が重いつていうか」  
不安げな様子。やはり何か彼女も感じていた。

「…帰るか？今なら授業余裕で間に合うぜ？」

「全然、大丈夫だよ」

気丈にもそう笑ってくれる蘭。

お化けとか魔女とかそういうモンスターの類が嫌いなくせに。誰かを守りたいと思うと、自分の恐怖を無理やりにも押し込んで前へ進もうとするのが昔からの性格。それが彼女のいいところなのだけど、悪い癖でもある。強くもないのに、強くなるうとする。そういうところは子どもたちのために平気で自己犠牲を図る、居場所のあやふやな彼女もまた一緒なのかもしれない。どうして自分の周りはそのような精神を持つものが多いのだろう。

だからこそ、大切なのだ。けれども。

手を伸ばし、蘭の白く小さく、柔らかいその手をぎゅっと包み込む。こわばった表情が、少し和らいだ。そうして、二人でゆっくり前へ進む。十数メートル歩いたところだったろうか。

「新一、もしかして」

蘭の声に、俯きかけていた視線をスッと上げる。先の方に、人影が見えた。というより、丸い塊が見え、それが老婆だとわかるのに数秒かかった。逆光だったからだろうか、なんて今にして考えられ

るが、足を進めれば進めるほど、見えてくる。やつぱりそこにいたのは人間だった。しかも志保のいう同年代の老婆。

そこには志保の話どおり腰の曲がった顔中皺だらけの白髪のお婆がいた。

痩せてギスギスしたその老女は頬もこけ、顔色も悪く、見た目は明らかに不健康そう。これが志保のいう『おばあさん』なのか、と一瞬目を疑って見てしまった。なんとなく志保が話す相手は、偏見だけれども上品そうな印象を持っていたから。…どうしても目の前の女性は、ホームレスと見紛うようないでたちをしていたから。その女性が志保を匿っているなんて、そして志保もそれに従っているなんて、と。

けれど、墓<sup>ひら</sup>の上<sup>み</sup>に座布団を敷き、バケツにはたつぷりの水と、数種類の水。それから、何鉢かの植木鉢を並べ、ただ座って行き交う人を眺めている。その様子はやはり彼女の言っている女性だとうしても一致するから、新一はいつのまにか止まっていた足をまた少し前に進めた。

しかし、相手はこちらに気づくこともなく、ただ朦朧<sup>ぼんやり</sup>とそこで座っていた。呼び込みをするわけではなく、花を生ける作業をしているわけでもなく。ただぼんやりと宙を見ていた。寝ているのだろうか、それとも認知症でも発症したのかなんて余計な心配をかけてしまう。ここを通る人も、不審に思わないのだろうか、だなんて。

「あの」

新一のその声に、ようやく自分を見つめていた二人の若者の姿の存在に気づき一瞬驚いた顔をした。そうして、にやりと彼女は笑った。

「おや、珍しいこともあるもんだ。そろそろあんたに会いたいと思っていた。…細工をしたわけでもないのに来るなんて。おかしいことだね」

「…細工」

志保がいう『魔法』のことだろうか。

「細工といえば、あんたも細工が使える子なのかい？1年も前は、あんた確かちつさい坊やだった気がするが。…うちの小槌でも持つてるのかね？」

くつくと卑しい笑いを見せて、老女は莫座に座った姿勢のまま、新一を見上げた。

「え」

ぎよつとして、耳を疑った。

やはりその老女は明らかに自分を見ていた。蘭も、工藤新一「江戸川コナンだということが、今ではわかっていいるから、その分隠す必要はないのかもしれないけれど、志保が安全だとういうその老女が彼女だという保障も、ましてやその老女の本心も全然わからないから。

「…きつと人違いですよ」

彼が発した言葉に、老女は無言でニヤニヤと笑う。それから、

「…そうそう。そついや思ひ出したがこの前来た女の子」

と話題を変えた。

「その子も、確かに見たことがあるね。あんたと一緒に…。物忘れが酷くつてね。直接聞けたわけでもないが。今でも連絡、取ってるのかい？」

思わず新一は隣にいる蘭の顔を見た。蘭も自分を見ていた。

目が合い、確信する。

「肩まで伸ばした、茶髪の髪の子だよ。赤いカンナの花を買っ

てくれた別嬪さ」

「……なあ」

最後まで老女に言わせることをせず、新一は言葉を被せた。

「あんた、・・・宮野を何処に隠した？」

その質問に、老女は一瞬驚いた顔をして、彼を見つめた。新一、と蘭が慌てて声を上げた。

わかってる。

それが唐突過ぎることは。

けれど、ここにくるときから感じていた、何か奇妙な感覚。それ  
がなかなか抜けなくて。

目の前の老婆が元凶なんじゃないか、そう思えてきて。

焦りから言葉が先に出てしまっていた。論理的に言葉を組み立て  
ることができなくなっていた。

「それがあの娘の名前かね？」

「・・・」

「そうです」

新一の代わりに、蘭が言葉を発した。

「蘭」

これ以上彼女に何も話すな、そう言おうと彼が口を窄めたがもう  
遅かった。

「名前は宮野志保。年齢は21歳で、一昨日の朝早く私たちの前から  
消えたんです。…新一には、…彼には連絡が時々入るみたいです  
けど」

「へえ」

興味津々と言う顔で、老女は目を丸くしたまま新一に視線を移行  
させた。

「へえ。意外だね。まだこっちと通じてるんだ…。ムリしないで欲

望のまま暮らせばいいのに、何を躊躇ってんのか、あの娘は。…ま、理由は大体わかるけど。あの子の気持ちがあのとき、視<sup>み</sup>えたしね」  
ヒツヒと笑いながら、老女は新一と蘭を交互に見比べた。黄色の目はぎらぎらと光っていて、本当に汚らしく。けれど、その眼光に特別な意味がある気がして。その言葉は何か大切なことを含んでいるような気がして。

「どういう意味だ!?…あの時って、どの時だよ…!」  
思わず尋ねていた。声をあげる新一に対して、老女はニヤリと笑って、しつと口に人差し指をあて、こう言った。

「ないしょ」

ニヤニヤと笑うその老女はとても意地悪く。

本当のことを聞き出すまで、一筋縄はいかないと彼は思っていた。いらいらとした気持ちが少しずつ彼の中で沸いていた。

本当に志保が会った老女と同一人物なのかと、疑ってしまうほどに。

## 第18話 接触（新サイド）（後書き）

ちょちょこ更新（笑）。

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

・・・七夕小説書きたいなー。。。書けないなあ。



第19話 困った人？（新一サイド）（前書き）

サブタイトル、（新一サイド）とつけるのを忘れてしまいました。  
すみませんでした。

## 第19話 困った人？（新一サイド）

その歩行者用地下通路の中で、新一は底知れぬ苛立ちをその老女にぶつけていた。

その女は確かに宮野志保がどこにいるか、知っていた。そして、志保本人が言ったとおり、彼女をどこかへ幽閉した。というの  
も少し御幣があるかもしれないが 張本人でもあると、確信で  
きたから。なのに。

大丈夫。悪い人じゃないわ

その言葉を言っている彼女の様子は少し、笑いが混じったものだった。救いが見えた、という安堵からきていたものと思った。自分を、そして彼女を信じているものだと思った。

だからその言葉を信じてここまできたのだ。  
なのに、志保の言っている彼女と目の前の老女とは、どうしても簡単に一致することができなくて。

「…何をそう怖い顔してるんだい。少し落ち着きなよ。…大丈夫だ、そう焦らなくても死ぬわけじゃない。…天国みたいなところだと、私は思っけどね。」

「てん…ごく?」

「ちよっ、まさかあんた!」

嫌な予感が頭に浮かんた。

まさか、彼女が今いるところは――

言葉に出したくなかった。

目の前の老女を睨むと、彼女は脂のついた黄色い歯でカッカツと低く笑い声をあげた。

「志保さん、まさか…死…」

蘭もその考えが浮かんだったのか、サツと顔が青ざめた。

今志保が体験しているのは、『臨死体験』をしているのではないかと。

そうして目の前の老女が何かの機械が術を使ってそれを体験させたいかけを与えているのだと。…そうして彼女の体は、どこかの場所へ幽閉され、危険な状態にいるのではないのかと。そして、もし彼女がそこから戻らなければ…

「なあ！宮野は今どこへいるんだよっ」

今彼女がどんな状態か知らないが、志保は不自由のない生活をしている。けれど、現実とはありえない世界にいる。それがもう答えが出ていたような気がした。

信じられないが。

信じたくないが。

彼女は、

宮野は…

「おいおい。何か変な妄想しているみたいだけど、そんな突っ走らないでくれないかね。コレだから困るんだ」

老女は大袈裟に両手をすくめてみせると、小馬鹿にしたような表情をみせた。

「確かにあの子は今『天国のような場所にいる』とは言ったけど、天国じゃないよ。あの世の世界でもないし、幻覚を見ているんじゃない。あの子自身、ここにはもういないんだ」

「ここにはもういないって、だから今どこに」

なおも言葉を荒げる新一に対して、老女は殊更面倒臭そうな顔をした。

「だからここではないとこ。けどあの子は生きてるし、これから何か事故や事件に巻き込まれない限り、病気や自殺などしない限りあの子はここにいるのと同じ条件で過ごすことができる。…だから何も急ぐことはないと言ってるじゃないか」

「そ」

「…よかつ…た。…ホントに、ホントに大丈夫なんですネ!？」

自分とほぼ同時に、蘭が表情を明るくさせて、それから老女の皺だらけの灰色く薄汚れた手を握った。

「…あ、ああ。大丈夫だ」

一瞬驚いたように目を大きくさせて、それから老女は言った。よかった、と蘭は安堵の息と共にその言葉を吐き出す。

「ちよつとこの手を離してくれよ」

「え、ああ、ごめんなさい」

蘭がぱつと手を離すと、老女は困惑したような表情をみせて、ぱ

つと目を逸らす。

「…んで？…じゃあ宮野が生きてて、身体に支障が何もないんだよな。…だったら、早くあいつを助けてやってほしいんだ」

「やだよ」

間髪いれずに答える老女に、新一は思わず困惑した。

「…え、ちよっ…」

「そう簡単には教えてやらないよ。少なくともあの子が楽しかったと思ってくれるまではあたしはあの子をここに戻すつもりはないね。悪いけど」

ふん、と鼻を鳴らして、老女はさらに背を向けた。まるで子どものような言い方だと少々あきれてしまう。

「ちよっ、何で」

「…言っておくが、あたしはあの子に『礼』をしたんだ。そして、それはあの子が喜ぶようなことをしたと思ってる。あたしはあの子があそこにい続けてもいいと思ってる」

「ちよっ」

「けど、あの子はそれを拒絶してる。あたしはそれが許せないんだ。せつかくいい子を捕まえたんだ。戻ってきて『どうしてこんな場所に連れてこられたの！』なんて言われたくないんだよ、だから」

ああ、と新一は思った。

その言葉に嘘は感じられなかった。

この老女は多分寂しがりやなのだろう。そして孤独を感じていたのだろう。愛情というものを感じていなかったのだろう。そこで、多分宮野に何かしてもらったのだろう。そして、それがうれしかっ

たのдарう。だから、宮野が喜ぶことを思いついた。それが、宮野が考えていた理想の世界へ連れて行くことだったのではないだろうか。

けれど、実際宮野は戸惑い、自分に対して助けを求めている。それが、この老女ひとの心を傷つけた。プライドよりも、何よりも。

「…あんたは、魔法使いなのか？…宮野を、本当にこことは違う世界に飛ばしたとか言うのか」

「…人なのか、魔法使いなのか宇宙人なのか。…あたしにさえよくわからないけど。…まあさっきの臨死なんちゃらってところよりは近いかもね」

老女は背を向けたまま吐きすてるように呟いた。確実に、機嫌を損ねている。けれど、底抜けの意地の悪さからきているものではないと見受けられた。

「確かに、悪い人じゃあねーけど、困った人には変わりないな」

思わず苦笑いを浮かべた。

「悪かったね」と憎まれ口を老女が叩き、横で蘭は笑った。

「それでも、あんたの独りよがりで、宮野が帰れないってことだろ、結局は。あんたがよかれと思ってしたことは、実際あいつの理想郷でも何でもなかった。それであいつは巻き込まれてるんだ。…俺があいつとつないで、わけを説明してやつから。早くあいつを返してやれよ」

「…やだね」

「おい！」

振り返った老女はにやりと笑った。

「言っただろ、あの子をあそこに送ったのは、あたしの最上級の御持て成しなんだ。あの子を苦しめるために送ったんじゃない」

「だから」

「だから、今はあの子は向こうに慣れていないだけだ。絶対居心地がよくなるんだよ。その楽しみをあの子から奪いたくないだろう？」

「でも一生帰ってこなくなるかも」

「それはそれでいいじゃないか。…だってあいつはそこで住む選択をしたってことなんだから。…あたしが返してもいいって思えばいつでも簡単に帰ってくることでだってできるわけだし」

「けどあんたが返してもいいって思わなかったら」

「そしてあたしが、あの子をここに連れ戻す前におっ死<sup>ち</sup>んじまったら、あの子は一生あそこのままだろうね。…いくら戻りたいと思っても」

ニヤニヤといやらしい笑いを浮かべたまま、新一の焦った表情をまっすぐ捕らえた。そして、それからその表情を急に冷たく変化させる。

「…だけど、あたしは死なないし、あの子が戻りたいって言うのに一生あそこに閉じ込めるつもりはない。あの子が今感じてないことを近々感じるその瞬間を味わって欲しいんだ。そしてそれを体験して、帰りたいと思って、帰りたいくないと思って、それはあの子自身の問題だ。…こっちが口出す権利はないだろ」

「でも」

「なんだね、まだ言うかね。面倒くさいね。だったらあんたがもう少し…」

鬱陶しそうにそこまで言って、ちらりと蘭の方を見た。それから、

言葉を止める。

「…やめとくよ。今はそれを言うつもりはない。…だけど、今日  
はもうあんたたちとしゃべりたくないんだ。…あんたは、あの子が  
何処に行ったか、少し考えてみるといい。あんたにだけ繋がるケー  
タイ電話の意味を。そうしたらそんな少しはそういうへんちくりん  
な考えがなくなるだろ」

吐き捨てるようにそういうと、老女は花や看板を片付け始めた。

「え、もう片付けるんですか？」

「ああ。あんたたちと話して気分が悪くなった。悪いが店じまい  
だ。…また気分がよくなったら、別の場所でやるつもりでいるけど。  
…お願いだからついてくるんじゃないよ。ついてきたらくさやの干  
物を漬けた汁でもぶっかけてやるからね」

本気とも冗談ともつかない無表情な表情でそういうと、老女はさ  
らに片付ける手を早めた。さきほどまでのにやにやとした底意地の  
悪そうな表情はどこかへ行ってしまったような表情で。そんな老女  
に対して、新一は溜息をついて、隣にいる蘭の洋服の裾をくいくい  
と引っ張った。

「蘭、行こう。…今日は、帰ろう」

「えっ」

「…俺も、考える時間が欲しい。…宮野も、一刻一秒時間を争う  
ようなもんじゃないらしいし。出直してもだいじょぶだろ」

「……わかった」

戸惑いつつも、蘭も志保の老女の言葉が口からでまかせのもので  
はないとわかったのだらう。何よりも、自分の大好きで、小さいこ



るから科学しか信じていないという性格の彼が、その老女の話信じているのだから。

蘭は老女に会釈して、そして新一は会釈も何もせず、二人は来た道を引き返していた。

「…学校行かなきゃね」

「ああ、…送ってくよ」

「新一は？」

「今日は…家帰って寝る。昨日から全然寝てないんだ」

「…じゃあ電車で行く。駅まで近いし、新一も車置いて帰りなよ。事故ったら大変だよ。居眠り運転で、探偵が人殺しなんてしてどうするの！」

「へいへい」

肩を並べてそんな話をしながら歩いていく。カツカツと靴音がトンネルを響かせる。

そうした中で、「待ってくれ」という言葉に、足跡を止めた。

「花言葉ってあんたは知ってるかね？」

「え？」

振り返ると、花をまとめたままこちらを見ようとししないで老女が言った。

「…あたしがあの子にあげたプレゼントの内容さ。あたしがあげた花は赤くて大きなカンナだった。それは何を意味しているか、わかるかね」

「…いや」

「…そうかい。ならいいよ。さっさと行きな。目障りだ」

「え」

「…呼び止めておきながらこんなことを言うのはおかしいがね」  
「…」

重い荷物をすべて抱えると、よたよたとした足取りで、二人とは反対の方へと歩き出す。

それを、新一と蘭はただ、呆然とした表情で見つめるしかなかった。

老女が階段を上り、二人の前から完全にいなくなった後も。

なおも。

## 第19話 困った人? (新一サイド) (後書き)

### 臨死体験

人間が事故や病気などが原因で死に直面した際に起こるとされる現象。

脳に電磁波など軽く刺激を与えてストレスを発生させたりすれば起こりうる現象。

ちなみにHANABIでは、哀ちゃん&某さんが臨死体験経験されてます(笑) 第20話から24話あたりまで(笑)

## 第20話 花言葉（新一サイド）

蘭と駅で別れ、新一は家に向かって車を走らせる。

もともと2人の通う大学は別の大学。

蘭は、小中学校の家庭科の教師を目指している。母の後を継ぐつもりだったが、教師の道を諦めきれず、それを察した母が英理が背中を押してくれたように。新一も、いつかは結婚を考えていて、探偵事務所を設立するつもりでいたが、同じ事務所で働きながら手助けしてもらうのも別の職場で働くのも自由だと考えていたから、蘭の進路の相談に否定も何もすることはなかった。泊まりがけの<sup>ボランテニア</sup>仕事で、家を数日間空けていたり、仕事がない日でも、大学に通っている場所はお互い距離があつて、休講の時間に会いに行くとかなかなかできないけれども。それでも、一度は1年半ほど会えないときが続いたから、少しは強くなれるのかもしれない。さっきみたいに、朝食や夕食を用意して、少ない時間でも顔をあわせることで、蘭にとってそれで満足してしまう部分もあるのかもしれない。それが何だか切なくて、そうして少し物足りなくて。何とか授業や仕事の合間に蘭とデートする時間をたくさん作っていたというのに。

だつたらあんながもう少し…

老女の言葉が頭に過ぎる。はつとして言葉を止めていたが、新一には彼女の言いたいことがわかっていた。

”だつたらあんながもう少し、『宮野志保という時間を作ってやっていたらよかったのに』。”

そう、あの老女は言いたかったのではないだろうか。だけど、蘭がいるから言うのを止めた。

「くそつ。…他人様ひとに言われなくなつて、わあつてるつっの」  
信号待ちの中、ハンドルの表面を指の腹でトントンと叩きながら、舌打ちをして呟いた。

最後に別れたあの寂しそうな表情が胸を突く。家に帰っても、博士以外味方がいないとか考えてたんじゃないだろうか。そんなわけがないのに。けれど、そうさせたのは、自分だ。

あの子が今感じてないことを近々感じるその瞬間を味わって欲しいんだ。

老女の言葉。

「『感じてないこと』って何だよ」

幸せ、だろうか。

だったら、自分だってそうだ。彼女の幸せであることを願っている。なのに、その気持ちは伝わることはなかったのだろうか。とはいえ自分は彼女の幸せが何なのか、その根本がいまいちわからなかったのかもしれない。そうだと思っていたものが、実はおぼろげでもっと深いところに位置していたのかもしれない。

（宮野に聞けばよかった。あいつのために久しぶりに時間作つたつづのに。一番大切なことが聞けなかった）

”今、何したい？”

って。ただ、それだけのことなのに。コナンの時ならすんなり聞けたはずなのに。自分のことばかり話していた気がする。たわいのないことばかり話していた気がする。久しぶりに宮野に会ったことが、自分にとってもうれしかったから。

「ったく。…何やってんだよ、俺」

思わず天井を仰ぎ、顔を覆った。

そのとき、プ、というクラクションにはっとする。  
信号は青に変わっていた。

自宅に着き、仮眠をようやく取れたのがそれからすぐのことで、倒れるようにベッドの中へ入り込んだ。

そうして次に目を覚ましたら、夜の10時を回っていた。昏々と眠り続けていたらしい。新一が体を起こし、水を飲もうとキッチンに行くと、蘭が作ってくれていたのであろう、おいしそうな匂いを放った鍋がコンロの上に置かれていた。案の定、覗くとおいしく炊かれた肉じゃがや味噌汁があつて。冷蔵庫には、焼き鮭と、冷奴とサラダ。寝起きだからと今日は体に優しいものを考えてくれていたのだろう。新一は思わず口をほころばせた。

リビングに向かうと、見慣れない大きな花がガラスの花瓶に活いけ

である。赤、黄、白、桃などの、花びらが大きな花。そして達筆な字。この字は、一目でわかる。蘭だ。

『カンナ、買ってきてみたよ。お店に聞いたり、ネットで調べたら、花言葉は妄想、堅実な未来、尊敬、誘惑：いろいろあったよ。他にももしかしたらいろいろあるかも。熟睡してたから、起こすのも悪いと思って。久しぶりに手紙にしちゃいました。冷蔵庫に鮭とサラダ、ガスコンロには肉じゃががあるから、温めて食べてね』

蘭も気になっていたのだろう。自分が寝ている間に調べてくれたよう。自分よりも先に調べてしまった蘭にちよっぴり悔しく感じつつも、まあそれも自分が寝てしまったのだから仕方ないとすぐに思い直す。そうして、蘭の調べてくれた文字を何度も見ながら、自分もインターネットでいくつか探してみた。確かに『堅実な未来、妄想』などが多かったけれど、他にも何個か書かれていたもの。

永続、情熱、疑惑、快活、悲劇的末路、幻想…。

誕生日である人に向かったのアドバイスは、

『プライドが高く負けず嫌い。自分の意思を曲げません。人には「可愛げがない」と言われるかもしれないけれど、その毅然とした行動があなたの魅力です。』

宮野に似ている、と思った。そうして、カンナの花言葉も気になった。あの老女がそういう風に仕向けたからだと思ったが。調べてみたら、不思議な意味の言葉が多くて。

『幻想』 『妄想』 『堅実な未来』 『悲劇的末路』

「まさか、宮野がいる場所って…」

未来、だろうか。それとも、もっと違うところ。彼女の思う、妄想の世界。だったらいわば理想郷じゃないか。なのに、帰りたいだなんて。そんなことがあるのだろうか。

「…くそつ、こればかりは考えても埒があかねーか」

いくら人の気持ちを考えるのには慣れているとはいえ、今回のような事例は今までなかったし、きっとこれから死ぬまでないと思う。だから貴重な体験とはいえるけれども。それでも、こればかりは本人に聞いて確かめるしかないと思った。

夜の10時半。まだ、起きているだろうか。

携帯電話を取り出すと、リダイヤルボタンを押した。志保への電話番号が発信された。

今はただ、志保の声を待っていた。声が聞きたい、と思った。勿論それは恋愛云々じゃないけれど、それでも彼女の心をこの世界に繋ぎとめておきたいと思った。

そうして、今彼女と繋がれるのは、自分しかいなかった。ほとんど誰にも知らないところで、自分は彼女を繋ぎとめる責任を担っていた。そうして、周りとも関係なしに、自分も彼女がこの世界からいなくなることは嫌だった。

たとえ、志保がそれを求めていたとしても。



p  
r  
r  
r  
r

p  
r  
r  
r  
r  
r

p  
r  
r  
r  
r  
r

『どうしたの？こんな時間に』

受話器からのその相変わらずのクールな、めんどくさそうにも聴こえるその声に、思わずほっとして口元を綻ばせた。

## 第20話 花言葉（新サイド）（後書き）

花言葉、すべて本当です。・・・しかも、カナナというのは、かなり適当だったのですが、後で花言葉見てびっくりでした！（笑）。

ナイス私！（笑）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます！  
次回からまた哀ちゃんサイドに戻るはずです（笑）。

## 第21話 釘さし？

歩美と別れてから、志保はずっと家に籠っていた。誰とも会わず、それはそれは退屈な半日だった。テレビでは、知らない芸能人ばかりで、その中に10年前アイドルとして活躍していた芸能人が演歌に転身していたり、サッカー選手で活躍していた人が、スポーツキャスターに転身していたり。

しかしそればかりを見ていても、1時間もすれば飽きてしまうは、研究室でパソコンをチェックし、自分がこの時期何をやっていたかを見てみても、新薬を作っているのは見てとれたが、何を作っていたかよくわからなかったため、気分は乗らなかったは、自分がこの世界で集めていたという雑誌や本を見て何時間も過ごしてはいたが、それも限界があつて、30分前には何もする気が失せて、ベッドの上でただ寝転がっていた。

「ほんと、：1日中こうしていたら、腐ってしまうわ。」

家にずっと籠りっぱなしだと、いろんなことを考える。

なぜ、あの瞬間<sup>ひと</sup>自分は彼との未来を願ってしまったのだろう。彼<sup>あの</sup>女のいない世界を。もっと、願わなくちゃいけないことがあったのではないだろうか。

たとえば。

頭の中で過ぎる影。

それは、大好きな姉の姿。

「お姉ちゃん…」

あんなに、好きだった姉。生きていて欲しかった。繋がって  
いたかった。なのに、あの瞬間、カケラだけでも思わなかったのだろ  
うか。

「最低だ、私」

そんな折、かかってきたのが、新一からの電話だった。  
時刻は夜の10時半を過ぎていた。

「どうしたの？こんな時間に」

もともと孤独が好きだったはずなのに。半日人と接していなくて  
も寂しいと思ったことはないのに。長いときは1ヶ月研究室に籠っ  
ていたときだってあった。なのに、どうして彼の言葉を聞いてうれ  
しいと思ってしまったのだろう。勿論、言葉に出すことはしなかつ  
たけれど。

『わりい。…起きてた？』

「ええ」

『…元気か？』

相変わらず心配そうな彼の様子を、雰囲気を感じ、思わず苦笑した。

「ええ、おかげさまで。ただ、半日家に籠りっぱなしで、気分は滅入っていたけどね」

『え、ちよっ…おめー、まさかつ』

「大丈夫よ。自分で家にいるだけだから。おばあさんに言われたの。こっちではあまり人と関わるな、って」

こんなことを言われても、きっと彼はまだわからないで、頭に？マークを浮かべているんだろうけど。

まだきつとあのおばあさんと接することはできていないはずだ。そう志保は思っていた。

『ばあさん、か…。信じられねーけど、オメーの言ってるばあさんと同じ人物なんだろうな』

「えっ？」

『会ったんだよ、ばあさんに。…ロータリーで花を売ってる汚らしいばあさん』

「嘘…」

言葉を失う志保に対して、受話器の向こうで彼が笑った。

『バー口、嘘言ったってしゃーねーだろ？…オメーが今いるところはどんな場所か大体わかったんだ。…ペテン師みたいだけど、…オメーとそいつが口裏合わせているかもしれないーとは考えてもみたけど、…オメーがこんなくだらねえ嘘なんてつくとは思えねえし』

信じられなかった。朝、おばあさんに言われたときよりずいぶん早く見つけてくれた。すぐにヒカリが目の前を差し込む。

もしかしたら、明日には帰れるのかもしれない。この異様な世界から抜け出せるのかもしれない。口端が少し、震えた。

「それで？おばあさんは、何て」

『ん、自分はオメーに対して感謝されるようなことをやった。だから後悔してねえみたいなのを言ってたかな。オメーは絶対喜んでくれるはずだ。じゃなきゃおかしい、的なこと。何か信じ込んでるみたいだな』

そう、と志保は言った。

確かに自分が一瞬間ってしまったものが現実となつて。けれど感じるものは、背徳感の方がずっとずっと大きくて。

『そつちのばあさんは、オメーを向こうに帰したがってるわけだ』  
「…というより、私に協力してくれてるのかしらね。自分が10年前した過ちを悔いているのかしら。わからないわね」

『10年前？オメー、やつぱり』

自然と口にした”10年前”という言葉に、一瞬彼の言葉が上ずった。そして、志保も、彼の”やつぱり”という言葉に反応する。

「”やつぱり”？何？何か聞いたの？」

『いや、何も…ただ、こつちであつたばあさんに、オメーにやつた花の言葉がどうだとか言ってたから調べてみただけだよ。…カンナつつう花だってよ、ばあさんが自分で言ってた』

「カンナ…」

カンナというと、大工が使う工具の方が思い浮かぶ。  
昨日もらったあの花びらの大きいのが印象的な花が、まさかそんな名前だったとは。

『カンナ科の多年草。原産地は南アメリカ。季節は、6～11月。花の色は、赤、ピンク、白、桃、黄。花言葉は、堅実な未来、永続情熱、熱い思い、若い恋人同士のように、そして妄想、幻想』  
「え？」

『おまえがそのばあさんにかけられた魔法つて、もしかしたらオメーがその瞬間とき願っていたことが現実になっていたものなのかもしれないよな。オメーの『妄想』がそのまま『現実』となる魔法。たとえば、オメーが願っていた『未来』がそのまま現実として映し出されて…だから、電話の向こうで、“俺”がいた。”江戸川コナン”の俺や少年探偵団と、オメーは』  
「そうね、願ったわ。ご名答」

しかし、まさか蘭のいない世界で、自分と『10年後の江戸川コナン』が公認の仲になってるだなんて口を裂けてもいえるわけもなく。半ば気持ちの籠かごっていない言葉で、サラリとその言葉を言った。

『…その言い方。…間違ってるのか？』  
「間違ってるわいよ、別に」

正直、カンナという花がそういう意味を示していたなんて思っていなかったから。花言葉の中に、「若い恋人のように」や、「情熱チカラ」というものが入っているのにも気になって。あのおばあさんの能力で、自分の恋愛に対する思いを、瞬時にカンナは読み取ったのだろうか。そして、すべてを終えて、消えたのだろうか。…そんな、フアンタジックなこと、あまり信じられないけれど、それでもそう考えればこの変な状況にも合点がいく。それでも、完全には答えはないから、そして絶対悟られてはいけなくと考えるしまうから、聊いささかきこちない返事をしていたのかもしれない。



だから何か聞かれないようにと志保は自分から彼に質問した。

「博士は？元氣？」

今一番聞きたかった相手だ。大切なのに、どういうわけか、連絡が取れなくて。

多分自分を想って体調を崩しているに違いなかった。

そして、答えは思ったとおりだった。

『んー正直、弱ってる。オメーから連絡、何とかなんないのかよ』

「ないわよ、多分」

博士とは丸1日以上、連絡を一切取っていなかった。何度か気分を落ち着いたとき、昨日今日と、連絡をしようと試みたけれど、通じることは一切なかったのだ。

もしかしたら、新かれ一しか連絡が取れないのかもしれない。

それは、彼を想っているから？

一番自分が繋がっていたと思った相手だったから？博士よりも？さつきも何度も考えた。考えても、答えが出なかった。

ただ、とりあえず今連絡できる相手は彼しかないということだけ。

『どうして？』

「わからないわ。…ただ、繋がるのが、あなたのケータイだけみたいなの。あなたはおばあさんの”気まぐれ”にひっかかったのかしらね」

『ふうん、そっか。それじゃ、責任重大だな』

そういつつも、少しうれしそうな様子が伝わってきたから、志保は思わずその言葉を口にした。

「そうね。…でも、そういうの、大好物って感じね。ゲームとして楽しみそう。私の危険どころじゃなくて」

『あのなあ。俺がそういう男に見えるか?』

「でも、実際そうでしょう?」

『~~~~っ!!』

クスクス、思わず笑った。彼の反応が受話器の向こうから目に見えるようだ。渋い顔で唇を噛んでいる様子で、きつと心の中で地団太踏んでいるのだ。こういうやり取りが懐かしかった。

実際、こういうやりとりをしたのはいつぶりだろう。

昨日の買い物だって、夜中の電話だって、今朝の電話だって。心から笑ったことはなかった。楽しいと思えたことはなかった。いや、もしかしたら彼が工藤新一に戻ってからただの1度もこういう風に軽口を叩くことはなかったと思う。

それは、自分に余裕ができたから? 埋まっていくなかに、戻れる核心が見えたから?

そうして、その気持ちを彼も感じていたような気がした。電話の向こうで、フツと笑う彼の息が聞こえた。

『なんか久しぶりだな。…』 “コナン” が “灰原” と話している気分になっちゃった』

「そうね」

『それは、そっちの世界の”やつら”の影響か?』

「さあ。わからないわ。…そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

こうして必然的に、何ヶ月も連絡を取ってなかった彼と連絡が取れるようになって、意固地だった気持ちがだんだんほぐれていった、ただそれだけだったのかもしれない。

『忘れてたわけじゃねえんだぞ』

「…え？」

『オメーのこと、少年探偵団やっしんのこと、一度たりとも』

「知ってるわよ、何気にしているのかわからないけど、しんみりした話は止めてね」

『ああ…でも…買い物も久しぶりにして楽しかったし、こうして久しぶりに話すことができてうれしかったし』

「…工藤くん？どうしたの？」

彼らしくない、と思った。

言い訳めいた言葉。弁解？後悔？

突然どうしたのだろう、と。

『蘭がさ、言ったんだよ。灰原哀としてのオメーを知ってるけど、宮野志保であるオメーを知らないって。仲良くなりたいうって』

「…そう」

『だから…』

何を危惧しているのだろう。自分が戻らないと思っているのだろうか。

そんなことは一度もないのに。

『ああ、あの。今は、その…、ばあさんが言ったんだよ。オメーが絶対喜ぶ世界だからって。…だから、…釘刺してやった。だから…』

電話の向こうでの、ちょっと変わった空気を感じたのか。自分の言葉にあわててフォローを入れている、そう感じた。彼のフォローの仕方は、少し無理やりだった。彼らしくない。

「バカね。だからって帰りたくないって駄々をこねるようなキャラじゃないわ。私のことぐらい、貴方はわかっていているのかと思っていたわ。それとも、変わってしまったと思ったの？」

『そんなことは、ねーけどさ。…けど、そういう場合も、あるだろう？ 念のためだよ』

彼が何を危惧しているのかが大体わかっていた。

自分が喜ぶ世界に姉がいる世界。きつとそういう選択肢が入っているはず。しかし、多分ここにはどこにも姉の姿はないのだと、実は気づいていた。花言葉を聞いたときに、何となく。そうして、彼もわかっていた。わかっていたけれど、100万分の1をかけて、彼は聞いているのかもしれない。

「大丈夫よ、私は。…あなたは、早くおばあさんと話を進めて。あのヒトは一人でいろんな場所を転々と移動して営業してるの。今日ここに来たからって、明日も同じ場所に来るとは限らないから」

『ああ、そうする。…じゃあ、またな』

「ええ、またね。情報、ありがと」

『ああ。それじゃ』

ガチャリと切断音の後、ツーツーという発信音が鳴っていた。その音を耳に押し付け、聞いていたケータイを少しずつ耳から話す。

大丈夫。この世界から帰らないだなんて、そんな気持ちが少しでも起こるはずがない。

その確信は決して揺るがぬものだと思っていた。

## 第21話 釘さし？（後書き）

コナンそろそろ登場させたいっ！ちょっとラブラブが書きたいぞ！  
な状況になってきたこつぶさん。次回の更新はいつになるのだろうか。

そろそろ、他の小説もがんばらないーと思いつつ、またこつぶが  
楽しくなってしまったこつぶさんなのでした。（笑）

ホント、極端なんだよな、私。

## 第22話 残るフリーズ（前書き）

「守ってやつからよ」の部分の心情、ちょっと変えましたー。すみません。

## 第22話 残るフレーズ

朝が来た。

3日目の朝。…まだ3日だ。

もっと長く滞在していたと思うくらいの密度の濃さ。時間はこんなにゆっくり回るのか。流れる時間が、この世界では遅いのだろうか。

いや、そんな理由ではないだろう。昨日、ほんの10分話した電話の向こうの『彼』も同じ時間を歩んでいたようだ。

戻ってきたとき、一人老けていたというような、浦島太郎のようにはならなくてすみそうだ。

『彼』。『工藤新一』の声を聞いて、ほっとした。自分からかけなくても、彼は何度も何度もかけてきてくれる。声が聞ける。勿論、ほぼ半日、一人籠の中の小鳥状態で、部屋で一人暇をもてあましているときにこの声を聞いたときはうれしかった。

それでも。

それでもあの時とは違う。

何度も声が聞きたい、顔を見たいと思っていたあの時とは違う。

会いたくて会いたくて仕方ないのに、

会える状態だったのに、どうしても会えなかったあの時とは違う。



まだ大丈夫。一人でやれる。  
そう思っていた。

なのに何で電話をくれるの？

そして『あの時』はくれなかったの？

「勝手な人……」

もし、彼が「工藤新一」に戻った後も、変わらず前と同じように、先ほど彼が言った「コナンと哀の関係」であり続けていたとしたら、あの願いはなかったのかもしれない。こんなややこしい世界にいることも。もしかしたらあのロータリーを歩き、あの老婆に出会うことすら。

実際、彼自身、志保<sup>じほ</sup>たちのことを忘れてはいなかったと言った。忙しくて、会う機会はなかったけれど、『一度たりとも、忘れてはいなかった』と彼はそう言った。

けれど、あの時　。

否、『此処』にくるまで、そうは思えなかった。

元に戻ったらもう自分たちの関係は終わってしまった。そう自分は思い込んでしまっていた。

いや、江戸川コナンが工藤新一に戻ることで、自分たちの『支えあう関係』『相棒』も希薄になる、あるいは無くなることはわかっていただけ、実際に起こってしまうと、自分の周りに起こる環境の変化と相成って　。

自分の精神状態が弱かったのだ。彼のせいでもない。わかっていたことを受け止め切れなかっただけ。受け止める器が小さかっただけ。

そうして願ってしまった。あの老婆に出会って。わけのわからない世界を作って。

そうやって「彼」に 「工藤新一」に、また守ってもらおうとしている。

助けを求めようとしている。

いや、もう既に彼にしがみ付いている。

そうして、彼もまたそれに応えようとしてくれている。守ろうとしてくれている。助けようとしてくれている。

もう、組織はなくなったのに。

守ってもらうことなんて、ひとつもなくなったのに。

『守ってやつからよ』

あの言葉はきくと、一生私の心を捉えついて離れないのだろう。

たとえ、あの人が彼女と結ばれても、  
たとえ、私が誰かと恋に落ちても、

もう、あの人が自分を守ろう、助けようと一切思わなくなる日が  
来ても、

あの言葉だけは、きっと

私の心に喰らいついて

離れない。

朝食を終え、ちょうど洗濯を終えた洋服を干しに、籠を持ってベランダを向かう。

現在、朝の9時を迎えたころだった。ふと下を見れば、アパートを超えた石塀の向こうに、籠をしょって、たくさん種類の花々を載せたリアカーを引いてゆっくりと歩いている老女。

「おばあさん…っ」

「おお、おはよう。よく眠れたようだね。部屋で缶詰になって詰まらなくてストレス溜め込んでいたと思っていたけど」

「別にこんなの慣れてるわ。長いときは1ヶ月食事以外誰とも会わない日もあったし」

「…あれまあ。不健康だね…何でまた」

「それでも、私にもいろいろあるのよ」

「そうかい、それはすまなかったね。あんたを甘く見ていたようだ」

老女は、脂で黄ばんだその歯を隠そうともせず、カラカラとしゃがれた笑い声を上げた。

「でも、半分は正解よ。少し暇を持て余していた。…そんな時」

「『ヤツ』の電話がかかってきたんだね」

「…『ヤツ』…そうね」

大袈裟に『ヤツ』という、二文字の発音だけ大袈裟に言う老女の表情と、その言い方に志保は思わずぶつと噴出した。

『ヤツ』だなんて。

とある黒光りする生物を思い浮かべてしまったから。その頭文字をとって、『G』だなんて呼ぶ人もいる。

「ん？どうしたね??」

「いえ、別に…」

老女自身も、それを思い浮かべて言っていたのかニヤニヤと笑っていた。そんな老女に苦笑いを浮かべながらも、志保はちよつと待ってと、ベランダから声をかけ、玄関に向かうと、サンダルを履き、鍵を閉め、老女のもとへ向かう。

「ベランダでもよかったのに」

「あんなところから声張り上げても、みつともないでしょ」

「言つたら、こちら辺にはあたしとあんな以外、誰もいないんだ。ここはあたしの『細工』をかけなければ、ただの廃墟だからね。あたしたちの声を聞いているのは、そこらへんにいる野良猫たちみたいなもんさ」

「…それはそうかもしれないけど」

それでも未だに信じられない。

ここが本当は『廃墟』であるだなんて。自分が住んでいた部屋は？自分が見ていたテレビは？寝ていたベッドは？調理した器具は？

一体何からできているのだろう。

「で？何か情報は？」

老女の声に、志保はハッと我に返った。

「花言葉ですって。…あの日、私にくれたカンナの花に魔法をかけて…」

「…ほお。そうかね。花好きなあたしが考えそうなことだよ」

「…何、その人事のような言い方。…お婆さんが昔考えたことじやなかったの？」

「さあね。そうだったかもしれないし、そうじゃなかったかもしれない。あたしも年だからね、昔のことは忘れたよ。それに、それを知った上であたしにどうにかしろといわれても、どうにもならないことだっていうのは前にも言っただろう？」

「…そうだけど」

支離滅裂だ。人に訊いておいて、その言い草はないとは思ったが、深くは追及しないでおくことにした。

「でも、よかったじゃないか。…まさかすぐに会えるだなんて、強運なやつらだね」

「そうね」

「あんたとお別れするのも、案外早いかもしれないね」

「…だったらいいわね」

「…おや、つれないねえ。寂しがっておくれよ」

眉を顰<sup>ひそ</sup>めて笑うと、老女はポケットからタバコと取り出し、土気色の皺皺の手を震わせながらライターに火をつけた。そうして美味しそうに吸う。出会った時からタバコのおいが服についていたけ

れど、実際目にとると、また違う思いがわいてくる。

「なんだね？そんな顔をして」

一服吸って、白い息を宙に向けて吐き出した後、志保の視線に気づいたようだ。老女はきょとんとした表情で彼女を見上げてそう聞いた。志保もまた、自分がいつの間にか表情を曇らせていたことに気づき、老女の言葉に少しだけ表情を柔らかくほぐしてみる。

「…体に毒よ。もう若くないんだから…」

「まあいいじゃないか。あたしだって自分の体のことくらいわかってるさ。若いときより、これでも量は減らしたつもりだよ。朝、仕事に行くときに1本、昼食後に1本、夜も食後に1本。…そう決めてここ10年ほど通していたけど。…それでもダメかね？」

挑戦的な、というかニヤリ、いたずらをしでかした子どもが親に屁理屈をこねているような、そんな顔。媚びているような、それでも何か裏に考えているような。

「…まあ、お婆さんがそういうなら、私は口出しすることではないのかもしれないけど」

出会って2日ほどしか経っていないし、いつ自分はまたこの女性の前からいなくなるかもわからないから。そんな自分に対して言われても、きつと迷惑なだけなのかもしれない。それでも言わなければ、言っておかなければいけないような気がした。

「そんなに心配してくれるのかい？」

「…そんなのじゃないわ」

「素直じゃないねえ。顔に出ておるわ」

クツクと笑って、老女は言った。

「よく言われたわ、私ってそんなに素直じゃないようにみえるかしら？」

そう思われていたのだろうか。

直接そういわれたのは、2人だけだったけど。

自分の実姉である宮野明美と、江戸川コナン（工藤新一）。博士も、少年探偵団の皆も薄々そう思っていたようだけれども、それを直接彼らの口から聞くことはなかった。言う相手は1人で十分だと思っていたようで。それでも、その言葉を彼の口から聞くことは多かった。

「そうだね、今も、ほれ」

老女の皺だらけの、何十年も年を刻んだ右手の指先が、志保の端正な顔を差した。

「…え？」

「言葉では嫌そうに言っているけれど、口元が笑っておる」

「…あ」

思わず頬を赤らめて、志保は口端に指を当てた。それを見て、老女はおかしそうにヒツヒと笑った。それから、急にまじめな顔になって、ぼそりと呟いた。

「…早く帰らせてあげたいね」

「ありがとう」



志保の言葉に、老女は口元を力なくあげて見せた。そうして、タバコをもう一度吸う。ぷうっと白いわっかが見えたような気がした。美味しそうに吸う姿を、志保はどうしても気になつてずっと見つめていた。

「そんな顔をせんでいてくれよ。あたしはまだ81だ。当分タバコが原因で死ぬつもりはないからね」

「タバコって。他の原因なら可能性は否定しないのね」

「そうなたときはそうなたときさ。・・・あたしの朝のコレは、あんたたちの朝飲むコーヒーや栄養剤と一緒にさ。生きる元氣が出るんだ」

「そつちを飲んだ方が全然いいと思うけど」

「あれは味が嫌なんだ」

「またそんなことを言つて。…それじゃ、昼と夜の1本をやめればいいじゃない」

「あんたあたしの楽しみを取るのかね？さっきあんたは確かに口出しすることではないと認めたじゃないか」

片眉を上げて、わざと意地悪っぽく訊く老女に対して、志保は苦笑した。

相変わらずの減らず口を叩く人だ。けど、自分も。まだ、2日しか会っていないこの老女に執着するのはなぜだろうか。こんなに不安になるのは、心配になるのはなぜだろうか。同じように、昔の自分と同じように長い間『ひとり』でいたから？『81』という、見かけより思いのほか高齢だったから？そんな彼女を残してまたいなくなってしまうことへの背徳感？

「大丈夫だ。心配するなつて言つてるだろ」

カラカラと笑って、老女は吸っていたタバコを地面にぽいと捨て、足で揉み消した。

「そいじゃ仕事に行ってくるから。あんたもゆっくりしててな。くれぐれも必要以上に外へ出て、誰かと接触しないように。…まあ、今のあんたならこの世界に残るだなんてバカな考えはないと思うから、誰かと会っても問題ないような気もするけど。念のためな『あんたではないあんた』を知っているやつらが誤解して、何かしでかしても大事になるだけだしね」

「…そうね、わかつているわ」

「それじゃ、またね」

「ええ。夕飯作って待ってるわ。何が食べたい？」

「そうだね。…今日はさっぱりと鮭粥がいい」

「了解」

くすりと笑うと、老女も顔をくしゃつとさせて笑った。嫌味も何もない、真正正銘の笑顔。きっと心からの笑いなのだろう。その笑顔を、純粹にかわいいと思った。

「それじゃ、気をつけてね、行ってらっしゃい」

動き出そうと力を込めた老女の手が一瞬止まり、はあと溜息をついてから老女はぽつりと呟いた。

「…何か、こういうのもいいもんだね」

「え？」

目を細め、志保から目線を外し、遠くのビル郡の方へと目を遣る。

「誰かに見送られるのも。…あたしがずっと願ってたことだ。…」

「そうだ、あのときもこうして」

「え？」

「…いや。何でもない。…秘密じゃ」

少女のような目をして、老女はまた、いたずらっぽくカラカラと笑った。

「何よ、もう」

志保も思わず笑みがこぼれた。その先は訊こうとは思わなかった。何か甘酸っぱい経験があるのかもしれない。それを無理に訊くことはしなくても、いつかは話してくれるのかもしれないし、内緒にしておきたいものなのかもしれないから。

「じゃあね」

「ええ、いつてらっしゃい」

そのフレーズにやっぱり嬉しそうな表情をして、それからリアカの持ち手の場所に力を込め、ゆっくり歩き出した。

のっそり、のっそり。今日は一体どこへ行くのだろう。また同じところだろうか。足取りは、ゆっくりながらもしっかりとしていたから、少し安心はしている。老女の姿が小さくなって、角を曲がってその姿が見えなくなるまで、志保はずっとその後姿を目で追い続けていた。

## 第22話 残るフレーズ（後書き）

メールが壊れました。

実は哀ちゃんサイトにて副創作人として小説を書かせていただいているのですが…

メールが開けません。調子悪いのかな？

このままじゃ更新できない！

どうしよう><な近況でした（笑）。if・・・でも書いてようかな（笑）。

少しずつ書く意欲がまた出てきたのに。

というわけで、こちら昨日、久しぶりに書きました！製作時間多分3時間くらい。

コンピュータ側から、「この作品は約ヶ月以上更新されておらず、この先も更新されないかもしれません」的なことを書かれるんですが、その文字が

今回出される前に書いてみました（笑）。

書きながら、老女の言葉を考えながら、話をつなげつなげて、ラストを構想するという・・・。

今回ばかりは、ちゃんとノートにラストを書いているんだけど、中身は決めてなくて。

相変わらずの行き当たりばったりですが、これでよいのでしょうか。

。。（笑）

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8094a/>

---

雨と老女と花と私

2010年10月10日17時20分発行